

山 ぎ ら

第43号

平成24年11月

関東氷上郷友会



新社屋 落成

平成23年10月吉日 埼玉県桶川市に新社屋が完成
敷地面積 4,000坪 建物面積 2,000坪

最新鋭設備を備えた物流センターが、いよいよ稼働
明日への発展を祈願して10月11日大安に営業開始



三協運輸株式会社新社屋 完成図

住所 埼玉県桶川市坂田字向 990-1

〔主要取引先〕 順不同

三井化学(株) 味の素(株) ダイキン工業(株) アサヒビール(株) 三菱商事(株)
麒麟ビール(株) 沖電気工業(株) 古河電工(株) ハウス食品(株) 帝人(株) 新神戸電機(株)

三協運輸 株式会社

代表取締役会長 岸本 勲(水上町出身)

本 店 埼玉県桶川市坂田字向 990-1 TEL. 048 (728) 9380
E-mail : sankyounyu_saitama@h6.dion.ne.jp

本店配車センター 埼玉県桶川市坂田字向 990-1 TEL. 048 (729) 0466

大阪支店 大阪府大東市新田中町 3-3 TEL. 072 (806) 2821

物流倉庫所在地 東京・埼玉・神奈川・名古屋・大阪

山 ざ ら

第43号

杖つきつ母をしのぶや秋の風



山ざる 第43号 目次

〈表紙〉可部美智子作陶彫“和樂童子”／〈目次・扉〉俳句Ⅱ渡邊隆男／写真Ⅱ徳田八郎衛

山青くして……坂上勝朗 5

平成23年度「ふるさとの会」開催……6／足立晃二郎氏講演要旨……8

平成23年度「ふるさとの会」出席者……10／祝寿の方々ご紹介……11

会計報告書……17／懇親会スナップ……18

《ふるさと随想》

ふるさとの春に想う……上嶋清能 22

各戸まわりの脱穀機……大槻作治郎 24

氷上とテキサス―わが心の氷上郡……久保良雄 26

父の出征……丸川健三郎 30

沼貫音頭のことなど……南部 光 34

「お杉地蔵」のこと……足立典子 38

《近況・エッセイ》

カーネギーデビュー……山森直美 48

音楽を読む……三浦 宏 52

黒の中の寡黙な妖精 銅板画家丹阿弥丹波子さん……藤原ひさ子 55

報徳の巨星 佐々井さんの思い出……鴻谷正博 59

軽井沢―伊香保の旅……内堀祥司 62

世相雑感……有田睦信 65

折々の記(9)……井本義一 69

《インタビュコーナー》

浅野智哉さん／「ありがとう」の源流は丹波にあり……編集部 90

《丹波ブランド紹介》

〈その3・檜皮簀〉独自の技術を引き継ぐ……小田晋作 95

《追悼》

追悼座談会 恩師植田憲雄先生を偲ぶ 100

息子から見た「教師・植田憲雄」……植田茂樹 106

《東日本大震災の被災地から》

「平成三陸大津波」被災地の現状……野村節三 112

東日本大震災に思うこと……足立東一郎 123

被災地を再訪して……上 高子 122

東日本大震災から一年……坂上 登 125

《ふるさと発信》

《丹波通信》丹波の彫刻家「磯尾柏里」3代……荻野祐一 130

丹波Uターン生活パートⅡ……直田 正 134

『破戒』のモデル 大江礒吉の柏原時代……荒木 謙 137

《郷土研究》丹波林業の現実……徳田八郎衛 142

《丹波を撮る》……徳田八郎衛 41

ふるさとトピックス（丹波新聞から）……47

《私の職場》番組制作の楽しみ……上野重喜 76

《MYギャラリー》岡 吉明／三觔拍洋／藤原ひさ子…… 81

《山ざる文芸》俳壇・詩座・歌壇…… 85

《山行記》山と温泉に魅せられて・V 山本喜則……109

会員だより……146 寄附者芳名……153 BOOKS……154

《インフォメーション》平成24年度柏陵同窓会東京支部総会・懇親会……157

《協賛広告》……162／編集後記……174

里の秋

齋藤 信夫／作詞
海沼 実／作曲

しずかなしずかな 里の秋
お背戸に木の実の 落ちる夜は
ああ かあさんとただふたり
栗の実 煮てます いろりばた

あかるいあかるい 星の空
鳴き鳴き夜鴨^{よがし}の 渡る夜は
ああ 父さんのあの笑顔
栗の実 食べては おもいだす

さよならさよなら 椰子^{やし}の島
お舟にゆられて 帰られる
ああ どうさんよ御無事でと
今夜も かあさんと 祈ります

山青くして

会長 坂上 勝朗



東京・神田は、私が会社勤めの四十数年を過ごしたところで、暇が出来るとつい行ってみたくなるころの古里でもあります。なかでも神保町の古書店街は、懐かしさを通り越した存在で、あの古本独特のにおいがたまりません。思えば、心の滋養になつた本の多くに、この街で出会つたのです。

この日も幾冊かの「滋養」を買い回り、例によつてその名もゆかしい喫茶店「さぼうる」に入り込んで、いちいちの本との初見えを楽しんだのですが、なかの一冊に、いろいろなジャンルの詩歌の短冊片を、縦横にデザインしたカバーのかけられているのがありました。

そのうちの漢詩に、杜甫の「絶句」があり、「江碧鳥逾白 山青花欲然」（かわみどりにして鳥いよいよ

白く 山青くして花燃えんと欲す）と読めました。とたんに、六十年を一気にタイムスリップ。裸電球が四個ぶら下がっている、夜学の教室がありありと蘇ってきました。（私は当時成松中学校に間借りして開設されていた定時制高校に四年間学びました。）

この詩はあと「今春看又過 何日是帰年」（今春みすみす又過ぐ いずれの日かこれ帰年ならん）と続く、杜甫の望郷詩のひとつで、故郷とは、こんなにも恋しいところなのかと、実感のないながら、先生の語訳に感じ入って聞いていたことを思い出していました。

杜甫は高い志と、類まれな文才を持ちながら、心ならずもその後半生の大半を放浪に明け暮れたひとで、五十九歳の生涯を、さすらいの果ての舟中に終えたのでした。この詩は杜甫五十三歳、蜀の成都在住のころの作といわれています。彼の恋い焦がれた故郷は、唐の都長安（現在の西安）。

コーヒーもすっかり冷めて、現実引き戻されてしまいました。ほんの一瞬ながら、思わぬ古里への回帰を果たし、こころほのぼのと店をあとにしたことでした。



平成二十三年度の「ふるさとの会」は十一月十九日（土）十一時より、昨年まで長く開催してきた九段会館が東日本大震災の影響で利用が出来なくなったため、東京都千代田区の学士会館で行われました。

総会では坂上勝朗会長より三月十一日の東北大震災に際し、被害に遭われた会員の皆様に柏陵同窓会と連名でお見舞い状を送り、幸いにも人的被害がなかったこと、また震災状況のご返事は「山ざる」誌に掲載させて頂いた旨の報告がありました。

引き続き議事に入り、谷口副会長（会計担当）よりの会計報告・監査報告・会務報告があり、会場より拍手で全ての議案が承認されました。

その後、満八十歳を迎えられた郷友の方にお祝いを申し上げる「祝寿会」に移り、ご案内を差し上げた十七名のうちご参加頂いた上村愛子さん、大野善三さん、前田和秀さん、藤井宏次さん、三浦セツさんに坂上会長より祝辞と花束が贈られました。

総会に続いて、兵庫県知事と所用が重なって参加出来なくなった丹波市長よりのお祝いのメッセージが披露されて総会は終了、いよいよ参加者期待のアトラク



花束を抱えた祝寿の方々

シヨンには丹波市青垣町よりおいで頂き、今テレビでもご活躍の「廃品を活かした手作りリサイクル楽器による音楽漫談、マエストロ足立」こと 足立晃一郎さんにバトンタッチ、軽妙な口調の経験談を交えながら、これが廃品の音なのかと疑う透明な音色の「ほう

き笛」「注射笛」「ホース笛」、また壊れたタンバリンを利用したウクレレ演奏「浮くレレ（浮き輪のウクレレ）等々信じられない音色に会員の感激の拍手の中あつとい

う間に予定時間が終わってしまうという楽しいひとときを過ごしました。

懇親会は岸本副会長の司会で開会、丹波新聞荻野社長乾杯の音頭に公演を頂いた足立晃一郎さんも交え、いよいよ丹波訛りの抜けきらない会話の輪があちこちに広がり、いつもの楽しい宴会になりました。

恒例のお楽しみ抽選会は参加者全員にチャンスがあり、空くじ無しで「丹波の山芋」、「丹波黒豆」、「黒豆・丸大豆の煮豆」などがそれぞれ全員に渡るようにされ、参加者全員何かのお土産を頂いて帰ることが出来ました。また郷友会でもコーラス同好会を作ろうとムードが上がってきた中、合唱指揮者の笹倉強先生の指揮、マエストロ足立さんの伴奏で『里の秋』の大合唱になり、皆さんの音楽レベルの高さに大いに驚かされる盛り上がりを見せました。

和やかで盛会な会も中締めとなり、一〇二歳まで頑張るゾー！と、いつもお元気に参加頂いている足立和巳さんの三本締めで、来年また元気に会えることをお約束し閉会となりました。

(岡 吉明・記)

足立晃一郎氏講演要旨

―廃品手作りリサイクル楽器による音楽漫談―

「リサイクル楽器でリサイタルのマエストロ足立です。足立姓ばかりの田舎で育ちました。丹波の言葉と篠山、大阪の言葉を遣ってお話しさせていただきます」と、アンデス地方のポンチョを身に纏い、ギターよろしく箒の楽器を抱えたマエストロ足立氏の挨拶からリサイタルが始まりました。



ケーナで「コンドルは飛んでいく」、箒の枝で「里の秋」、スキーのストックで「赤とんぼ」、ビニールのホースをくりぬいて「さくらさくら」、注射器の穴を押したり引いたりして「ドレミの歌」、集めるのに三年かかったという自転車ベルで「チューリップ」「ジングルベル」、スチール缶に釣り糸・バトミントンの糸・ギターの弦で沖縄音感の「氷上町音頭」「津軽三味線」、タンバリンの皮を外し、4本弦でウクレレを浮き輪の

〈講師紹介〉 1953年青垣町生まれ。在住。柏原高校24回生卒。鳥取大学（落語研究会入部）卒業後、電子技術者として就職。1980年退職後、中南米を旅して現地の民族楽器に親しむ。1982年小学校の教員となり、傍らアンデス楽器の演奏や楽器作りを始める。教材として身近な廃材を利用した手作り楽器を児童と共に作る。リサイクル楽器と漫談が話題となり、TV出演や各所で演奏多数。丹波や川崎市でアイデア賞や特別賞を受賞。現在、篠山市立篠山養護学校教員。

中に入れて、「あーやんなっちゃった！驚いた！」、ジョウロでトランペット、ピアノを頭で演奏「フーテンの寅さん」「すばる」「北国の春」、ストローを平たくして「赤ちゃんの泣き声」「鶏の鳴き声」「イヤヤ」「アイヤ」「チャルメラ」「柏原高校応援歌」、リコーダを二本口に入れて演奏など。

「こんなことを二五年やってきました。今日も楽しくやらせていただきました。退職後にはフランスで、ジョウロとウクレレを使った演奏をしてみたいと考え



浮き輪のウクレレを演奏する足立晃一郎さん

ていますが、アハハと笑うと免疫力が上がります。歩くのも身体にいいので、笑うと歩くを一緒にやると一層効果が出てきます。外でやる時は「あいつおかしいで！」と言われないように頼みます。お友達が減るといけませんから……」（大笑い）

リサイクル楽器は、楽器になる物を探すひらめきと、楽器にする手先の器用さと、演奏する技術が求められますが、いとも簡単に様々な身の回りのものを楽器に

しておられ、それぞれの楽器からいい音が出て、きれいなメロディーになっており、その優れた知恵と技術と音感が見事にマッチしていたのには驚かされました。

大学時代の落研で磨かれたお笑いを合い間に入れながら、手作りのリサイクル楽器を駆使して、誰もが知っている曲を見事に演奏してくださり、楽器に見とれ、見事な演奏に聞き惚れ、ジョークに笑い転げ、正に、人々に見せて聞かせて楽しませることができる愉快な「マエストロ足立の世界」を堪能させていただきました。

ふるさと会終了前には、笹倉強先生の指揮による全員の二部合唱「里の秋」や、柏原高校校歌斉唱に箏ギターで伴奏していただき、参加者皆の心が一つになり、ふるさとを懐かしむ温かい一時が流れたのでした。

足立晃一郎様には、遠いふるさとから、朝一番に会場に駆けつけてくださり、楽しい笑いと音楽を運んでくださり、心を和ませていただきました。ありがとうございました。

（文責・岡田昌子）

◎平成二十三年度「ふるさとの会」出席者

(順不同・敬称略)

〈来賓〉

東 徹志 兵庫県東京事務所所長

長谷川進也 兵庫県東京事務所主任

荻野 祐一 丹波新聞社社長

〈祝寿〉

上村愛子 大野善三 前田和秀

藤井宏次 三浦セツ

〈会員〉

○青垣町(3名)

足立悦雄 足立和巳 足立和代

○市島町(7名)

高見秀史 鶴田ゆき子 藤田千治 藤田 純

藤田 徹 丸川健三郎 丸川宥次郎

○柏原町(15名)

上村愛子 大野善三 岡 吉明 岡 洋子

岡田昌子 岡田充利 岡田艶子 可部美智子

久保田元子 谷 敬三 出町京子 藤本芳子

前田和秀 三觜洋子 吉田素子

○春日町(5名)

井手梅野 木呂子惠美子 近藤仁司

松田けい子 松田寛子

○西脇市(1名)

笹倉 強

○多可郡(2名)

笹倉郁子 藤井宏次

○山南町(13名)

池田 忍 植木十和子 梅田重二 大野義昭

久保良雄 久保春雄 勢川武彦 仲 一聰

中居篤子 藤本貴士 原谷洋美 三浦セツ

若森敏郎

○氷上町(18名)

池上忠志 足立謙悟 堤 康子 足立吉雄

井上 巖 上 高子 上田道代 上野重喜

上野忠明 岸本 勲 岸本敏子 岸本拓也

坂上勝朗 谷口浩章 藤田玲子 本城英明

山口和久 山森直美

祝寿の方々と紹介

郷友会では毎年の総会で八十歳を迎えられる会員に祝寿のお祝いをしておりますが、今年その記念の年に当たられる23名の方に、以下の項目でアンケートを依頼しました。そのうち、10名の方から回答頂きましたのでご紹介します。(誕生日順)

- ① 生年月日
- ② ご出身地
- ③ 上京の年月日
- ④ 上京の動機
- ⑤ これまでに最も印象に残ることは
- ⑥ 祝寿を迎えられてひと言

〈生まれた年〳昭和7年・壬申・1932年〉犬養首相が暗殺される暗い世相（5・15事件）。満州建国宣言がなされ、夢を満州に求めて第一次移民団が出発した。また古賀メロディの「影を慕いて」が庶民の心にやるせない哀愁を吹き込んだ。

笹倉 強様

- ① 昭和7年2月10日
- ② 西協市鹿野町
- ③ 昭和26年3月26日
- ④ 大学進学のため
- ⑤ 教職に就いて音楽で国際交流が実現したこと。昭和39年6月、米国シアトル市イングラ

ム高校合唱団の来日にともないホームステイと学校で交換会、共立講堂で合同の演奏会開催、昭和4年6月米国、フィラデルフィア市フランクオールド高校合唱団の来日にと

もない、交換演奏会開催。

昭和45年7月国際音楽教育会議に日本代表としてモスクワ市に合唱団を引率し、チャイコフスキー音楽院ホールにて演奏会。女優岡田嘉子氏に会えたこと。演奏はTVニュースと映画になった。

⑥ いつの間にかこの年を迎えられ、皆様のお蔭と感謝申し上げます。

足立 稔様

- ① 昭和7年2月13日
- ② 大阪にて出生、昭和19年9月疎開のため父の本籍、現丹波市氷上町香良に転居。高校卒業までを過ごす。
- ③ 昭和40年4月

祝寿の方々と紹介

④勤務先企業の仙台支店より東京本社に転勤のため。

⑤仙台にて第一子（長女）誕生。今回の東日本大震災を思うにつけ、被害をお受けになった方々には大変お気の毒ですが、自分が仙台に居るときでなくてよかった、運が良かったとつくづく思います。

⑥昔の小学唱歌の「村の船頭さん」の歌詞に「今年六十のお爺さん」と有りました。当時八十と言えば多くの方々が鬼籍に入られました。



傘寿を迎え、お蔭様でまだゴルフもプレー出来ます。丈夫に育ててくれた亡き両親に感謝です。

澤田みさを様

①昭和7年4月5日

②大阪市、疎開で柏原町に移住。

③昭和62年

④夫の転勤に従って。

⑤歴史

⑥38年前、キリスト教の洗礼を受けました。それ以前も後も神様のお守りと多くの方のお支えにより、幸せにも80歳を迎えることが出来ました。キリスト教徒として何も働きが無いままですが、高齢の現在唯一つ可能と思える「祈り」

により真剣に取り組みたいと思っております。世界中（衛星中継の人工の星が飛び交う宇宙まで）神様が望まれ、全てが幸せに満ちるよう祈り続けたいと思っております。四季それぞれに山川の美しい波の自然、戦中戦後の苦しい中にもかかわらず、幼かった頃の楽しい思い出、親しくしていたいた方々の懐かしい面影、いつも盛大で親睦的な「郷友会」。充実した誌面が誇らかな「山ざる」すべてに感謝申し上げます。

安原三智子様

①昭和7年4月8日

②神戸、空襲で罹災したので水

祝寿の方々と紹介



上郡芦田村へ移住。

③ 昭和39年3月

④ 夫の転勤のため。

⑤ 神戸の3月の空襲で一晩中家族で逃げたこと、田舎の生活で多くの事を知ったことは私にとって、とても勉強になりました。

⑥ ここまで長く元気でいられるとは思ってもかけなかった。時代にはついていけないけれど毎日を楽しく過ごしています（元気で一人で病院通いが出来る事）

笹倉 静子様

① 昭和7年4月17日

② 黒田庄（20年～23年）疎開地

③ 昭和33年6月

④ 結婚

⑤ 生活全般の変化の速さ

⑥ 自分自身が今日迄元気に若い時から続けている活動（コーラス）が出来事にびつくりし、感謝して居ります。

喜田 綾子様

① 昭和7年4月24日

② 西宮市。昭和20年8月6日阪

神大空襲で焼け出され母の郷里氷上郡沼貫村小野へ疎開。昭和20年9月より柏原高女へ

転校。

③ 昭和41年3月、小中の子どもも転校。方言が違って慣れるまで大変でした。

④ 夫・大三の転勤。京大・農芸化学・土壌学より、大林組技術研究所が東京都清瀬に設立され、敷地内の社宅に転居。

⑤ 研究者の妻となることは、いつも時代の一歩先を行くこと。どんな時でも一番のアシスタントであること。80歳になってもアッシー君で昨年も仙台まで、被災地への調査に行つて来ました。粘土学会では外国人の人達ともお友達になれたり、スペインの学会ではこれまでに経験したこともないおもてなしを受けたり、パリの現場では市内ですら、地下鉄で行きましようと言わ

祝寿の方々と紹介

れたり、とても有意義な1か月間を送りました。

⑥誰も80歳になったと思ってくれる人がいなくて、まだまだ若いのだからやつてもらわなければと、次から次へ用事が出来てきます。戦争（本当の戦争とは）を経験した者ではないと言えないことがあります。私は花火見物はイヤです。身体が空襲のことを思い出ししてしまうのです。

私達の同級生は、戦争で焼け出された時のことを思えば、何があってもそこまでは落ちないでしょうと言って過ぎてきました。そして、ある物の範囲で工夫して家を創ってきました。病気になることも漢方や指圧で助け合って生きています。人々が私達を

必要としているうちは、生きましょう。

大石佐代子様

①昭和7年7月4日

②多可郡比延庄村下比延（現西脇市）

③昭和37年4月

④夫の転勤に伴う。この間、神奈川、東京、神戸と移り昭和47年より現在地へ。

⑤振り返ってみると色々あり、その中の一つ、今こうして山ざるとのご縁が続いているのは昭和47年だったと思うが小糸さんと再会できたことのように思われます。当時小学生も山から木を伐り出し校庭の炭焼き小屋で炭作り、いなど

取りをして供出、その後柏原高女と一緒に受験し、入学したものの柏原駅から勤労奉仕で山へ直行、帰りも駅にある井戸端で足を洗い汽車に乗っていた。通学も母の提灯の明かりで比延駅まで送られた時期もあった。

終戦になり学業は再開されたが、ツベルクリン検査で陽転。レントゲン検査の結果療養、復学したが、しばらく下宿生活。その後、私は神戸の高校へ転校。噂では小糸さんも東京の方へ帰られたとか。私も夫の転勤で関東へ。その頃のことのはつきりしないが連絡がとれ、小糸さんが我が家へ訪ねてくださり、感激の再会になりました。それを機会に郷友会を知り、女学校の

祝寿の方々と紹介

友達とも次々とお会い出来、ゴルフの仲間にも入れていただき、心安く、楽しい時を過ごさせていただきました。

⑥傘寿つて人ごとのように思っていたのにやってきました。家族も今では娘夫婦と犬3匹。神経痛も出たりそれなりに付き合って行かねば。

可部美智子様

- ①昭和7年9月15日
- ②神戸市東灘区魚崎町
- ③終戦直前の6月、在学中の甲南女子学園が戦災に遭い、氷上郡柏原町の伯父伯母（中井書店）に疎開、終戦まで柏原高女に通い、秋神戸に帰る。
- ④甲南女子学園専攻科英文科



（現甲南女子大）を卒業し、二年後結婚、銀行員のため東京、名古屋と転勤を幾度か重ねるが、名古屋で習い覚えた陶芸に打込み、公募展にて京都府知事賞を受賞、

⑤昭和55年、主人の急死後、子供達の応援もあり陶芸に拍車がかかり、東京都知事賞や文部大臣賞を受賞し、昨年個展50回を開くことが出来た。ただ単に、陶工で作品を作り焼成するのではなく、30数年前に京都醍醐寺で修行され、如

来の位を持たれた高僧に相見える幸せを得た。そして仏陀の正覚を得るため努力させて頂き、その歓びと感謝の心で作品作りに没頭出来た。

⑥今振り返れば、柏原の伯母は母の姉で、私は子供の頃から「おくに」と称して、柏原で夏休みを過ごしていたので、柏原の山と川の自然は忘れることのできない私の「ふるさと」なのである。そして、おかげ様で郷友会等で丹波の方々にお目にかからせて頂き親交を深めて現在がある。

今八十歳を迎え、このあたたかい丹波の方達の輪の中に入れて頂ける幸せをかみしめている昨今である。

祝寿の方々と紹介

千葉 淳子様

①昭和7年9月24日

②山南町大河

③昭和27年2月25日

④結婚

⑤結婚1年目に子どもが出来ました。実家で出産後、1か月余りで帰京の時、今度は子どもと一緒に車中ミルクを飲ませる時の大変なこと、今思うと嘘のような世の中でした。昔の映画やテレビを見ているとその頃が思い出されます。



⑥自分ではいつまでも若いつもりでおりましたが、今は本当に年だとしみじみ思うようになり、昨今は毎日病院通いが仕事になりました。もっと若いうちにあちこちに行き樂しみたかったと悔やんでも今では一人で丹波すら行けないかと思うと残念です。淋しい限りです。

どうか皆様には若いうちに懐かしい生まれ故郷丹波にも行き友人とも逢って楽しんで下さいませ。

藤澤貴代子様

①昭和7年10月5日

②大阪

③昭和34年12月

④結婚

⑤無事に主人を見送った日

⑥何ごとも自然のまま、日々感謝の気持ち。戦火の大阪を後に、田舎の小さな駅に着いた。中学1年5月の風景は今でも憶えている。これで学校に行き、のんびりとした田舎の生活が樂しみと大いに期待したが、次の日からは「疎開者」「よそ者」という目を度々感じ、学校でも度々出身地？と聞かれ、何のことか理解できず困った思い出がある。3年間暮らしてもあまりなじむことはなく、学校を京都と決め出発した日が嬉しかった。京都の学校では一度も質問されることがなく7年間の学生生活を樂しませてくれた。

会 計 報 告 書

(平成 23 年 7 月 1 日～平成 24 年 6 月 30 日)

関東氷上郷友会
会計理事・谷口 浩章
原谷 洋美

(単位：円)

収 入 の 部			支 出 の 部		
科 目	金 額	摘 要	科 目	金 額	摘 要
繰 越 金	2,367,262	郵便貯金 1,587,262	出 版 費	869,131	『山ざる』42号
		定額貯金 800,000	通信・印刷費	115,313	総会・役員会案内等
		振替貯金 0	総 会 費	569,504	総会関係支払
年会費収入	375,000	延183名	会 議 費	74,719	役員会等
総会費収入	402,000	60名	支払手数料	20,400	振替手数料
役員会費収入	75,000	25名	消耗・備品費	90,712	事務品・広告費・慶弔費
寄 付 金	251,000	延 67名	繰 越 金	2,269,315	郵便貯金 1,469,315
広告料収入	505,000	延 46名			定額貯金 800,000
冊子代収入	30,810				
そ の 他	3,022	利子			振替貯金 0
合 計	4,009,094		合 計	4,009,094	

以上

監査の結果、上記のとおり相違ありません。

平成24年 7 月 23 日

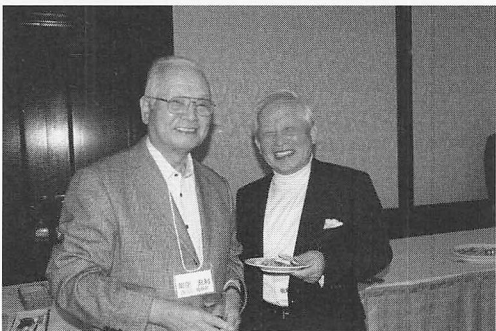
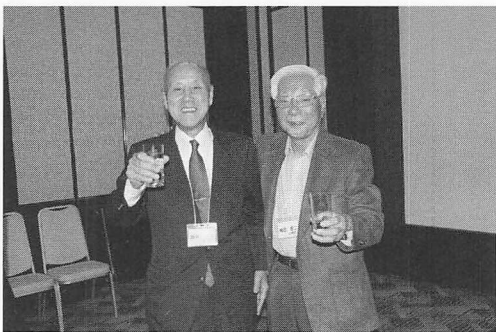
会計監査

岡 林 通 男
岡 井 小 五 郎

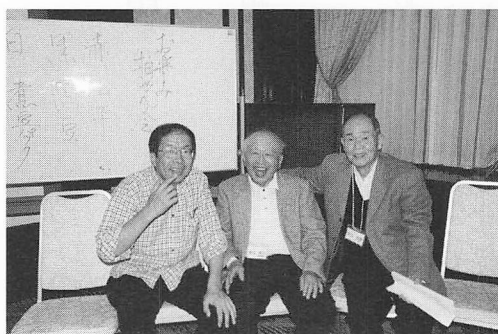
懇親会 スナップ

撮影：岡 吉明











(撮影：徳田八郎衛)

ふるさとの春に想う

上 嶋 清 能 (氷上町)

母の介護で、毎月一、二回、千葉から帰省するようになって早や八年になります。今年の春は大阪から福知山線に乗りますと、沿線のあちこちで満開の桜がひときわ華やかに目に飛び込んできました。柏原駅に着いて、桜の中に降り立つと冬の殺風景な姿から打って変って、何とも言えない高揚感を味わうことが出来ました。そんな気持ちと裏腹に、実家に着くと村は昔の面影が消えつつあり、家の数が減り、空家もちらほら見られ寂しい限りです。時代の流れとはいえ、何とかならないのかと、一人心中で呟いています。

そして介護をしながら、こんな夢想をしているところです。

五月晴れのある日、栃木県の足利フラワーパークに出かけたところ、広大な公園に所せましと植えられた大小さまざまな藤の木が見事な花をつけ、まるで

花の滝やカーテンのように咲き誇っている様に驚ろかされ、また、あたり一面に漂う甘い香りに酔いしれました。さらに、そこには首都圏や近県から、実に多くのお客さんがバスや車でこられているではありませんか。

藤は村の山にも自生しており、五月になるとひとつりと紫の花をつけていましたが、巻きついて木を枯らす厄介者と嫌がられていました。それが人間の手で品種改良され、公園に植えられ育てられると、このように人々の心を癒す素晴らしい藤に替わるんだということを目の当たりにした次第です。

そこで――

子供の頃遊びまわっていた村の神社のあたり一面に藤をはじめ、この土地にあった春・夏・秋に咲く草花を育てたら、さぞかしきれいになるだろうし、さらに近くのお寺で座禅や精進料理を体験できるプランを立てたら、きっと京阪神からお客さんを呼べるのではないだろうか。さらに野菜作り、米作りを体験できる場所も設けたいし、加古川での魚とり・川遊びもいいな

こうなると流行りの日帰りバスツアーも夢ではないのでは……。

そうすれば村にも少しは活気かもどり、ここなら住んでもいいかも、と思う人もできて空家が減り、子供の声ができる村が復活できるのではないかと。

こんな夢で頭の体操をしながら。母が一日でも長く元気でいてくれることを願い、介護を終えて桜吹雪の柏原駅を後にしました。

(昭和20年、氷上町小野生まれ／主婦)



(撮影：徳田八郎衛)

各戸まわりの脱穀機

大 槻 作治郎（市島町）

終戦前年一九四四年の秋、私が小学二年の時である。当時の前山村下鴨坂の部落（二四軒）には、一台の発動機式ベルト掛け脱穀機があった。稲架けの稲穂が干し上がった頃、この脱穀機を操作担当者が農家を一軒一軒持ち回って、庭先に据え付けて脱穀していた。作業中、よくベルトが切れたり外れたりした。

このポンポン音を立てて動く発動機が珍しく、我が家に來たときは、時間も忘れてじっと見入っていた。

今年は戦争が悪化してきたため、発動機の石油が手に入らなくなってきた。働き手が兵隊にとられて、人力では脱穀は出来ない。部落の区長であった父が、石油を入手する以外に有力な手段はなかった。

当時、父の兄の長男が海軍の将校で、舞鶴軍港に勤務していた。休暇で帰ってくる時は、真っ白な金ボタンの海軍制服に身を包み、地べたに着くような長い

サーベルを差して、かちやかちや音を立てながら意気揚々と歩いて、私の家に寄って行った。その姿は子供たちの憧れの的だった。実家はここからさらに三〇分程かかる村の奥にあり、いつも暗くなってから帰って行った。

名前が美代治だったので、皆が美代ちゃんと呼んだ。あんころ餅やおはぎが大好きで、いつも母がたくさん作ってもてなした。とにかく話が上手で、いろんな軍艦の活躍などを面白おかしく話した。皆は聞き飽きることがなかった。

舞鶴軍港には、海軍が艦船用の燃料油を大量に保管しているはずである。まだ爆撃も受けていない。父が海軍将校の美代ちゃんに頼んで、なんとか石油を入手する目途が付いたらしい。

学校が休みの日に、憲兵や車掌の目からカモフラージュするために私を連れて石油を貰いに、舞鶴軍港の美代ちゃんの下宿へ行くことになった。朝早く起き、自転車の後ろに私を乗せて丹波竹田駅に行った。駅で自転車を預け、福知山行きの列車に乗った。福知山駅で乗り換え、綾部を経由して東舞鶴駅で降りた。

美代ちゃんが下宿している下町の家に行くと、下宿のおかみさんが部屋に案内してお茶を出し、二股電灯のソケットから、たばこの点火プラグをコードでひいてたばこを吸い、畳に付けた焦げ跡を指して、くどくどと文句を言った。

本人は、昼休みに急いで海軍基地から戻ってきた。お土産のあんころ餅を差し出すと、早速おいしそうに食べた。下宿のおかみさんにもお裾分けをすると、先ほどの小言もどこへやら、大喜びだった。

押入れの奥に、下宿のおかみさんや誰にも見つからないように、新聞紙にくるんだ石油缶二缶が隠れていた。友人の燃料担当将校に、無理に頼んで、こっそり持ち出してもらったらしい。

ゆっくり話をしている暇はなかった。明るいうちに、家に持ち帰らなければならなかった。

私は、美代ちゃんの話に出てきた各種戦艦、航空母艦、巡洋艦、駆逐艦、潜水艦などが走り回り、停泊している舞鶴軍港の勇姿を一度見たかった。戦後、毎年天橋立には学校の海水浴で行ったが、一度として軍港（現在は海上自衛隊の基地か）の方面には行ったこと

がない。

重い二個の石油缶を、見つけれないように大きな風呂敷に包み、二人で下げて下宿を出た。列車の中では、憲兵や車掌に見付からないように、石油缶に腰掛けて隠した。

丹波竹田駅からは、二個の石油缶を自転車に載せたため、自宅まで一時間余の道のりを、私は自転車の脇に付いて歩いて帰った。夜までには家に着くことができた。

大酒飲みの父の、その夜の自家製の濁酒は、さぞかしおいしかったに違いない。

翌日から、発動機付きベルト掛け脱穀機を操作担当者、首を長くして待っていた部落の農家一軒一軒を持ち回り、庭先に据え付けて脱穀した。その年の部落の稲の脱穀は、燃料不足も解決し、やっと無事終えることが出来た。

各農家の庭先の柿の木には、当時子供のおやつであつた柿がまだ残っていて、子供たちが柿の木に登り、騒々しくとって食べていた。

（昭和12年、市島町下鴨坂／通商産業省工業技術院計量研究所）

氷上とテキサス

——わが心の氷上郡——

久保良雄（山南町）

◆氷上

本誌の読者には説明するまでもなく、氷上は「ひかみ」と読み、旧氷上郡のことを指す。氷上は現兵庫県丹波市と地域的には一致する。

私は氷上郡山南町の旧久下村に育った。鉄道の駅では谷川駅の近くである。

子供の頃、私にとって氷上郡は、自分とはほとんど無関係に存在する地理的空間だった。中国大陸がそうであるのと同様だったと言ってもいい。

子供にとっては自分が歩いて行ける範囲が全世界である。小学校、中学校時代を通じて、私の世界はほとんど山南町の久下村、上久下村、小川村に限られていた。山南町でも和田村はとても遠く、やや外の世界であった。

柏原や、新井村の母の実家にはたびたび行った。しかし、そこに行くには福知山線に乗り、奥野々坂トンネルをくぐらなくてはならなかったが、一旦トンネルを通ると地理的な繋がりが断たれて、意識の中ではそれは別世界となるのである。

福知山までも何度か行っている。当然、石生や黒井、市島などは車窓から見えている。しかし、頭の中では知っていない。心の中ではそれは自分の世界に繋がっていないのである。成松、佐治、幸世、神楽、遠坂となると、曲がりなりにもそこを見たということもなく、純粹に遠い遠い地の果てであった。

そして、その先、つまり他の郡のことであるが、それはもう宇宙の果てのその彼方にあつた。宇宙の外のことが人間の知恵では考えられないのと同じであつた。

驚くべきことに、この意識というものは、柏原高校に入って毎日、柏原に通うことになっても変わらなかった。

高校時代も、谷川と柏原を往復するばかりで、成松方面には行つたことがない。が、成松や幸世や遠坂の



私の家からは、南西の方向だけ山が切れ、その方向に加古川線が延びていた。三十年ぐらい前まではSLが貨車を引っ張っていた。

方から通ってくる級友達ももちろんたくさんいた。当然、彼等とごく普通に話したりもする。にもかかわらず、依然として私の心の中の氷上郡の像は昔とあまり変わらなかった。

大学生になり郷里を離れてから間もなくの頃、ある

友人と初めてその方面に出かけ、一気に行動範囲を広げて氷上郡の最高峰、栗ヶ峰にまで登ったことがある。しかし、このことがあった後も、心の中の氷上郡は小さくなることはなく、相変わらず無限に広がったままだった。夢の中で地理的な関係がしばしば歪んで現れることがある。多分、同じような心理作用によるのであろう。

私は山南町に住んで、成松の方をそのように見ていたが、一方、そちらの方に住む人たちにとっては山南町というのがそのような存在であつたらしいことを、後になって、東京で同郷の友人と会うようになってから、話の折節に聞くことがあった。

ところで、氷上と言えば丹波、丹波と言えば山奥と相場が決まっている。しかしながら、私の意識の中の氷上郡は必ずしもそうではない。

私が住む山南地区は播州に接し、谷川駅からは加古川線（私たちは播丹線と呼んでいた）が出ていた。そのため播州との経済的な繋がりが比較的に強かった。そして、加古川線の先には高砂の海があつたが、そこまでは途中で山らしい山もなくほぼ平に繋がっていた。

これらの土地は私にとって、むしろ神楽や遠阪よりも近く、もしかすると丹波の一部という錯覚があったかも知れない。というわけで、私の心の水上郡は割に平坦であり、海とさえもそれほど無縁ではなかったのである。

◆テキサス

テキサスというのはアメリカ合衆国の州の一つであるが、州の中でも飛び抜けて大きく、アラスカを除いては一番広くて、日本の面積の約二倍ある。何しろ、テキサス州の中でも、西の方の一部は、それ以外の地域と時刻帯が違っていて、州の中で一時間の時差があるほどだ。

一九七〇年代に、私はテキサス州の州都オースチンという町に一年余り滞在する機会があった。テキサスでは、ダラスとヒューストンが有名なくらいで、日本ではそれ以外の市はほとんど知られていないだろう。オースチンはこれら二つの市に比べるとだいぶ小さかったが、州のほぼ真ん中あたりに位置していて、州都であるということは歴史的には重要な町とのことだ

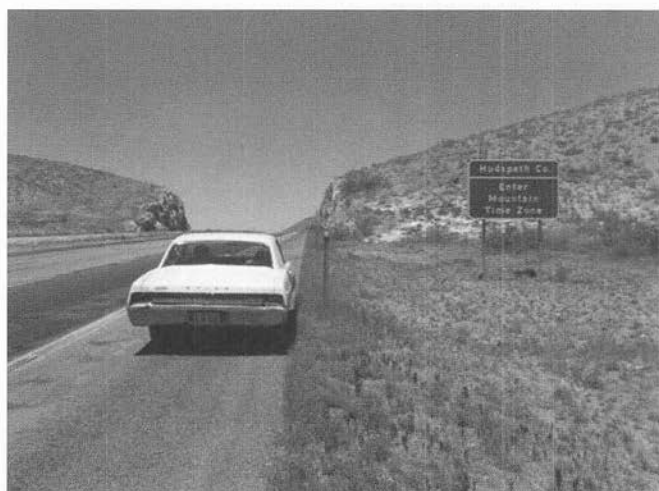
あった。もともと、最近はIT産業を中心に発展著しく、人口も大きく増えているらしい。

いずれにしても、テキサスの大半は荒れ地で、市や町はその中にぽつんぽつんと存在している感じである。もちろん、車がないと隣の町にも行けない。

当時勤務していた海上保安庁から派遣されて、オースチンにあるテキサス州立大学に留学したのだが、学位を取るというようなノルマも課されていなかったの、比較的自由な生活を送ることができた。妻と、生まれて間もない長男も伴っていた。

大学にはきちんと行った。しかし、夢のように休みが多かった。当時、日本では週休二日制は全く始まっていなかった。それが、彼の地では毎週土日は完全に休みである。大学だから夏休みもある。学生達と同じというわけではないにしても、結構長い休みが取れた。正に、遊ぶのに非常に適した環境であった。

このようなときの時間の使い方として、まず誰でも思いつき、そして実際に有意義であるのは旅行であろう。私のような立場の殆ど誰もがしたように、私たちもポンコツ車を運転して、だいたいあちこち旅した。車



テキサス州の中の郡境を示す標識なのだが、「これより山岳部標準時」という表示が見える。

でテキサス州の外に出たのは二、三度だけで、それ以外はもっぱらテキサス州の中だけだが、ちよつと遠出をするときは泊まりがけになる。そして、目的地に向かう道中は、たいていは何時間、風景に何の変化もない大地を走り続ける……。

そのようなときである。テキサスが、ふと氷上郡とダブるのだ。

面積は比較にならない。走つても走つても州の境界は遠く、その外には更に、北にも東にも西にも、実際問題としては私の行くことのできない陸地が無限に広がっている。

しかし、意識の中の氷上郡も果てがないほど広く、その先は霧の中に消えている。テキサスで二日がかりで行き着く北西部の地方が、神楽や遠坂以上の彼方ではないのだ。

一方で南に向かうと、テキサスは一部メキシコ湾に面している。それについても、メキシコ湾の海岸と高砂の海とどちらが遠いかというと、それはどつちとも言えないのである。そういうわけで、メキシコ湾の海も無理なく高砂の海に重なった……。

かくて、ひたすらテキサスの大地を走り続けながら、私の思いは、お釈迦様の掌の中の孫悟空のように、氷上郡を抜け出ることがなかった。

(昭和17年、山南町岡本出身／元海上保安庁水路部長)

父の出征

丸 川 健三郎（市島町）

昭和の記憶が薄れる一方で、昭和の記録を残しておくべきだとの主張も聞かれる。とくに、昭和の前半を覆う戦争とそれに続く戦後の混乱期、その実体験こそが残されるべき記録なのだろう。私の父には七年に及ぶ軍歴もあったし、それにまつわる母の体験も貴重ではなくあつたのだが、また、私にも昔のことを聞いておきたいと言う気持ちがなかつた訳でもないのだが、結局はあまり聞き出すこともないままに、両親は逝つた。以下に書くのは、聞くことの出来たわずかの部分の記録である。

父の軍歴

私の父が陸軍に入隊し、出征したのは昭和十二年（一九三七年）八月のことで、私の生まれたのも昭和十二年である。従つて、父の軍歴は私の成長と重なっているのだが、私はずっと後年まで、父の軍隊におけ

る役割などについて考えたことはなかつた。しかし勿論ある程度ことは知つていた訳で、例えば、父の頬にある茶色の傷跡、さらに、足の脛すねのあたりの傷跡が戦争の傷であることは聞かされていた。兄からその傷についての講釈を聞いたことがあるが、それによると、「鉄砲の弾はまず顔に当たつて、それが体の中を通り抜け、足から外へ出た」のだそうである。その話をそのまま信じるほどに、私が幼かつた頃のことである。

父は若い頃から、写真を趣味にしていたが、戦争で行つた先の中国でも沢山の写真を撮つていた。戦争の中でよくこんな撮れたものだ、と感心するほどである。父のアルバムには、軍人の写真もあることはあつたが、穏やかな農村風景などが多く、戦争の影は薄かつた。子供の時にそれを見ていたので日中戦争については少し誤つた印象を持つてしまつていたかも知れない。

戦争の実相や戦争での父の役割が気になつたのはずっと後年、私が中年を過ぎてからのことで、世間で「南京虐殺」が話題になつてからのことである。これが話題になつたのは昭和五十七、八年の頃であつたら

うか。当時は、父の軍歴についても、それは私の幼かった頃だった、と言う程度の認識でしかなかった。しかし、ちよつと調べてみると、南京での戦争が昭和十二年のことで、父の出征の年と一致していることは直ぐ分かった。日中戦争はよく知られているように、昭和十二年七月七日に北京郊外で突発的に始まったのだが、すぐに南の上海に飛び火している。日本軍は上海での戦いを有利に進めるために、すこし迂回して、杭州湾から新たに大部隊を上陸させ、上海の敵軍の背後に回らせる作戦をとった。父が動員を受けたのは、この杭州湾上陸作戦のためであつたらしい。これ以後、戦いの場は揚子江（長江）に沿って、蘇州、南京、と遡っていくのである。

これも後年分かつたことだが、父の軍隊での所属は工兵隊であつた。これは父の高等工業専門学校機械工学科卒業という学歴と関係があつたのかも知れない。軍隊ではもっぱら上陸用舟艇しゅうていを扱っていたらしい。エンジン付きではあるが、兵士を三十人から六十人乗せる程度の小さな船である。父は小隊長をしていたので、たぶん、これを数隻預かつていたと思われる。

* いわゆる南京虐殺のこと *

さて、世間で南京虐殺が話題になつてきた頃、父とそのこととの関係が気掛かりになつた。問題となつたのは、日本軍による一般市民あるいは捕虜に対する殺戮行為の有無、あるいはその規模なのだが、ここではそれは問わない。それへの父の関わり方だけに関心をむける。

あるとき、父に電話を掛ける用事があつたので、その序でにと、思い切つてそのことについて訊ねてみた。その頃、両親は宝塚に、私は札幌に住んでいたもので、長距離の長電話ということになつた。結果はかなり思い掛けないものであつた。父は日本軍の南京入城の日とされる十二月十三日の前後には丁度、南京周辺にいたのである。この日、中国軍は南京を撤退し、入れ替わりに日本軍が入る。虐殺があつたとされるのは、それ以後のひと月ほどの期間である。

父は日本軍の南京入城の前日、つまり、戦いのものとも激しかったときに南京郊外にいた。南京の街は揚子江に接しているのだが、父はその揚子江の川岸で舟艇を使って、兵士の上陸を助けていたのだつた。その

とき、川岸にいた父の小隊は、敵の飛行機による空からの襲撃を受けたことである。身の危険を感じた父はとつさに草原に伏せた。しかし、その時既に遅く、直ぐ近くに爆弾が投下され、父の隣にいた兵士は即死した。父も爆弾の破片を全身に受けて野戦病院に担ぎ込まれたのである。しかし、運良く一命は取り留めた。既に述べた父の頬の傷、足の傷はその時に受けたものであった。

南京虐殺に触れた私の問に対し、父は「戦時に起こったことを、平時の人達がとやかく言っても駄目だ」という趣旨のことを言った。父は多くを語らなかつたし、私もしぶとく追求することはしなかつた。とにかく、父は負傷のお陰で南京の市街には殆ど入っていないので、多くを知らないはずだ。このときの負傷は、かえって運がよかつたと言えるのかも知れない。

なお、父の軍歴は戦傷が癒えた後も続き、最後はずっと奥地の漢口まで、当時の最前線の動きに従って移動している。そして、出征の日から三年と少しで召集解除となる。しかし、帰休もつかの間で、太平洋戦争が必至の情勢となった昭和十六年七月再び召集をうけ、

満州（中国東北地方）へ、さらには千島へと配属された。幸いこちらの方はもっぱら警戒防備のためだけで、戦闘はなかつた。その後は内地勤務を経て、昭和十九年六月に除隊となっている。父の年齢で数えて見ると、二十九歳で最初の召集を受け、半年ほどの帰休を二回挟んで三十六歳で、ようやく除隊となったのである。

出征の日

父は軍隊生活が長かつたためか、家ではワンマンで、子供にとつては少し住みにくい家庭であつた。父が家にいるときには、いつでも命令口調の仕事の指示が飛んできたものである。

父は軍隊からの復員後、元の勤め先である軍需会社に復帰したが、そのおおりもあつて、我家は徳島市から、兵庫県の丹波地方へと引越した。その後、半農の生活や、終戦に伴う父の失職などが続くことになるが、このような生活環境の変化でもっとも苦勞したのは母だつたかもしれない。母は都会のお嬢さん育ちだつたから農村生活にはなかなかなじめなかつたのである。

父と戦争との関わりに関しては、母からもあまり聞

いたことがなかった。しかし、たまたま父の出征の日のことを聞いたことがある。関西への出張の序であつて、両親の家に立ち寄つた時のことである。それは丁度、私が還暦を迎えた年であり、母は九十歳間近になつていた。つまり、六十年も前のことを、お茶を飲みながらの話題にしたのである。しかし、意外にも、母は父の出征の日のことをしっかりと覚えていた。

「お父ちゃんはねえ、いよいよ出征という日の前の晩にあんたをお風呂に入れたんだよ」と母は言つた。

既に述べたように、私は父の出征の年に生まれており、誕生月は二月であつた。従つて、出征の時は生後六ヶ月ということになる。少し這い始めていただろうか。その私を父は抱いてお風呂に入れたのだつた。後年の父からは想像出来ないが、父も若いときには人並みに子供をかわいがつたのだ。その時、二人の兄は三歳と二歳だったはずである。戦争に行かねばならない運命を父は恨んだかも知れない。

そのとき、父はなかなかお風呂からあがつてこなかつたらしい。それで母は、いぶかつて風呂場を覗いたのだそうである。

「そしたらねえ」と母。

「お父ちゃんはね、あんたを抱っこしたまま、泣いていらつしやつたのよ」

私は思わず声を出すほどに驚いた。父が子供を抱き上げるのはともかく、涙を流す場面など、なかなか想像出来ないのである。

母はちよつと頬笑んでいるようにもみえたが、その視線はぼんやりと窓の外に向かつていた。そこには嬰兒である私とそれを抱く若い父とが浮かんできたのだろう。その情景は母にとつて忘れ難いものだったに違いない。その出征の日から、長い父不在の日々と、それに続く苦勞の日々が始まるのである。

父からの昔話も母からの昔話も、貴重なものであつた。しかし、もつと沢山の話があつてもよかった。いろんな昔話を聞き出すのも、ひとつの孝の道だろう、と今にして思うのである。

(昭和12年、徳島市生まれ、市島町喜多出身／北海道大学名誉教授、東京都江東区在住)

沼貫音頭のことなど

南部 光（氷上町）

小生はもと氷上郡沼貫村新郷の出身で、今は群馬県東部の大泉町というところに住んでおります。先年、大阪府枚方市在住の弟が「中学校の同窓会で沼貫音頭を歌える人がなくなつた」というのを聞いて「え？沼貫音頭？」ということになりました。中学校というのは沼貫村立沼貫中学校のことです。

小生は、昭和二十年春に大阪府布施市（現東大阪市）から沼貫村に疎開し、昭和二十八年春に柏原高校を卒業して（第五回生）進学上阪するまでの八年間、沼貫村に住んでいたのですが、沼貫音頭というのは聞いたことがありませんでした。あとで調べてわかつたのですが、この歌は昭和二十八年頃、つまり小生が沼貫を出た後にできたもののようです。弟妹たちは中学校の音楽の時間にこの歌を習ったそうで、まあ歌えるようなのですが、メロディも歌詞もややあやふやですの

で、これはひとつ正調沼貫音頭を聴いてみたいものだと思います。兄弟協力して調べてみることにしました。

インターネットなどによりますと、昭和二十八年に沼貫音頭のレコードが当時西宮市にあった日本マーキュリーレコード（もとタイヘイレコード）から発売されています。（レコード番号M1169、作詞細谷正夫、作曲川谷垣讓、唄川谷垣讓／吉竹喜美子）タイヘイ・マーキュリーのM盤というジャンルは、地方の音頭、小唄や、社歌、校歌、CMソングなどを専門に扱っていたようです。

これが沼貫音頭の本命だろう、このレコードを聴いてみたいと思つて探しました。なかなかレコード（もちろん78回転のSP盤です）そのものには巡り会えなかつたのですが、何ヶ月かかけて、あちこち探し回っている過程で、幸い、弟が、当時神戸新聞社姫路支社長をしておられた山崎整さんという方の知遇を得ることができ、同氏が丹波総局勤務時代、二〇〇一年二月から五月にかけて「丹波探検第二部『あの歌の曲―古里ソングを訪ねて』」という特集記事を書いておられるとのご教示を得ました。

沼貫音頭

細谷正夫 作詩

谷垣 譲 作曲



ハ アー そらもあかーるく はるーか ぜー ふいて ヨイ



ヨイヨイトセ も ゆるわかーくさ さじがわ づつー み



かわいあ のこが かわいあ のこが ちょいと うしをーひ



く ソレ ぬぬーぎ はーヨイヨイヨイ ヨイトセッセ

沼貫音頭

細谷正夫 作詩
谷垣 譲 作曲

一、

空も明るく春風吹いて
萌ゆる若草佐治川づみ

かわいあの子が、かわいあの子が
ちょいと牛を引くソレ

沼貫はヨイヨイヨイ、ヨイトセッセ

二、

晴れた御空に真鯉が泳ぎや
そつて嬉しや夫婦の橋を

渡る菅笠、渡る菅笠
ちよいと田植唄ソレ

沼貫はヨイヨイヨイ、ヨイトセッセ

三、

秋の白山錦に映えて
実る稲田に波打つ黄金

ここは豊年、ここは豊年
ちよいと米どころソレ

沼貫はヨイヨイヨイ、ヨイトセッセ

四、

高見風に明けゆくあした
ぬしと二人で寒踏みながら

交わすひとみの、交わすひとみの
ちよいとなごやかさソレ

沼貫はヨイヨイヨイ、ヨイトセッセ

五、

仲はよいよい心はひとつ
老いも若いも手に手をとって

並ぶ笑顔に、並ぶ笑顔に
ちよいと支え行くソレ

沼貫はヨイヨイヨイ、ヨイトセッセ

この特集記事によって「沼貫音頭」の詳細を知ることができました。作詞者の細谷正夫さんは、新郷の名刹鷲住寺の住職で、作曲者谷垣譲さんは沼貫村稲畑の出身で歌手、黒田庄中学の音楽教師などをされていたようです。作曲者が歌を吹き込んでいます。共演の吉竹喜美子さんは柏原高校卒で、声楽コンクール入賞のソプラノ歌手。沼貫音頭は沼貫村当局が制定したもののようです。

そして、ついに同氏に幻の「沼貫音頭」の音を聴かせていただくことができました。読者のみなさんにその音源から小生が採譜した曲と詞をご紹介します。

小生にとつては初めて聴く曲ですから、メロディから昔を懐かしむという気持ちはなく、なるほどこれがそうだったのか、という感懐だけでしたが、歌詞の中にいろいろ忘れかけていた懐かしい地名がありました。佐治川、高見山、白山、夫婦橋、それに「かわいあの子が牛を引く」というフレーズは、さすがに丹波！という感じで、当時の丹波乙女のたくましさ、けなげさに孫たちの感心することしきりでした。

しかし、「山ざる」の読者のうちで沼貫音頭の譜面

を見て懐かしく思つて下さる方は何人くらいいらっしゃるのでしょうかね。

前記の神戸新聞山崎記者の特集記事は、丹波関連の歌、ふるさとソングについて、周辺事情や歌の背景から成立過程、作詞作曲者、演奏家などを掘り下げた網羅的展望がなされている労作です。柏原小唄、柏原音頭、青垣小唄、青垣音頭、氷上小唄、石生音頭、山南音頭、山南小唄、国領音頭、市島音頭などいろいろな土地のゆかりの曲が、昭和二十年代の終わり頃から立て続けに制作され、発表会が行われた様子をうかがい知ることができます。そして、これらの曲のレコードはタイヘイ・マーキュリーM盤シリーズやキング、コロムビアなどからも発売されていたようです。

また、「柏原音頭」、「青垣小唄」は橋本喬雄先生の作曲で、先生のことの特集記事に出ています。橋本先生は柏原高校から後、神戸親和女子大学で教えられた音楽の先生で、小生は柏原高校時代に橋本先生の授業で合唱に引き込まれることになり、以後ずっと合唱に親しんできました。いまだに、地元の小さい混声合唱団で歌っています。本誌読者の中にも橋本先生の「好

楽会の歌」《♪ワレラノツドイハアカルイウタダ》を歌われた方がきつといらつしやると思います。丹波の大先輩で合唱界の重鎮、笹倉強さんも本誌第41号のインタビュー記事で、橋本先生のことに触れておられます。

さて、丹波を離れてもう六十年近くになります。小生も、丹波に住んでいた期間は人生の一割少しくらいになってしまったのですが、やはり、子供から大人の入り口にかけての期間を過ごした土地が「ふるさと」なのでしょうね。

昭和二十二年に学制改革により沼貫中学校が創設されました。小生はその第一回卒業生なのですが、昭和三十年に沼貫村は周辺町村と合併して氷上町になり、沼貫中学校はわずか八年しか存続しませんでした。今また丹波市ができて「沼貫」はますます歴史の中に埋没して行ってしまうような成り行きです。この「沼貫」という語はとてもいい名前だと思っっているのですが、沼貫音頭ができた頃には、その地名が公式には消滅することが決定していたというのは大変残念なことです。

が皮肉な話でした。

そして、これもまた古い話なのですが、地元では沼貫村消滅に際して記録を残そうと昭和二十九年に「沼貫村誌」編纂に着手、十年以上の歳月をかけて昭和四十一年にA5判約八百頁の大冊が完成しています。印刷物の保存はレコードよりも行き届いているようで、この沼貫村誌は兵庫県内あるいは丹波市内の主な図書館で閲覧できます。

沼貫音頭も忘れ去られかけているようですが、少しでもご縁のある方々に「こんな歌があるんやで」という話の種にしていたければと、さらに、前述の各地の音頭、小唄などについても、それぞれゆかりのあるみなさんがたがときには話題にして下さればと、そんな風に思っております。

山崎整さんをはじめ、この沼貫回顧に手助けをして下さった大勢の皆さんに厚くお礼を申し上げます。

(昭和9年、氷上郡沼貫村新郷生まれ／現在無職、元会社員(技術系))

「お杉地蔵」のこと

足立 典子（氷上町在住）

平成二十四年四月二十八日に柏原高校十四回生の卒業五十周年記念同窓会が、地元をはじめ全国各地から多数出席し、盛大に開催されました。その中でも関東地方から出席された同級生の元気で生き生きとした様子は際立っていました。そこには、日本の中心でバリバリと活躍してこられた自信と力が満ち溢れており、何か大きなパワーを感じ、さすがだと思いました。

私は、皆さんからそのパワーをいただいたよううれしくなりました。また同時に、里である青垣町の保育園で三十年余り保育に携わってききましたが、その間、園児や保育士・保護者・地域の人々から沢山の元気やパワーをいただいたことを改めて思い出しています。

元気でたくましく感性豊かな子どもづくりをモットーに創意工夫を凝らし色々な取り組みをしてまいりましたが、その中でも、自然豊かな青垣の野山に出か

けて、園児を思いっきり行動させ、命の大切さ、自然や物の大切さなどを知らせる活動と年間の保育活動の集大成である生活発表会が強く心に残っています。

その生活発表会では、毎年民話劇を演じてきました。青垣には埋もれかけようとしている民話が多くありますが、これらが忘れられてしまわないよう、園児と職員・地域の人々・民話研究をされている方々が一体となつて民話を掘り起こし音楽劇にしてみました。これは年々充実した活動となり、平成十一年度に兵庫県より「くすのき賞」を受賞しました。

園児は、民話の掘り起こしから携わり、僕らの私たちの民話劇として歌や踊りも入れ、自信を持つて素晴らしい作品を作り上げ、そして約一時間の長編を、発表会場で精一杯演じてくれました。その意欲、集合力、団結力にはいつも感動させられました。

これは、全職員が一丸となつて取り組み、また保護者や地域の方々の強いご支援ご協力の賜物だと思っております。

ここに、「くすのき賞」を受賞した際の民話「お杉地蔵」を紹介します。

◆お杉地蔵

丹波市青垣町の神楽地区に伝わるお話です。今から二百年程前の大稗村での出来事です。

この村に、お杉という女の子がいました。父母、兄二人、姉の六人家族で、毎日仲良く暮らしていました。

お杉は大変心の優しい子で、誰からも好かれていました。けれども、お杉の家は田んぼや畑が少なく、暮らしにも困り、お杉が十歳になったとき但馬国藤和村の庄屋さんの家へ働きに出されました。

お杉はよく働きましたので、庄屋さんは月一度、大稗の家に帰すことにしました。藤和村から大稗村へ帰る道は三つあり、どの道も大きな峠を越えなければなりません。

春は南の青倉神社にお参りし、目の不自由なお母さんの目薬をもらって帰りました。

夏には柴村から粟鹿峰の東を越え、稲土村へ下り家に帰ります。粟鹿峰を下りたところに浄丸というお坊さんが住んでいる小屋があり、そこに立ち寄りました。浄丸さんは大きな滝にうたれお祈りをしていました。お杉は親切にしてくれる浄丸さんを、いつしか好きに

なっていました。そこから家までの途中に「銚子が水」という水の出る所があり、親思いの子が汲んだ水はお酒に変わるという言い伝えがあり、それを信じ、お父さんにこの水を汲んで持ち帰っていました。

もう一つの道は与布土から小さな山を一つ越え、次に大きな大稗峠を越えて家に帰る道です。道のりは短いが峠はきつく途中の楽しみもないので、めったに通りませんでした。

五年が経った年の暮れに大稗の家から「お父さんが重い病気になった」との知らせがありました。庄屋さんはすぐに家に帰るように言ってくれましたが、お杉はその日の仕事をきちんと済ませたため、家に向かったのはもう夕方でした。急ぐので一番近道の大稗峠へと向かいました。空は曇り、雪がちらちらと降ってきました。峠のふもとでは、雪が膝まで積もっていました。

お杉はお父さんのことが心配で雪をかき分け登って行きました。頂上近くで夜になり、その上風も強く、吹き続ける雪で前が見えず息もできません。寒さで動けなくなり、雪の上へばったりと倒れてしまいました。

雪はどんどん降り続いてお杉の体をかくしてしまいましたが。

その頃、浄丸さんは雪ごいのお祈りをしていました。冬に雪が沢山降ると春に雪解け水となり田植えに困らないからです。浄丸さんが雪ごいのお祈りをしていると「お父さん」という声が聞こえたと思うと、笠と手拭いが飛んできました。笠には「すぎ」と書いてあり、お杉に何かあったのではないかと、大稗村の再興寺へ行き、和尚さんに相談しました。

村人を集め、深い雪をかき分けながら大稗峠の頂上へ向かっていきました。峠の上に着いた時には、もうお昼になっていて雪はすっかり止んでいました。みんなで声をそろえて「お杉ちゃん」と何度も呼びましたが返事がありません。しかし、頂上の雪の中に杖の先が少し見えました。かけよってみると、お杉はその下に埋もれて冷たくなっていました。

村人は、このけなげで親孝行なお杉を可愛そうに思ひ、お地藏さんを作り峠の上に祭りしました。大稗の人は今も、この「お杉地藏」を大切にお祭りしています。また、神楽地区の働きかけにより、平成二十四年度

に丹波市の予算で、このお地藏さんにお社を造り安置されると聞いています。

(昭和18年、大阪生まれ／元保育士)



《石生城山東側の鯉寄坂》本誌第40号「丹波を撮る…石生の城山公園」に6枚の組写真が掲載されており、その最後が城山の遠景写真である。これに見られるとおり、城山の東側に小さな丘が連なっており、これとの境に鯉寄坂がある。かつて横田や氷上方面から地頭・大崎、さらには船城・黒井へ向かう人々は、水切れ橋付近を通過すると遠回りになるので、この坂を超えて北を目指した。坂の頂上には立派な祠が残されている。

(撮影 徳田八郎衛)

丹波を撮る

加古川の改修 - 1

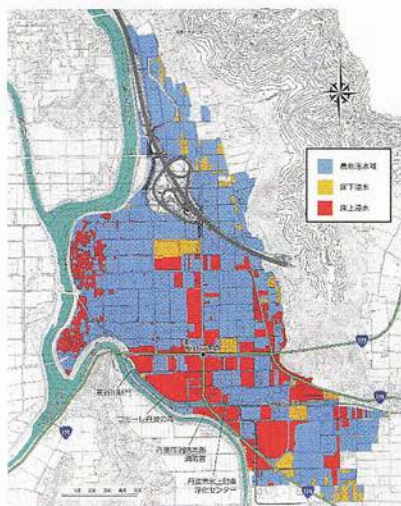
写真と文：徳田八郎衛

■浸水被害実績

台風23号は日本全国に多大な被害をもたらしましたが、高谷川流域では、床上浸水450戸、床下浸水144戸の浸水被害がありました。また、交通網でも、稲継交差点周辺の踏面冠水による通行止めなどの被害が発生しました。

被害の状況（高谷川流域）

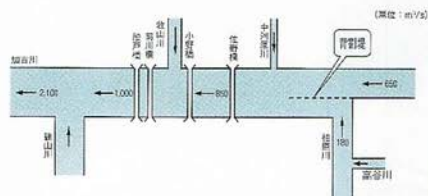
市町村	丹波市上町、柏原町
面積	流入区域 28ha
	レベル浸水区域 211ha
戸数	床上浸水戸数 450戸
	床下浸水戸数 144戸
道路	公共施設 丹波市立図書館、丹波市上町東浄化センター 国道175号・国道176号交差点通行止め 15時間20分



事業の目的と効果

高谷川流域は、日本で一番標高が低い分水嶺があり、なだらかな地形をしています。このため、加古川と高谷川の流出量のピークが重なるような大きな洪水が発生すると、加古川の背水の影響で甚大な浸水被害を受ける恐れがあります。

そこで、加古川と柏原川の間に背割堤を設置し、合流点を下流に下げて加古川の背水の影響を軽減し、高谷川の水位を下げることで家屋の床上浸水を無くします。



計画高水流量配分図

加古川本流（佐治川）の水勢が強いので合流する柏原川と、その支流の高谷川は大雨の度に溢水を繰り返す。専門用語で記せば「本流からの背水」である。本誌 39 号の本欄「治山治水の碑」で紹介したように、合流点を僅かでも下流に下げると近隣集落の中世からの願いであったが、平成 16 年 10 月の台風 23 号は 1 時間雨量 31 ミリ、24 時間雨量 208 ミリに達する大雨をもたらした。国道 175 号と 176 号が交わる稲継交差点周辺の大型スーパーや商店・民家に床上浸水 450 戸、床下浸水 144 戸という被害を与え、市消防本部の緊急自動車も出動不能となった。

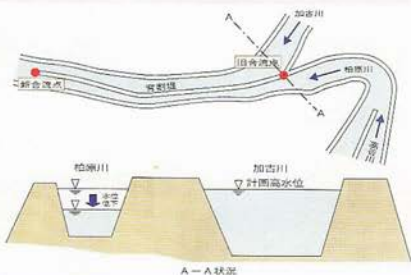
「これではならじ」と兵庫県は、国土交通省からの補助金に基き「加古川水系高谷川床上浸水対策特別緊急事業」を平成 19 年度から開始し、河道掘削、築堤、護岸、井堰改築等を同 24 年度まで実施中である。兵庫県丹波県民局提供の資料と現地撮影写真で、「愚公山を動かす」ならぬ「住民の願い河を動かす」快挙の概要をご覧頂きたい。

加古川の改修 - 2

合流点方式（背割堤の設置）

高谷川の水位を下げるために、背割堤を設置します。

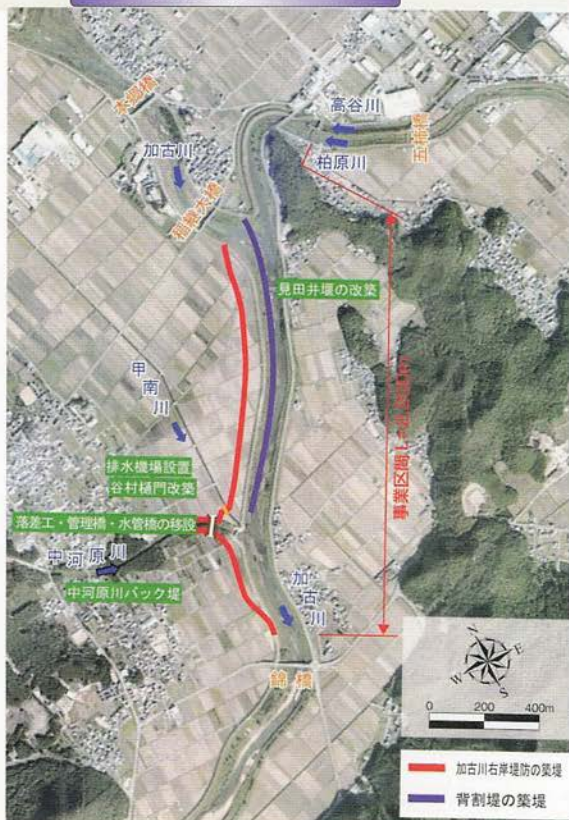
背割堤により、加古川と柏原川の合流点が下流側に移動し、柏原川が加古川から受ける背水の影響が小さくなり、柏原川と高谷川の水位を下げるすることができます。



背割堤の登場により合流点は、従来の見田井堰付近から 1km ほど下流の錦橋近くまで下がり、近隣住民の永年の夢が実現する。それも加古川本流の真ん中に背割堤を築くのではなく、右岸外側の田畑買収により新しい右岸を構築して本流の幅を広げ、従来の右岸が背割堤の役目を担う。

これにより高谷川と合流して水量の増えた柏原川も、旧本流の幅全部を与えられて悠々と流れることになる。

河川整備メニュー



なお昭和初期には少年たちの水泳訓練場だった見田堰は完全に撤去されるが、農業用取水は、加古川と柏原川に新設される集水埋渠とポンプ場により確保される。

丹波を撮る

加古川の改修 -3



従来の右岸の外側に新右岸が完成しました。前方に見えるのが下流の稲畑地区と高見城址です。



これも従来の右岸と外側に新築された新右岸。前方に見えるのが上流の稲継集落と稲継（穂壺）城址、さらに遠方に氷上城址が見えます。

加古川の改修 -4



この辺りが新たな合流予定地です。この加古川本流を柏原川が独り占めするので、「背水」の懸念はぐんと低下します。この下流にある佐野橋も橋脚の数が多く洪水の流れを妨げているので改築されます。



事業名称を記した看板を掲げていますが、「加古川水系高谷川」の字句は落ちています。だが、ここに住む人には、こんな字句は無くても工事の意義は理解できるでしょう。



稲畑の奴々奴伎神社。秋の祭には伝統ある三番舂が奉納されるので有名です。

丹波を撮る

変わる丹波、変わらぬ丹波

写真と文：徳田八郎衛

山林伐採の機械化



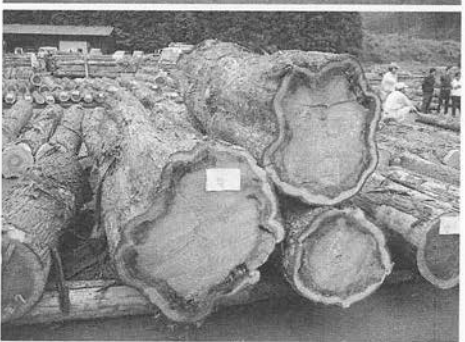
兵庫県下でも丹波市は人工林の比率が高い地域である。戦後の国策に沿って、せっせとスギ、ヒノキの植林に励んだからであるが、外材に押され、その出荷価格は何十年も低迷し、出荷すれば赤字となる。そのため山全体を一挙に全面伐採する姿は滅多に見られなくなったが、柏原町母坪の通称、和泉山にその光景が出現した。

遠望すると山腹に林道が応急造成されている。「船頭多くして舟山へ登る」のではなく、「人手足りなくて（人件費高くて）重機山へ登る」のである。現場へ見に行くとバスが登れるほどの立派な道であり、簡単に土砂崩れせぬよう様々な工夫がこらしてある。

山麓には半世紀かけて育てた立派なヒノキが集められていたが、問題は、材木市のセリでどう評価されるかである。ヒノキ造りよりも石油造りの家を好む人が多くなり、よほど良質な木でないと売れないという。

「雑木」は別積みされていた。どの木も里山の名残である。①カシは堅いので、昔は鋤や「ジョーレン」の柄に重宝されたが、今は外材に取って代られた。②クヌギは、大木になるまでに伐採すればシイタケ栽培に活躍するが、これほど巨木になると使ってもらえない。薪割りの際にはスカッと割れるから暖炉を持つ人には喜ばれるが、そんな家庭はまだ少ない。③ホウは、彫刻に重宝されるが、そのような文化活動に励む人が、もっと増えるまでは雑木扱いである。

材木市のセリ



以前は氷上郡内に複数個所あった材木市も、今は丹波林産振興センター（柏原町下小倉）で月に3回開催されるだけである。ここへ出荷されるのは丹波市で伐採された材木だが、バイヤーは近畿各地から集まる。セリは証券取引のように電子化されず、何十年も前と変わらぬ要領で行われる。

半世紀もかけて育てたヒノキの運命は厳しく、立方メートルで1万円を越すようないい値は中々付かない。

それに比べるとスギは、柱だけでなく板にして床や廊下にも、角材にも、また荷造り用パレットにも使えるという多用途が重宝され、すぐに買い手が付く。

だからセリの際も、スギだけは下値から始まりドンドン「13,000円」「15,000円」と上がっていくが、売れない種目の木は逆に上値から始めて落札されるまで下げていく。

その最たるものは、記念植樹で大人気のメタセコイヤ。成長が速くて直ぐに大木となるので、邪魔扱いされ早期退職。だが買い手がない。結局はチップになってパルプに。

このような状況であるから、林業関係者には後継者育成も重要な課題。たまたま「トライアル」で訪れた中学生には、センター職員が懇切丁寧に材木やセリについて説明。

アーバン化？丹波

春日町黒井にライブハウスができた。国道175号線沿いに誕生した「LASSO N」。広さ40平方メートルの店内にはステージや音響設備を備えている。うまい下手は関係なく、気軽に出演してほしいと店主は語っている。

また山南町草部の古民家カフェ「恐竜楽舎」が開店1周年を迎えた。これまでもジャズなど多彩なライブを提供してきた。柏原のイタリア料理店「オルモ」ではプロのジャズ演奏家を招いてディナーでジャズライブを行った。丹波にも静かにモダンな波が押し寄せているようだ。

丹波へのイターン

丹波にイターンする人が静かに増えている。インドでヨ

ガを学び、その後東京でヨガ教室を開いていた夫婦が東日本大震災で東京を離れ、丹波市柏原町で夫婦でヨガ教室を開いている。

大阪市内からイターンし、氷上町市辺で喫茶店「待夢」を開店した団塊夫婦もいる。夫が栽培した無農薬野菜を、奥さんが料理とコーヒーでもてなす。水は青垣の山水。のんびり生きていきたい夫婦に丹波はうってつけのようだ。大震災の影響なのか、丹波が見直され、田舎返りが起きているように思える。

凋落!? 柏高・篠山鳳鳴高

このところ、大学進学で私立に押され気味の丹波の公立高校。柏原高校や篠山鳳鳴高校の大学進学状況に昔の面影がない。福知山市内の私立高校が受験校に舵を切ってい

るからだ。昔は商業高校だったのに、今や東大や京大など名だたる有名国立大学に合格者が続出、超有名進学校だ。一方の柏原高校や篠山鳳鳴高校から有名国立大学合格者は皆無。関西の私立がようやくの状況。どうした!? 柏校!?

教育改革進む

丹波にも教育改革の波が押し寄せている。今春、県立氷上西高校と氷上中学・青垣中学との間に連携型中高一貫教育がスタートした。公立では県内2例目。連携型中高一貫校とは、校舎はそれぞれのものを使いながら、教師や生徒が双方を行き来するもの。その結果、今春18年ぶりに氷上西高校の定員割れが解消された。

また、小中での一貫教育も誕生する可能性がある。「青

垣地域のこれからの教育を考える会」は小中一貫校の提言を丹波市教育長に行った。兵庫県内の公立小中一貫校は一例しかない。もし実現されれば、丹波の教育環境も大きく変わるだろう。

エコへの取り組み始まる

丹波市国領では、村をあげての太陽光発電に取り組む。川沿いの空き地に216枚の太陽光パネルを設置し、公民館や農業用倉庫のエネルギー源にあてる。自治会レベルで太陽光発電に取り組むのは全国でも例がない。

グリーンベル青垣では温水プールの燃料に木質チップを用いる。木質バイオマスを地域資源に用いるのが狙いだ。山に囲まれた丹波ならではの取り組みと言える。

(井徳正吉)



近況・エッセイ

カーネギーデビュー

山 森 直 美 (旧姓藤本／氷上町)

薄暮の中に広がる灰色の風景。その灰色を突き破るように走る数本の線。その線の上に貼り付く固形物。その固形物が微妙に動いています。やがてそれがクルマであることに気付くには、私にはしばらくの時間が必要でした。

「そうだわ。もうすぐワシントンDCなんだわ……」。
何度かの微睡(まじろみ)を繰り返したのちに、ようやく私の頭は正常に戻ってきました。その時間を確認しているうちに、やがて機体はステップデッキに横づけになりました。

私が今回のツアーに参加を決めたのは友人の薦めからでした。私は足立区に拠点を置く混声合唱団『ツヴァイ』に属しています。仕事の傍ら、週に一回、葛飾区の高砂まで通って練習に参加しているのです。入部したのは主人の定年退職がきっかけでした。私は高校ま

でバスケ部にいたものの、卒業以来、なんのスポーツもすることなく五十代まで過ごし、「このままでいいのかしら……」。そんなことを考えていたときに『ツヴァイ』の存在を知ったのです。それ以来、一回も休むことなく合唱の練習に参加してきました。

昔から歌うのは大好きでした。そんなある日、友人から「カーネギーで歌うというツアーがあるけど参加しない？」と誘われたのです。カーネギーという名前は私でも知っていました。世界のトップアーティストが憧れ、ステージで演奏することを夢見る場所。まさかそんなカーネギーで歌えるだなんてあるはずないわ……。そう思ったのを見透かしたように、友人は一枚のパンフレットを私に差し出しました。そこには確かに「カーネギーホールで歌おう」と書いてあったのです。あのカーネギーで!? その瞬間、私は二つ返事でOKをしていました。

ツアーは「日米平和と友好の桜一〇〇周年記念」として企画されたものでした。足立区の荒川堤の桜がアメリカ・ワシントンのポトマック河畔に寄贈されてから一〇〇年が経ちます。それを記念して足立区から区

民桜親善大使と、民間の「日米桜市民交流実行委員会」が参加することになっていったのです。その実行に当たり、市民交流実行委員会は市民合唱団に声をかけ、ワシントンDCとNYのカーネギーホールで歌うツアーを企画したのです。私の所属する足立区混成合唱団『ツヴァイ』は参加しなかったものの、私はどうしても参加したいと強く思いました。たまたま参加を表明している団体のひとつである市民合唱団『コーロ・フェニーチェ』の一員として加わり、急ぎよこのツアーに参加したのでした。

それからが大変でした。何しろ素人の集団が世界のカーネギーホールで歌うのですから。更には正規の部員でない人間も含めての急造に近い合唱団です。しかも合唱曲には英語の曲が七曲もあります。それをアメリカ人の前で歌うのです。アメリカの人に、いや世界の人に日本の恥は晒せない……。しかも、そんな思いがみんなの脳裏に貼り付いていたことでしょう。そんなこともあり、練習は過酷を極めました。来る日も来る日も練習の日々。練習には自宅にいるときでさえ練習です。発声のための腹筋・背筋、ブレスの強化……

厳しくも心に響く指導をしてくださる先生が、あるときこうおっしゃいました。「練習、練習また練習。練習あるのみです。その代り練習で苦しんだ分、本番では楽しんでください」。この真意を私は後になって知ることになります。

私たち一五〇人あまりの一行は、四月十四日にワシントンDCの屋外ステージで歌った後、いよいよカーネギーホールのあるニューヨーク・マンハッタンへと向かったのです。

カーネギーホールは思ったより古びていました。そして席数も約二〇〇〇ほどで想像よりも小さい気がしました。しかし、四階までの各階ごとに設けられた楽屋には、隅々にまで先人たちのオーラが染み込み、私たちを息苦しくさせます。何しろ私たちは素人。プロでもなければ、一流のアーチストでもない。世界レベルの人でさえたじろぐステージに、ズブの素人が立とうとしている、そう考えただけで軽いめまいがしてきます。舞台の袖にスタンバイしたとき

に私の鼓動はピークに達しました。まさに心臓が張り裂けそうだとこのように言うのでしょうか。隣の友人の鼓動までも聞こえてきそうでした。そして、ついに私たちの出番が来たのです。

カーネギーホールの客席から迫りくる歴史の威圧感（おそ）はすさまじかったです。カメラ撮影さえ許さない厳かなカーネギー。手垢で黒く光る椅子の輝きさえ私たちをおじけさせます。そんな重圧を全身に感じながら、最初の曲『トウナイト』の前奏が始まったのです。

歌いだすと全身の緊張感が口から出ていくのか、不思議に緊張感が体中からなくなっていきました。同時に楽しさが全身から湧き出しました。大きな声で、みんなの声に乗せて歌うことにいつそう楽しくなってきます。「そうか、田口先生のおっしゃっていたのはこういうことだったのね……」。あれだけ練習で厳しく鍛えられたからこそ、今、こうして私はここから楽しめるんだ……。練習の意味が初めてわかった瞬間でした。練習とはうまくやるためのものではない。練習とは本番を楽しむためにやるものなんだ。ようやく私にも練習の意味が分かりました。そして、いつそう私



は声を張り上げました。

やがて最後の曲を迎えました。最後の曲は『ニュー・ヨーク・ミュー・ヨーク』。陽気な曲調とは裏腹に、私は感激して既に心の中で泣き出していました。いろんなことを思い出してはまた泣いてしまったのです。私にここに立つていられるのは多くの人に支えてもらったからこそです。合唱団の仲間、指導者、作曲家の先生、合唱活動を許し、そしてここに送り出してくれた主人、そして子供たち……。多くの人に支えられて今の私がある、そんなことを改めて考えさせられたカーネギー公演でした。

『ニュー・ヨーク・ミュー・ヨーク』を歌い終わると、なんと客席から「ブラボー」の声が響き渡りました。それを機に大きな拍手が沸き起こったのです。その拍手はやがて大きなうねりとなって会場全体を包み込みました。なんとも言えない幸福感に包まれた瞬間です。こうして私のカーネギーホールの初舞台が終了したのです。

それにしてもこの歳で英語の七曲を暗譜するのはつらかったです。



カーネギーホール外観
(インターネットHPより)

音楽を読む

三 浦 宏（山南町）

音楽評論家・吉田秀和が今年五月二十二日に亡くなった。吉田秀和の著作で私が持っているのは七冊だが、これらの奥付を見ると、いずれの本も昭和五十六年前後の発行月日のもので、この頃が一番クラシック音楽に凝っていた頃だと思う。今はなくなったが、当時、横浜西口のジョイナス四階にあったレコード店新星堂に行くと、店員が上得意であった私を最敬礼して迎えてくれたものだ。しかし、この頃を境に、音楽の記憶媒体であるLPが徐々にCDに移行して、LPを再生するレコード針を買うのもおぼつかなくなってきた。新星堂で買い集めた数百枚のLPも、レコード針がなければ単なる場所ふさぎの円盤にすぎなくなり、ある時の引越の際に全部捨ててしまった。

そして、私がCDプレイヤーとスピーカー・システムを買ったのは、なんとそれから二十五年たった平成

十三年頃である。電気会社に勤めていたにもかかわらず、あるいはその故にか、新しい原理に基づく電気機器はいかがわしいとまでは言わないが、それが遍く普及し、世間に認知されてデファクト・スタンダード(De facto standard)になるまで買う気がしない。デジタル放送受信用の液晶TVを買ったのも、アナログ放送がなくなる去年の七月直前であった。それにしても私の音楽における、この二十五年間の空白はなんなのだろうと思う。ひとつ言えることは、この時期は私の人生でも最も多忙かつ過酷な時期であったことである。芸術は、過酷を救ってはくれない。サルトル曰く、「おれにはおれの問題がある。ただそれで悩んでいるときに、美術館には行かないね」(サルトル著『自由への道』より)、なのである。

大学の同窓会でクラシック音楽について語る友人が二人いる。二人ともピアノが弾けて、同窓会ではその技を披露してくれる。さらに、兩人とも大学へは阪急神戸線の親元から通学していた。私が「さすがに芦屋のボンボンはやるなー」と言うと、まんざらでもなさ

そうだ。一人は長らくアメリカに在住していて、元大リーグの野茂と同じようにアメリカの年金機構から年金を支給され、週末にはアメリカの友人と室内楽の演奏を楽しむ。もう一人は物理学科の大学院を卒業したが、音楽への未練を捨てきれず、音楽大学に学部入学して卒業し、高校で物理と音楽の授業を担当していた。

これは私の生涯における悔恨事の一つなのだが、私は楽器が弾けない。そこで、かれらとの音楽談義では、若い時に読んだ小林秀雄の『モーツァルト』や、吉田秀和の^{おびただ}夥しい著作群、小林秀雄が『モーツァルト』で引用して一躍有名になったアンリ・ゲオンの『モーツァルトとの散歩』、スタンダールの『モーツァルト』などの中身を受け売りして彼らを煙に巻くことにしている。彼らとの音楽談義で分かったことだが、楽器を弾くことを趣味にしている人たちは、意外に音楽評論関係の本を読まない。どんな楽器でもこれがあるレベル以上の技術で弾きこなすにはよほどの訓練が必要で、これらの本まで手が回らないのかも知れない。吉田秀和はピアノを弾いたが素人の域を出なかったようだ。私の結婚披露宴で素晴らしいギター演奏を聴かせ

てくれた私のかつての部下に小林秀雄の『モーツァルト』を読むように薦めて貸したが、「全然理解できない」と本を返してきた。私における音楽鑑賞はこれらの読書と不可分に関係していて、これら二つで一つの趣味を形成している。

吉田秀和はいつかの新聞の音楽コラム欄で、シューベルトだったかの、今まで聴いたことのない作品を見つけて、新しい友達に出会ったようだと、その喜びを語っていた。人生の最終章にさしかかった私にとつての新しい友達は、かつて耳がたこになるほど聴いたバッハでも、モーツァルトでもブラームスでもなく、ベートーヴェンの後期ピアノソナタ群と全部で十七曲ある弦楽四重奏曲のうちのやはり後期の数曲である。

バッハは、その生涯にわたってドイツ国内を転職に次ぐ転職で渡り歩き、最期はライプツィヒのトーマスカントール職に上り詰め、今のサラリーマンで言うところの出世頭である。私生活では、最初の妻と、その妻が死んで再婚した後妻との間の三十年間の結婚生活で合計二十人の子供をもうけ（うち七人が早逝）、公

私ともの精力家であった。そして、基本的には人と和すことのできる生活者であった。教会オルガニスト、カントールが彼の生涯の職業であるから音楽を手段とした神の伝道者であり、彼の音楽のリズムは人と神に和した規則正しい生活者のそれである。そうであるが故に、神の伝道師には到達すべき自分の世界観はない。神が彼の哲学なのだ。無伴奏チェロソナタでさえ、私の年齢になって聴くと自己を止揚するものではない。

ブラームスは晩年にいたつても、彼の主調音である憧憬と諦観を捨てなかった。モーツァルトが死ぬ数ヶ月前に作曲した最期の協奏曲であるクラリネット協奏曲は、この世の儚さ^{はかな}を、この世に受け入れられない天才の諦念と無念を、天才の虚無を、無上の音楽で伝えていて、私の最も好きな曲であるが、この曲は吉田秀和も言っているように年に何度も聴く音楽ではない。

ベートーヴェンは、たとえばモーツァルトに比べればその音楽的才能が凡庸であったかもしれないが、努力の人であった。そのベートーヴェンの交響曲を、私は大学時代に音楽喫茶に通い詰めて聴いていたが、そ

の後、興味は前述した作曲家たちに移ってしまつて、それからの五十年、絶えて久しくベートーヴェンを聴くことがなかった。そして、最近になって彼の晩年のピアノソナタと弦楽四重奏曲に出会うことになる。ここには、ベートーヴェンが労苦の末に手ずからつかみ取つた世界観と、そして晩年になってなお心の奥底に固持し得た生きる意志があるのだ。晩年におけるこの意志こそがニーチェの言う「これが生か？ それならもう一度！」に通底するものにちがいない。

月曜の朝はバッハを聴く。

「目覚めよと 呼ばわる ものみの 声高し……」

(バッハ カンタータ第140番)

そして、バッハの律動で刻まれて過ごした清廉^{あんねい}(?)と安寧^{あんねい}の日々の週末には、ベートーヴェンの最期の弦楽四重奏曲第16番を聴いて、その来し方を自問する。

我が生涯は、「Muss es sein?」と。

(昭和13年、東京都江東区深川生まれ。疎開で氷上郡山南町に移住／コンサルタント業)

黒の中の寡黙な妖精

銅板画家 丹阿弥丹波子さん

藤 原 ひさ子（山南町）

ゆきてみぬ人もしのべと春の野のかたみにつめる若
菜なりけり 貫之

ゆきてみぬ人もしのべと丹波路のかたみにつめる秋
の野の花

「つらゆきもどき」と丹波子さんはつぶやいて、丹
波の野道で摘んだ花を描いた「野の花Ⅰ、Ⅱ」は彼女
の代表作の仲間入りをした。

節くれ立った手にそつと両の手を重ねると、思いの
ほか搗きたてのお餅のように心地よく、柔らかな事に
驚く。

丹波の「野の花」も、この働き者の手で生み出さ
れ、休むことは咎とでも言うような強靱な意志の下、
八十五歳の今も漆黒の中に浮かび上がる楚々とした
花々を咲かせ続ける丹波子さんは、バリバリの現役銅

版画家である。

因みに、今夏の展覧会は、銀座のシロタ画廊、世田
谷美術館、町田国際版画美術館で催され、秋には丹波
での予定も入っている。

読売新聞の連載「時の余白」の挿絵の担当も今年で
六年目に。また、茶道の雑誌の連載と八面六臂の活躍
ぶり。

しかし、この夏は遂に「もうオトシなのですから、
少しは休養を」とのドクターストップのお陰で、お会
いしてゆっくり話す機会を得た。

十全の心くぼりで描かれる花々は、幼い頃より深く
慣れ親しんだ日本画や、飽くなきデッサンの結実であ
り、一貫して彩色しないモノクロにこだわり続けた作
品に、観る人誰もが異口同音に鮮やかに色が見えると
言う。

まさに「墨に五彩あり」とは言い得て妙。究竟なり
とは、このことにほかならない。

「丹波子」という名前は文字通り、丹波の子。お父
様の岩吉氏、横山大観の内弟子（後に独立）で有名な
日本画家は、関東大震災でお母様とみえさん（桐壺人

形作家)の実家がある氷上町成松に疎開。六年にも及ぶ滞在中に丹波子さんは、そこで生を享けられた。

丹波子という名は、お姉さまの、女優、丹阿弥谷津子さん誕生の折に用意された二つの名前の候補のうち、不採用になった方だとか。

「いつだって私は姉のお下がりばかりなのよ」(笑)

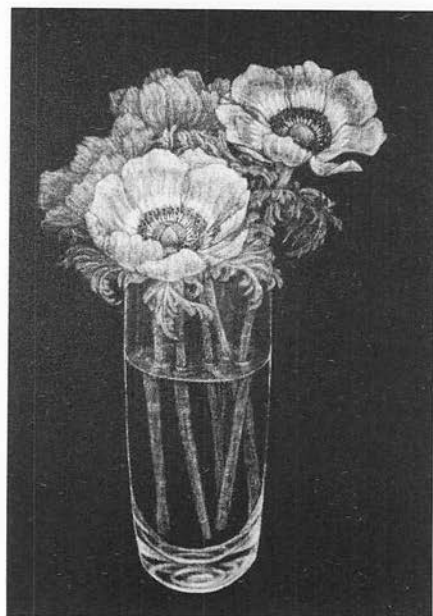
はちきれんばかりの笑顔と好奇心旺盛な丹波子さんは、写真を、とお願いすると、「私だって」と自分のデジタルカメラを私に向けてこられる、とってもお茶



初冬の花

目さんでもある。結局、おすまし顔は撮れなかったけれど、言い訳ではなく、私はそんな丹波子さんの写真の方がずっと好きである。

こんなに元気な丹波子さんも、幼少期より病弱で(今も持病を抱える身)、自分の進む道に迷い、長く絵筆をとってきた日本画か、夢中になった油絵か、はたまた大好きなお料理の方にかと、悶々としていた頃、ブリジストン美術館で初めて目の当たりにした長谷川潔の銅版画に大きな衝撃を受ける。



あねもね

早速、パリから帰国したばかりの駒井哲郎氏に師事。
丹波子さん二十九歳の決断。

その頃、日本にはまだ銅版画は普及しておらず、技術も道具も手探り状態のなか、丹波子さんが色んな技法を試しては、それを駒井氏が東京芸大での授業で披露し、伝授していったそうである。

日本における銅版画の黎明期は丹波子さんの実績に依るところが絶大だと言っても過言ではない。

丹波子さんの銅版画は、メゾチントとよばれる技法によるものである。



籠 (お茶の花)

クロームメッキされた銅板の表面全体に「目立て」を施し、そこにバニッシャーやスクレイパーで擦ったり磨いたりしながら花を描いていく。

「目立て」は機械で仕上げたものが一

般的だが、丹波子さんは自分の目指す深い黒を出すには遠く及ばないと、自分で目立てる徹底ぶりである。

一センチ四方に三六〇個もの傷をつける「目立て」は想像を絶する根気の要る作業。

一瞬たりとも気を抜けば、膨大な時間を費やした目立て済みの銅板は全てふいになる。「今までに一度もふいにしたことはない」ときっぱり言い切れる、その姿勢の凄まじさがうかがえる。

その緻密で過度の集中力を要する作業は四十分が限界。

手を休め、庭の木々や花を相手に目を休ませる。

手にも目にも活力が漲ってきたらまた銅板に向かう。

この繰り返しがもう半世紀以上続いている。

詩人大岡信にして「ひたひた波うつ海の中に住んでいる、黒の中の寡黙な妖精」、「こんな立派な文章が書ける画家はめったにいない」とまで言わしめた丹波子さん。これ以上の讃辞があるでしょうか。

私の拙文では表現しきれない丹波子さんの作品の素

晴らしさを、町田市立国際版画美術館のパンフレットに委ねる事にする。

「丹阿弥丹波子のどの作品からも深い静けさが漂い、その静謐さは見る者の心をも静め、瞑想的な気分へと誘います。闇の中に射し込んだ光——その光が魔術のように物の輪郭やかたちを浮かび上がらせていきます。光が描き出す花々はモノトーンでありながら豪華に咲き誇り、季節ごとにつるう庭の空気を想像させます。台所の「隅のザルやガラスのボールに無造作に投げ込まれた野菜には、慌ただしい日常生活の中に



おちゃめな丹波子さん

一瞬、訪れる深夜の静寂が凝縮されているかのようです。(中略)
家族の介護に追われる中、ほっと安らぎを取り戻すわずかな時間

に、自分だけに許された貴重なひと時を長年捧げてきた銅版制作から、色彩がないにもかかわらず、華やかで芳醇なメゾチントの花束がうまれたのです。」

どんな言葉を尽くしても、丹波子さんの基にあるものは、分け隔てない全ての花々への慈しみの眼差しと、愛おしく思う心だと確信する。

世間ではじっくり愛でることの少ない雑草がつけた、控えめで可憐な花が多くモチーフになっているのが、私は何よりも嬉しい。

雑草の花々は、丹波子さんの作品の中では、いつでも気品に満ち、誇り高く輝いている。

「これからは風景画にも挑んでいきたい」とのこと。この分では、「還暦を過ぎたら、ゆっくりと読書などして過ごしたい」という若い頃からの夢は、これから先も当分実現しそうにはない。

「もし、母が元気な頃にこの氷上郷友会があったら、どんなに喜んだ事でしょうね」とおっしゃったのを最後に付け加えておきます。

(昭和24年、山南町富田生まれ／書家)

報徳の巨星——佐々井さんの思い出

鴻 谷 正 博（青垣町）

1 尊徳研究と丹波人

二宮尊徳という人、多くの人は小学校の校庭で見た薪を背負い読書に励む金次郎像を思い出されると思う。しかし、成人した尊徳は、江戸末期に、疲弊した六百余の農村復興をはじめ、武家や藩財政の再建を果たした改革者だった。

尊徳はまた、渋沢栄一や安田善次郎など、明治の財界人に多大な影響を与えた。尊徳の思想や生き方は、混沌の今を生きる我々にも十分通じるものがあるし、現に、中国でも尊徳研究が進んでいる。

実は、昭和以降の二宮尊徳の研究・普及に丹波人が中心的な役割を果たしたのである。佐々井信太郎氏と長男・典比古氏である。典比古氏は、惜しまれながら先年逝去された。薫陶を受けた一人として、同郷の皆様には佐々井父子二代にわたる尊徳研究・普及へのご功

績をお伝えしたい。

2 昭和の尊徳——佐々井信太郎氏

佐々井信太郎氏は、明治七年、氷上郡葛野村に生まれる。父重三郎氏が事業に躓き、多大の借財を背負う。そのため、信太郎氏は小学校を中退し、高山寺での半小僧をはじめ、生野銀山での勤務、葛野村役場書記、小学校雇教員など、職業を転々とする。さらに、借財の早期返還のため、より高い給料が得られる中学校教員の資格取得を求めて、単身上京の道を選んだ。

やがて独学で資格を取得し、神奈川県の小田原中学校に赴任となる。ある日、吉田庫三校長（吉田松陰の甥で家督相続）に、「先生、松陰の研究をしたいのですが」と切り出したところ、「佐々井君、ここは小田原。二宮尊徳がいるではないか」と諭された——これで、信太郎氏の運命が定まった。

以後、中学校教員（教え子には河野一郎・謙三の兄弟など）の傍ら、尊徳研究を続け、やがて神奈川県社会課長として地域復興に尽力。その後、東洋大学教授を経て、昭和初期に大日本報徳社副社長（静岡県掛川）

として、尊徳研究のバイブルともいふべき「二宮尊徳全集」(全三十六巻)の編纂に邁進された。そして、尊徳が歩んだと同じように、「至誠」「勤労」「分度」「推譲」「積小為大」「一円融合」を基本原理とし、全国各地の農漁村復興の指導に取り組まれる。

多忙のなか、丹波にも再三来訪されている。現存する「葛野報徳自治振興会」(藤原敦實会長)は、その

衣鉢を継ぐものかと思う。

郷里の年配者は、佐々井さんといえど、代議士になった一晁(晁次郎)氏を思い出されるかもしれないが、晁次郎氏は信太郎氏の弟である。

「佐々井信太郎」

筆者

略伝には、「上京



の日、晁次郎が大八車を押し、懐かしい山々を見やりながら、石生駅に立った——」とある。また、信太郎氏は、「自分が尊徳をよく理解し得たのは、尊徳の苦難の少年時代と自分の(丹波での)それとが相似していたから」と述べている。信太郎氏は昭和四十六年、九十六歳で春秋に富んだ人生を終えられた。

3 報徳学の泰斗——佐々井典比古氏

典比古氏は、大正六年小田原に生まれる。中学時代(掛川中学校)に父親の仕事を手伝う形で自然に尊徳の道に入られた。第一高等学校、東京帝国大学法学部を経て内務省採用となるも、まもなく応召。北支での四年間の任務で健康を崩されるが、その後復職され、やがて神奈川県庁へ。総務部長や副知事を歴任し、退職後、本格的に尊徳研究・普及活動に邁進される。

典比古氏の功績で特筆すべきは、現代版尊徳全書(全十巻)の編纂と、報徳博物館創設(昭和五十八年、小田原市南町)への大車輪の活躍であろう。この報徳博物館の建設費賛助委員会会長は親交のあった行草の鬼・土光敏夫氏であり、関西では経営の神様・松下幸

之助氏が尽力された。

典比古氏は惜しくも三年前に逝去された。享年九十一才。小田原の報徳会館での告別式で、私は神奈川県知事の名代として、僭越にも尊徳玄孫の二宮精三氏に先んじて弔辞を読むことになった。遺影を前に、学殖の深さや清廉公正さ、慈愛溢れる人柄が思い出され、目頭は熱く、身ぶるいするのを禁じ得なかった。

なお、典比古氏の本籍は、最後まで丹波の葛野であった。佐々井父子の霊は、故郷の山里にも似た小田原市久野の霊園に眠る。報徳博物館二階の展示室前には、信太郎氏の胸像が据えられている。

今年で尊徳没後百五十五年かと思うが、今日まで尊徳の遺訓が伝承されているのは、富田高慶や福住正兄など門人の明治以降の功績とともに、佐々井父子二代の大正から昭和、平成へと百年余にわたる取組みの賜物といわれている。

4 混迷のいまを生き抜く智勇——“尊徳の遺訓”

尊徳が様々な改革で確立した思想や仕法は、混迷する日本の政府や経済界にも警鐘を与え、多くの人に

生きる知恵と勇気を与えるものと確信する。

日本や中国、韓国などの研究者が参加する「国際二宮尊徳思想学会」（事務局

は報徳博物館・草山昭理事長）は、日中で隔年開催されているが、第六回大会は、日中国交正常化四十周年に当たる本年十月、北京の清華大学で開催。

尊徳思想は、宗派などを超越した普遍の観念、社会道徳であり、それは世界に通じる思想である。つまり、尊徳思想は、日本人の普遍的な価値であり、世界に誇れる実践的行動規範であり、精神的文化財産であると考えられる。

二宮尊徳の実像について、詳しくは本年七月刊行の著書「二宮尊徳の遺訓」（松沢成文前神奈川県知事との共著。ぎょうせい刊）をご覧ください。

（昭和24年、青垣町佐治生まれ／㈱産業貿易センター常務取締役）



軽井沢―伊香保の旅

内堀祥司（柏原町）

お盆休みは出来るだけ故郷に帰るようにしているが昨年（息子達が計画を立て、私達家族と四〇年来の友人である家族にも連絡を取り、総勢一三名での旅行である。

一日目は、北軽井沢の貸別荘に泊まりアウトドア。二日目は、伊香保温泉でのんびり過ごす二泊三日の計画である。

一日目は、軽井沢のスーパー鶴屋に一〇時集合。普段であれば二時間弱の道のりであるが、お盆シーズンということもあり、一時間のゆとりをみて朝七時に我が家を長男の車で出発。川越インターから関越自動車道に入る。所々渋滞している所もあったが、思ったより順調である。

藤岡ジャンクションから上信越自動車道に入り、峠

の釜めしで有名な横川パーキングで休憩。軽井沢へ向かう。渋滞もなく軽井沢出口に到着。

ところが、料金所を出てから市内に向かう一般道が大渋滞である。携帯電話で連絡を取り合い一〇時過ぎに友人家族と合流。アウトドア用の食材を調達。それぞれ好みがあり大量である。クーラーボックスに保冷剤を入れ、最初の目的地である鬼押出し園に向かう。

天明三年（一七八三年）浅間山は大噴火を起こし、その期間は三ヶ月にも及んだと言われている。火山灰は空を闇に変え千人以上の人命を奪った。冷えて固まった溶岩は延々八キロメートルにわたり恐ろしい景観を見せている。園内は遊歩道があり、中心には浅間山を背に犠牲者の霊を安置した観音堂が佇んでいる。

遊歩道を歩いていると、浅間山の麓に一軒の山荘がある。約四〇年前、連合赤軍が立籠り事件を起こした浅間山荘が昔のままの姿で残されているのには驚かされた。

昼食後、鬼押出し園を後にし「軽井沢おもちゃ王国」に向かう。広い室内には空調が完備された遊び場があ



り、孫達を自由に遊ばせ、私達は少し休憩。孫達は疲れも知らず遊びまわっている。その姿を見ていると家族の幸福を感じる。

三時頃、今日の目的地である北軽井沢の貸別荘へと向かう。浅間山の北側一帯、樹林の中に静かに建っているログハウスが数棟。今日の宿泊地である。

窓を開けると心地よい風が入り快適である。女性と孫達は温泉に。男性は別荘の風呂に入りアウトドアの準備。皆楽しそうである。

バーベキューが始まり、子供達はお腹が空いていたのか食欲旺盛である。我々はビールを飲む傍ら、今日の楽しい出来事を肴に、また酒を飲む。お腹もいっぱいになり管理人の許可をとり花火大会。大満足である。

翌朝は6時起床。空気の爽やかな林の中を散歩。別荘に帰ると、朝食のご飯と味噌汁の良い香りが食欲をそそる。

昨日の後片付けをして八ッ場ダム経由で伊香保に向かう。途中、八ッ場ダム資料館にて休憩。一一時頃、伊香保に到着。

伊香保温泉は石段の街。四〇〇年の歴史がある階段は三六〇段もある。石段の中程には観覧所、下には温泉の源泉が流れている。

石段の頂上から更に上へ行くと、伊香保神社がある。他には、美人画で有名な竹久夢二記念館や『不如婦』で知られる徳富蘆花記念館などがある。

温泉街を通りすぎ伊香保グリーン牧場へと向かう。広大な敷地には小動物が放し飼いになっている。レストランで昼食をとった後は、友人家族とは別行動を取り、私達は子供遊園地へ。孫とアーチェリー、パターゴルフ等をし、さらに孫がポニーに乗ると言うので、ポニー乗馬場へ向かう。ポニーに跨りコースを一周。得意満面の笑顔である。

しばらくたての牛乳、アイスクリームを食べ、今日の宿泊地、温泉旅館「ふくぜん」にチェックイン。私達は温泉、子供達は伊香保の街を散策。六時より広間で楽しい夕食。広間には舞台があり、孫が音楽に合わせブリキユアのダンスを披露してくれた。皆楽しそうである。

夜はフロントの許可を得て駐車場で花火大会。後は

大人の時間。一室に集まり日々の生活、子育ての話などを肴に二次会。2日目を終える。

翌朝、榛名湖へ向かう途中、榛名山に。山麓からロープウェイに乗り三分で頂上に到着。少し肌寒い。山頂からは榛名湖、谷川岳をはじめ、上越の山々が一望できる最高の景色である。また、日本一の富士山にその姿が似ていることから「榛名富士」とも呼ばれている。今回の最終目的地である榛名湖へと向かう。湖畔にはゴーカート乗り場があり、孫達を乗せ三台で競争。コースを二周、大喜びである。

榛名湖は東西1km、南北1.8km、榛名山の噴火で出来たカルデラ湖。冬季には氷が張りスケート、ワカサギ釣りが出来る。

榛名湖乗船場に行き、モーターボートをチャーターして湖を一周。スリルとスピード感があり、また爽やかな風を浴び、帰路に着く。

本当に楽しい家族。友人の絆。元気で居られる幸福を感じた二泊三日の旅行であった。友人、息子達に感謝である。

世相雜感

有 田 睦 信（氷上町）

日本に安心出来る地域があるかどうかといえはノーと言わざるを得なくなつた。故郷、丹波も例外ではない。3・11を以て、日本の原発の安全基準が完全に破綻したためである。したがって、百歩譲つて、新たな原発安全基準を策定し、新基準を満たす原発のみの再稼動が、本来の筋道である。しかしながら、福島の新規も何ら踏まえ、最も優先されるべき人命を守る安全対策を講ずることなく、破綻した旧基準のまま、詭弁を弄して大飯原発三号基の再稼動が決定、そして四号基もなし崩しに再稼動した。主権者市民は、まさに代表民主制の危機に直面している。

新たに発足する原子力規制庁が原発の安全性をどこまで揺るぎないものにできるか期待されていた。しかし、市民の目に触れることなく、六月二〇日に国会で

成立した原子力規制委員会設置法案は霞ヶ関の常套手段で、その付則に骨抜き条項が盛り込まれた（古賀茂明元通産官僚）。規制委員会は委員長含めて五名構成であるが、委員長と委員二名の規制法抵触が問題になっている。終息まなならぬ福島原発の事故を前にしても、未だこのような恣意的人事案が政府から提出されていることに、政府は福島原発過酷事故から何も学び取ろうとしないように見える。原発停止による不良債権化がもたらす電力会社経営への影響を慮り、「安全規制は適当に」が垣間見られる。大飯原発の事例の通り、経済界からの脅しや圧力に行政が屈し、安全規制がまたしても形骸化することだけは避けねばならない。規制庁発足前に早くも暗雲が垂れこめ、安全規制が非常に危惧される。

さて、大飯原発の安全性に問題がないのであろうか。大飯原発を耐震性の観点から評価すると、想定地震動が不十分で、柏崎刈羽原発では一六九ガル（ガルとは地震の揺れの強さを表す加速度の単位）を記録したが、大飯原発は七〇〇ガルの甘い想定しかなされて

いない（石橋克彦神戸大名普教授）。日本の原発施設は震度六の地震が直撃すれば壊れるように設計されている（武田邦彦中部大教授）。福島事故では、免震棟が重大な役割を果たしたが、免震棟がない大飯原発で大地震が起きれば、指揮、作業が混乱を極め致命的となる。とにかく地震大国日本の原発施設の耐震設計基準は経済性優先で安全性が犠牲になっている。地形的観点からは、若狭湾は断層が集中しており、大飯原発三号基の直下に活断層の存在が疑われており、さらに敷地内にある軟弱破碎帯が近くの活断層と連動して地表がずれると大惨事となる危険性があり、十分な調査評価が必要である（渡辺満久東洋大教授）。

一方、大飯原発の津波想定（約一・一m）の根拠は不明だ。今から一三〇〇年前に若狭湾岸の真名井神社境内に今も残る波せき地蔵堂（海拔約四〇m）まで巨津波が襲来したと伝承されている。中立の第三者委員会を設置し、地層調査計画、実施、解析評価が急務だ。以上の通り、大飯原発の危険性は何も払拭されていない。

大飯原発の過酷事故が発生した場合に放射性物質がどのように拡散するかは、原発の緊急時迅速放射能影響予測ネットワークシステム（SPEEDI）を活用すれば容易に試算できる。しかし、政府はSPEEDI情報の積極的公開を渋る本末転倒の有様だ。㈱環境総合研究所が自社開発のパソコン版SPEEDIによるシミュレーション結果をネットで一部公開しており、非常に参考になる。丹波は大飯原発から約八〇km圏にあるが、風向き、降雨、降雪等の天候条件により、放射性物質による深刻な汚染地帯となることが推察される。原発防災、避難マニュアルの作成が急がれると同時に、安定ヨウ素剤の各家庭への事前配布は欠かせない。その他、家庭用放射線測定器（ガンマ線のみ測定可）が原発防災必需品となった。

昨年の福島第一原発事故の調査検証は未だ終わっていないが、その原因はどこまで明らかになったのだろうか。民間のFUKUSHIMAプロジェクト委員会（山口栄一委員長）のFUKUSHIMAレポートが原子炉の圧力容器の圧力と水位、格納容器の圧力等の経時変化

データに基づき、客観的に解析評価を行っている。地震、津波襲来により、原発の炉心冷却の交流電源、非常用電源を失い、非常用炉心冷却装置が停止したが、「その後、無電源（または直流電源）で炉心冷却のための最後の砦があり稼働した。即ち、一号基は非常用復水器冷却システムが八時間稼働、二および三号基は隔離時冷却システムが数十時間稼働し、原子炉は冷却され制御可能」であった。

この間に海水注入の判断を躊躇なく行っていたれば、少なくとも二号基、三号基の爆発事故を回避できたのではないかとの結論を導き出している。一号基は地震により致命的な主蒸気配管損傷と解釈できるデータもあり、爆発事故を防げたかどうかは不明である。

いずれにしても、原発事故前の安全対策の不作爲、一、二、三号基の原子炉を制御不能に至らしめた判断ミスが加わり、国家をも揺るがす紛れもない人災事故となった。この責任は計り知れない。

国策民営の原発推進は、立法・行政・電力会社が運転する「ブレーキが壊れた自動車」に関連企業、学者、

マスメディア（大手新聞・テレビ・雑誌）等を同乗させ、超法規で高速道を走行しているようなものといえる。原発の規制、安全が全く以て蔑ろにされてきた。そして、福島原発事故は起こるべくして起きた。日本の全原発は天災やテロを契機に、明日にでも第二の福島が起きてもおかしくない状況に置かれている。

今日まで電力会社や政府は原発コストは火力発電や一般水力発電より安価であると喧伝してきた。しかし、これは単なるモデル計算であり、現実から乖離したものであった。現実の経営データである有価証券報告書に基づいて、原発コストを試算し直すと、原発コストは火力発電や一般水力発電より高いことが明らかになった（大島堅一立命館大教授）。福島原発の過酷事故のような損害賠償費用を含めると原発コストは更に高くなる。原発の経済性を根拠にした原発推進は虚構であった。

原発推進の根拠の一つに原発稼働時には炭酸ガスが排出しないことがあった。しかし、最近、地球温暖化の人為炭酸ガス説の間違いを指摘する理論が国際的な論文誌に掲載された。地球温暖化人為炭酸ガス説に疑

問を投げかける科学者は非常に多い。マスメディアは今日まで地球温暖化に対して偏った煽り報道を続けてきた。これまた鵜呑みに出来ない良き事例である。

全国の全ての原発を停止しても、火力発電、水力発電、揚水発電を中心に、省エネ、自家発電、需給調整、電力融通等を図ることにより、ピーク需要含めて、日本の消費電力は問題なく賄える（環境エネルギー政策研究所報告）。今後、固定価格買取支援制度のもとで、地熱、太陽光、太陽熱、小水力、風力、バイオマス、その他等の開発、実用化を地域と合意形成を図りながら推進し、化石燃料消費量を減らしていくことが可能となる。また、地域再生に向け、地域の特徴を活かした多様な分散型再生可能エネルギーの活用を期待したい。

戦後、日本の原発導入、増設経緯は冷戦時代の中にあつて日米関係に深く関わっており、また日本の核武装とも連関があり、専ら政治問題として捉えられてきた。

しかしながら、主権者市民が蚊帳の外では済まされなくなった。原発安全が砂上の楼閣であつたこと、原

発稼働により生じた猛毒の高レベルの放射性廃棄物の量は中間貯蔵の限界に達していることを思い至れば、今や原発は市民の命と生活を脅かすものに変質したと云つても過言ではない。

この責任は第一義的には政府と電力会社にある。しかし、原発を安全なものと信じ込まされ、黙認してきた私たち主権者市民にも責任がないとはいえない。

現代に生きる私たち市民は電気を不自由なく享受してきた。しかし、猛毒の高レベル放射性廃棄物という負の遺産の処理だけを全く責任の無い子供や孫たちの世代に先送りすることは、どうみても許されることではない。

悠長なことを言っていられなくなっており、原発問題を現世代の主権者市民一人、一人の問題と捉え、遅まきながら、今後原発をどうするのか、その判断と行動の時が到来しているのではないだろうか。

（昭和20年、氷上町生まれ／元企業勤務・工学博士／厚木市在住）

折々の記(9)

井 本 義 一 (柏原町)

○その昔、鶴田浩二の歌台詞に「古い奴だと思いでしょうが……」があるが、わたしには携帯とメール万能時代の今こそ、狭い交際範囲内での毎年のスタートにあたり、いろいろな絆の結び直しでもある年賀状の自身と形式の変遷に刮目しており楽しみだ。

今年の出状枚数160。加えて暮れの11月から頂いた喪中がき分を大晦日に投函、元日に届くように出した寒中見舞(官製ハガキで)が15で計175通。受け取り枚数154通。受け取り賀状で、あたたかい血が通ったように感じる、手書きによる添え書きの大多数は「お元気ですか？」だ。「元氣かと問うた返事は一年後―朝日川柳・小野良一」にならないように、わたしは出す賀状の手書きの添え書きで、わたしの元氣度を測っていただくように氣をつけているし、こうしたものを出せる現状はありがたいこと。

次に目を引いたのは「わが国の将来はどうなるのか？」と閉塞感と不安感をぶつつけられた手書きが7通あり、全く同感、極めて重要なこの一年の行く末を思い知らされた。

また憂国の情の変形か？ 故郷柏原の友人は「白地に赤く日の丸染めて ああ美しい日本の旗は」と小学校唱歌と日の丸(謹賀新年の文字の横に)が描かれ、「祝日に国旗掲出を」と主張していた。変わったところでは、同じ方から2枚をいただいたこと、それもお二人から、過去一人からは、たまにあったが。旧職場先輩の添え書きは自作川柳であろうか？「酒代が葉代へと化けてゆき」があった。因みにお楽しみ抽選結果は切手シート1枚。

寒中見舞い拙文。表裏とも下手な毛筆書きで。「しんしんとして そしてきびしい 寒さの季節を むかえました 新季は ことの外 寂しく迎えられたことと拝察いたし ここに ご逝去の方(御主人様、御奥様)のご冥福を お祈り申し上げ 季節のお見舞いを申し上げます」平成〇〇年一月

こんな世の中だからこそ、鬼籍に入るまでは絆は自

分なりに小さくとも深めていきたい。後日お二人（奥様と戸主）から謝意を含む寒中見舞いをお受けした。

（妻と豆まきと恵方巻きを 今日23・2・3日）

○「何某様 拜啓 浅春の候お元氣ですか。閉塞感、不安感が充満し目を覆うばかりの政党政治劣化一途の世上に、希望を持ちたいのですが蘇生要因は見つかるでしょうか？ メル友ならぬ年1回の賀状友のあなたに突然のお手紙を差し上げますのは、勤めの縁などで支えられ育てていただきました小生も、今年77歳と馬齢を重ねますにあたり、小さな感慨と謝恩の気持ちを籠めて下記認めさせていただきます。ご寛容の上ご笑覧下さい。

具体的は何故傑出した総理大臣は出てこないのか？敗戦後に戻って、田中正明氏の「パール判事の東京裁判日本無罪論」から、山田風太郎氏の「戦中派不戦日記」、藤原正彦氏の「国家の品格」などを読み返して、米国の占領政策によるエリート人材の追放と、真のリーダー養成機関であった旧制中学、同高校を廃止するなど教育制度改革により、特に政治面の突出した人材、人格が払底した帰結と、さらに民主主義主権在民

の大前提は「国民の成熟した判断ができること」でも「国民は永遠に成熟した判断はできない」

そして「国の前進には真のエリートが必要」だと学ばせていただき、自分なりに得心したことでした。世界に通用する識者である藤原氏のこの哲学は、いままさに現出していると思いますし、いずれわが愛すべき日本国の将来が証明してくれるでしょうが……。

昨年12月、朝日夕刊紙上、哲学者森岡正博氏の「人生の指針は古典から」のタイトルで明治の思想家・宗教家の内村鑑三氏が明治30年に著した「後世への最大遺物」（岩波文庫）の紹介文中で、内村は、人間が自分の死後に遺していける大事なものに何があるかと問いかけ、たとえばお金や、事業を興すことや、教育をすることも大事だと説いていることを知りました。重要なのは、そのあとで、そのような才覚のない一般庶民はどうすればいいのか？ 内村は言います。死後に遺す最大の財産は、実はお金や事業などではない。「最大の財産は、その人の勇ましい高尚なる生涯である」と。森岡氏はこの結語を、（その人自身が自分の人生を真摯に生き切ることである。真摯に生き切られたそ

の人の人生それ自体が、人類にとつての最大の遺物である」と解釈していました。この出会いに、わたしは感銘と共感を覚えしました。そして自分自身のささやかな実践が、合致した時即良書だと考えました。世の中に万巻の書物がありますが。

別紙は8年連続で、郷土誌（兵庫県丹波市・山ざる41号）に投稿済の拙文コピーです。（23年11月号原稿は1月10日送稿済）時節柄ご自愛下さい。お元気で!!

敬具

23年3月5日 井本義一

上記は「無縁社会」や「家族ならぬ孤族」なる無機質な言葉が飛び交う現世に逆らつて、少しでも過去の友情の絆を呼び戻そうと、先ず旧職場関係の賀状友の心と呼びかけた。

さて、こだまはいくつ返つて来るだろうか? 今日、西新宿で同期入社者同窓会開催、事務局担当11年経過。発足時会員数22名・現在在籍9名、本日出席者6名。

(23・3・5日)

○あの3月11日、14時過ぎ二階の自室で日課の昼寝中、旧職場の先輩からの電話を布団の中でのんびり天井板

を見ながら受けていた。3〜40分経過しただろうか?

長電話恐縮申し訳ありませんなどと言っている最中に46分は来た。それでも話していたが、双方の音が固まり恐怖頂点と感じたその時、ガシャというような音と共に懐かしい声は途絶えた。治まらない横揺れ地震の中を、妻が「足ががくがくする」と言いながら階段を上がつて逃げて来た。思わず繰り返し「世直れーよなおれ、よなおれ」の言葉が口について出た。

遠い記憶を辿れば、幼少のころから旧実家で祖母、母が祈るように唱えていた言葉だ。同じ木造二階建てが激しく揺れた地震時に、必ず家中のあちこちで聞きつつ成長してきたのだが、それは明治以前から伝承されてきた地震を宥め鎮めるための呪文文化なのだろう。当て字の正否も併せて不詳だが、生々しく遠い怖い記憶が蘇った日だった。

あの日から連日の受信画面から「言葉を失う」「もどかしさ」「やりきれなさ」「くやしさ」「残念」が満ちるのに加えて、地震不明者の家族救出探しも出来ぬままの原発事故による現住避難該当者の女性の方が「根無し草になった」には、何処にぶつけていいのか

「憤り」を感じた。心中の落ち込みが増す中、旧職場松屋町OB会へ欠席回答コメントを以下4月7日出状した。「地震、津波、原発事故この三重苦に、個人の日常と日本国の幸福度の質量共の実力低下は、若者を中心とする生産者人口激減下でもあり、向こう20年余は回復不可能と考えます。無力な小生は生ある限り、今後は第二の敗戦時と受け止めて、慎ましく真摯に向かい合いたいと思います。」先ず新敗戦時を迎えて渡辺淳一氏の「鈍感力」を読み始めた。小さなことでも今、わたしに出来ることを10日、市有林空地にコナラの幼木を掘り起こし、植樹ボランティア作業に従事した。

「いらだたしさ」が募る中、わが国のこの大国難日から早や一カ月、その人により「救援格差」「採用見送り」「解雇やむなし」「避難差別」など人生が変わった重苦に遭遇された方々が日々多くなっている今日。

（満開の桜花がなぜかうら悲しい23・4・11日）

○わたしのオリジナル健康生活目標4選択肢の一つ快便。関係キーワード項目は、ウォーキング、足腰屈伸ひねり運動を中心とする排便（大小と排ガスも）促進運動、水分補給、青竹踏み、腰曲がり矯正運動だ。「お

通じがよい」と言うのは、毎朝の排便時に、決まったように長径状2〜3本以上を出し切って、「溜りがなく」精神衛生上スツキリとスタートが切れることだ。

就寝時の夜中2時前後、小便に立つ時はすぐ立ち上がらずに、①両足首を50回廻してから、②寢床の上で寝たまま左右に順次身体を横に立てて、少しずつ角度を変えて、要は左右お尻部と腰上の肉部位に、体重がかかるようにゆっくりと動かしていると、腹中にガスが発生している場合、それは出ていくので、そのあとコップ1杯の水を飲みトイレに立つとよく出て、あと4時起床時の小便排出でOK。この起床時もすぐに起きずに座ったままで、両足裏を合わせた両足を両手でつかんで、先ず左足、次は右足の前面に向けて、上体を折り曲げ運動50回、これは排便のみならずウォーキング前のストレッチ運動としても良い。又ガス抜きは、昼食と夕食後にイボイボのついた青竹踏み各250回、特に踵面を踏む時、快音と共にスツキリ出てくれ、妻に詫言を入れながら必励行している。

早朝4時50分のウォーキング出発前に、コップ各半杯の水と豆乳を飲みバナナ1本を食べてスタートする

と、なおガスがあれば音と共に排出する。さらに途中の公園での腰骨曲がり矯正運動時もありがなければ出てくれる。帰宅朝食後の定例の大小排便時前、冷水をコップ一杯飲む。あと必ず玄関の土間に立つて、二つの90度角に置いた下駄箱上左右に両手を立てて、丁度三角形の底辺の位置に身体を倒して、下腹部を前面に反らすように、左へ50回、次いで右へ50回、目一杯突き出し運動のあと、便座に座り身体を前に倒すとスムーズに出てくれる。

あとスポーツクラブでのベルト・バイブレーターによる下腹部内臓中心の左右ひねり運動計10分間。また大浴場につかりながら右手の掌で首下胸部から臍のした下腹部まで、時計まわりに特に最下腹部箇所では強めに50回撫で回している。排泄は循環と考えているので、血液も順調に流れてくれよと祈りながら。気泡（ガス）、水分、消化後の滓も、要は体内に塊状で滞留しないように、スムーズに体外へ排出するように、絶えず生活運動習慣上の知恵を働かせて内臓の動きを助けてあげたいのだ。

今日、中部電力が首相の浜岡原発全炉停止要請受諾、

可能な限り自然エネルギー転換へのスタート日にして欲しいものだ。
(23・5・9日)

○執筆を担当した6月25日緑地作業日記（「能ヶ谷西緑地だより」9月1日号より）

2日前からの強風で林木の枝が自然淘汰よろしく敷地内に落下、この枯木類を集積場所まで運び整理作業。また立ち枯木の間伐作業も。電動草刈り機作業が困難な樹木の周りや、斜面箇所を中心に、若竹や蔦かずら類と、林間下の日当たり不良雑木の刈り込み作業を。30度前の気温に加え湿度高く、滴り落ちる汗でズボンのお尻下部分まで濡れて色が変わった。蚊の襲撃も加わり暑く苦しかったが、フクシマの内定取り消し、避難差別、風評被害を含めると五重苦く六重苦の東日本の方々の「失うものは何もない」「根なし草になりました」のご辛苦を思うと我慢、自分に鞭打った。

（因みに毎年8月は作業休み月。23・6・25日）

○「最近思うこと」敗戦後66年目に千年に一度の3・11に加え、軽重の差はあるものの文字が異なる被曝人生に突入（これは人災）、国内外に災厄をふりまく下等国になり下がってしまった。

この大難直後、友人への書簡文に「文明の行き過ぎや、足ることを知らないあらゆる欲望に天が鉄槌を下したのか。また3月11日を第二の敗戦日と受け止めて、これからは66年前と同様に慎ましく、真摯に生きて行く」としたが、その後、計画停電、節電が普通となり、また何でも飲み食い出来たわが国の飲食物が制約される現世となった。

「これから」のわたしに与えられた時間は判らないものの長くて10年位だろうか？ それと「第一の敗戦時」経験の有無から考えれば、わたしにとっては我慢しやすい年齢に到達しており、生きやすい時代の再来と考えるより仕方がないのではないか。愚かな取り返しのつかない原因を引き起こした当事者世代としての責任を痛感。至難のことだが一日も早く孫達世代には世界から称賛される国家に戻して欲しいものだ。

天は更に苦難をと言うより、これはヒトの我欲の行き過ぎによる当然の帰結か。8月9日、長崎原爆の日の今日、欧米の政府債務危機に加え、米国債の格下げⅡ同国の先行き景気不安による株価大暴落は、世界第二位の米国債保有国のわが国将来に大暗雲、東京市場

も9千円台割れとなった。

実は「一年毎の回転ドア政權」に象徴されるわが国政党政治劣化から起こして、将来への長期にわたる閉塞感、民主主義政治定着不安を書簡文にして旧職場の諸友人に5日前の3月7日に出状していた。友人は言う。「お前が心配、悲憤慷慨してどうなるんや。なるようにしかならんの違うか」と。この自己習性ルーツを振り返った。柏原の中学、青年団時代の弁論大会に自分なりに打ちこみ、拙い考えを主張したことに思い至った。

いつも頭に住みついている青春時代のかいばらの山川草木を含む愛しい景色を改めて思い出すとともに、この習性「雀百まで踊り忘れぬ」「日曰これ新た」で刺激があつて、これもまた認知症予防に良いと考えている昨今です。23年8月9日記

上記は10月15日欠席した柏原中学校喜寿記念同窓会（卒後61年）に。全員に通知する例会は今回を最終。ついで昭和25年卒「第三回生喜寿記念誌」を作成したいとのこと。30頁のすばらしい・明日からの活力源となる記念誌受日。

（23・10・21日）

○「……この違和、閉塞、不安感はどこから。それは取り返しのつかぬ人災ミス」原発と、格差社会助長政策を推進してきた政権を選んできた負い目からでしうか？ 現政権にも幻滅中。」これは今年の年賀状に恒例手書きによる添え書き第3項の発信文です。

3・11の昨年は重苦しい日々を経過に、込み上げてくる内省情報を発信し続けた年でありました。因みに年間の発信手控えより暑中見舞い30通、上記賀状187通（うちNo.2内省情報発信分として2枚目を出した先35通を含む）、恒例大晦日に下手な毛筆書きの寒中見舞い出状先13通を除いて、手紙116通とハガキ26通を出状。

上記6／22～7／10に出した暑中見舞いの手書きによる添え書きは「千年に一度の罹災、安全原子力村フクシマを始め、もやもやイライラが多く、加えて「初体験」から来る万事がスローペースに心苦しく暑い夏になりますね。

もう一つの切り口は、与野党を始め全関係当事者の「不慣れ」による現実と考えます。

今、各勢力、メディア等に振り回されることなく、

全国民が気合を入れ直して、粘り強く明日につながる民主主義を育てたいものです。一年毎の回転ドアー政権はもうゴメンです。お元気で!!」

先月のNHKスペシャル「証言ドキュメント・永田町権力の漂流」で、関係当事者の最たる人、小沢一郎氏が「政権交代後2年余、民主党の不慣れによる政治停滞」を認めていた。グローバルに考えれば手痛い悲しみや恨みの歴史を繰り返して来た独裁や軍部専制政治はご免、さりとて、この民主主義政治のなんと回りとどく、時間のかかることか、その上、昨年の悔やんでも悔やみきれぬ人災原発ミスを頂点に、過去から未来にかけて大小無数の失敗、読み違い、愚行を繰り返しながら人間社会は、一步一步前に進んで行くより他に選択肢はないのだろうか。無い。今年の日本も他国のようにカオス（混沌）は深まるのだろうか。無力なわたしは本年も「今年こそ希望の持てる年を」と念じ続けたい。活け花千両の赤美し送稿日。（24・1・2日）

（昭和9年、柏原町生まれ／前・金融機関他勤務）

私の職場

番組制作の楽しみ

放送現場、53年間を振り返る

上野 重 喜(氷上町)

私の職場は一言でいえば、放送番組の制作現場です。一般には、ディレクターとかプロデューサーとよばれる職業です。私は、テレビの草創期、昭和三四年にNHKに入り、広島局を振り出しに、平成四年の定年退職まで、三三年間勤め、その後、海外での仕事など協道にも逸れましたが、今年の三月までは十数年間、NHKの「ラジオ深夜便」「ラジオ宗教の時間」などの番組をフリーの立場で制作しておりました。

初任の広島時代は、まだまだラジオが主流で、私は最初、芸能番

組担当。夜一一時台の「夢のハーモニー」、朝の「邦楽」「歌謡曲」月一回の「のど自慢」「声くらべ腕くらべ子ども音楽会」など広島ローカルの番組作りに走りまわっておりました。「夢のハーモニー」は一〇分のレコード番組ですが毎日となれば大変です。邦楽や歌謡曲の番組は、出演者の交渉から収録編集と手間がかかります。のど自慢や声くらべには出張が伴います。すべてラジオですから、ディレクターは私一人。このころ新人にして年間四百本以上を担当しました。このほか、主な仕事として

東京などから全国向け番組が来たときのアシスタントです。当時、NHKのテレビには「私の秘密」「歌の広場」「ジェスチャー」などの人気番組がありました。渡辺紳一郎、藤浦洸、藤原あき、あるいは金語楼、ターキーといった有名人の番組の下働きです。たまたま高橋圭三アナウンサーにお貸ししたストッブウオッチが本番中に止まって叱られたことなど思い出します。歌謡番組のスターたちの迎えや送りの役目もありました。マヒナスターズ、デビュー当時の松尾和子、ペギー葉山、春日八郎、広島出身の若山彰……といったみなさん。「ペギーさん、お次、出番です」と舞台の袖に案内したとき、幕が開くまでの暫くの間、祈るように極度に緊張集中し目を閉じているペギーさんの張りつめた表情をみて圧倒され、「ああプロ



NHK大阪放送局で

が歌うとはこういうことなのか」と感動したことを思い出します。広島出身の二葉あき子さんを台風直前に宮島の宿までお送りしての帰り道、強風豪雨に苦しめられたことも今は昔の思い出です。

広島に三年勤務の後、郷里に近い大阪に転勤しました。大阪でも

当初ラジオ制作部所属でしたが、次第にテレビの時代となり。仕事はテレビ主体に変わってゆきます。大阪では主に家庭婦人向け番組を担当、灘生協の永谷晴子さんや、華道、茶道のお家元、料理の土井勝さんたちにも懇意にしていたきました。とくにお母さん向けの育児番組「三歳児」「幼児の世界」のシリーズでは、京大の園原太郎、神戸大の黒丸正四郎両先生の指導のもと、乳幼児の「生感」の取材に幼稚園、保育所、各家庭や公園を飛び回ったものです。

大阪で七年勤務の後、東京に異動しました。東京では最初「生活の知恵」という番組を担当しましたが、すぐに新番組「日本史探訪」の制作グループに入りました。これは、歴史上の人物の魅力を新たな切り口で探ろうというもので、六人のディレクターが交互

に週一回三〇分の放送を担当します。六週に一本、スタジオでの出演者の話と歴史の現場でのフィルム取材で構成する番組作りは大変な激務です。制作にあたって、もっとも苦労したのは話し手（出演者）の選定です。私の担当分の例を挙げると、「源義家」を檀一雄、「西郷隆盛」を海音寺潮五郎と色川大吉、「新選組」を司馬遼太郎、「弘法大師」を湯川秀樹、「藤原鎌足」を梅原猛といった方々に語ってもらっています。いずれも超有名人です。西郷隆盛を崇敬する海音寺さんは、いつも羽織袴で帰りには必ず門前まで出て見送ってください、まさに古武士の風格がありました。湯川博士は空海を「日本史上は言うまでもなく世界でも上位にランクされる万能の天才」と讚え、「私にはしかしほんとうのところはわかりません。私



アフガニスタンの農村で

のような俗人がかれこれ言ってもしょうがありません」と結ばれました。司馬さんは「近藤勇や土方歳三は三多摩の百姓の出ですが武士よりも武士らしいサムライでした……」と実に話しぶりが魅力的でした。司馬さんに出身地を聞かれたので丹波の氷上郡ですと答え

ると、たちどころに「そこには赤井悪右衛門という強いのがいました。悪というのは強いという意味です。楠木正成も悪兵衛といいました……」と当意即妙、実に雑談が楽しい方でもありました。

そのころ私は三〇代半ば、働き盛りでした。昭和四六年には「美の世界」という三〇分八本の海外取材番組で約三カ月の世界一周取材をしました。同行の谷尾チーフ・ディレクターはNHKの美術番



アフガニスタン・バーミヤンの石窟
(右端が上野)

組を築いた人、益子カメラマンは数々の賞に輝くドキュメンタリーの名手、私はコーディネーター役、両先輩に学ぶところ多大でした。このときはボストン美術館をはじめ各国の美術館や史跡を訪ね通常はみられない秘宝も撮影させてもらいました。とくにアフガニスタンの秘境バーミヤンを訪ね五〇センチの巨大な石佛を撮影したときは感激でした。今は爆破されてしまった遺跡。あのころのアフガニスタンの世界のどこよりものどかだった田園風景が忘れられません。

この時の取材は、昭和四七年の初め三〇分番組八本シリーズで、夜の七時半から総合テレビで放送されました。その後、私はフィルム・ドキュメンタリー「日本の美・屋久杉」「同・富岡鉄斎」「文化特集・反骨の町絵師国芳」などの美術ものの、他に一時間・三夜連続の教養



パキスタンガンダーラ遺跡

特集(ETV)「アラブの世界」「緑と日本人」「人口問題」などの大型番組も制作しました。このころを振り返ると、すでに、昭和四〇年代後半(一九七〇年代)には、オイル・ショックがあり、石油エネルギー、そしてアラブ世界への関心、自然保護・環境の問題、高齢

化社会への問題意識が私の中に強かったことを思い出します。そのころ、「昭和の青春」という特集も担当し古賀政男、松本清張、林健太郎ほか十人ほどの方に「昭和」を語っていただきましたが、古賀政男さんの「豪邸」で、「影を慕いて」について「あのころは貧乏の極みでした。影でなく『金』を慕いて、という気持ちでしたよ」と古賀さんが述懐されたのが今も耳に残っています。

四〇歳を過ぎたころ、私はチーフ・ディレクターからチーフ・プロデューサーに職務が変わりました。ディレクターは番組の企画・構成・演出とまさに現場の仕事ですが、プロデューサーはディレクターの集団を統率し、人事経理などを仕切るつまり管理的職務です。言いかえれば、現場の第一線で番組を作るのがディレ

クター、その後ろにいる責任者がプロデューサーです。プロデューサーは、経営職、ディレクターは専門職という分け方もします。番組の末尾に企画・取材・構成・演出などと表示されるのがディレクターで、制作統括と出るのがプロデューサーです。ディレクターは直接に制作現場へ出かけ指揮をとりますが、プロデューサーは普通番組取材の現場へは出かけず背後で管理します。ですから向き不向きはありますが、おもしろいのはやはりディレクター稼業でした。プロデューサーになって、私は「ハンゲル講座」の開発、衛星放送推進、昭和天皇崩御時の番組差し換えなどの役目を担当しました。

平成に入って、私は三年間、インドネシア国営放送職員研修機関で働きました。このときは、J

ICA（国際協力機構）への出向の形でNHK仲間のチームリーダーとしてインドネシア情報省に属して働き思わぬ貴重な海外体験を積ませてもらいました。

インドネシアは国土面積日本の五倍有余、人口二億三千万の大国、島の数一万七千という島嶼国家です。瞬時に情報が届く放送の効果は測り知れません。私は、西はスマトラから東はニューギニアまで、5千キロの旅もしましたが、実に貴重な体験でした。戦時中は日本が占領していたのですが、現地の対日感情は決して悪くありません。インドネシアは日本にとって、これからもますます重要な国です。

平成四年末に私はNHKを定年退職しNHK学園に職を得ましたがその後ふたたびICAの縁でトルコに三年勤務、帰国するとN

HKから声がかかり、「ラジオ深夜便」を手伝ってほしいとのこと。実は、テレビ時代の今、ラジオ番組ができる放送人が激減しているのです。そこで私もラジオ時代に修業した人間が重宝がられるのです。今は、録音機材も簡便になり節約・省力化の時代ですから、本来ならアナウンサーを頼むべきはずのところインタビュ어도自分でやりました。出演者の選定、インタビュアー収録、編集、全て単独で行い、番組の送出だけ、泊りの当番に頼むのです。したがって私自身は、真夜中の放送時間には立会いをしませんから楽です。この仕事を平成一年から、この平成二四年三月まで続けました。この仕事に義務付けは一切なく、やりたいときにやりたい人を提案してやれる定年退職者にとっては最高の仕事を後期高齢者になるまでさ

せていただいたことに感謝しています。夜一時過ぎから朝五時までの「ラジオ深夜便」、私は早朝四時台の「こころの時代」「明日へのことば」「インタビュースペシャル」などを主に担当しました。ちなみに、出演者で丹波ゆかりの方々の例を挙げると、私の先輩中野ディレクター担当で植物学者・岩槻邦男、元二玄社社長・渡辺隆男、私の担当では、元大覚寺門跡・上井寛圓、サル学者・河合雅雄、元文化庁長官・河合隼雄、アジアの新しい風・上高子、丹波新聞会長・小田晋作と言った方々にもご登場いただいております。「ラジオ深夜便」は同郷のみなさまにも多大のご支援をいただきました。ありがとうございます。

（昭和11年、氷上町成松生まれ／昭和34年4月NHK入局／元NHKエグゼクティブ・ディレクター）

My Gallery

このページは、会員の皆様の作品を展示するコーナーです。写真、絵画、習字、生け花、手芸など、何でも OK です。発表の場として気軽にお使いください。最初は、岡吉明さんの写真です。岡さんは当会の事務局として、又お仕事の合間をぬって趣味の写真を撮影されています。

(編集構成：上田道代)



名所となった十間橋より



駒形橋より



東京タワーとスカイツリーを1枚に
納められた・目黒区大岡山より

←清澄公園脇よりの夜景



スカイツリーのベストポイントを探し東京の地図を片手に、周囲をぐるっと 60Km を延べ 4 日かけて歩きました。



野鳥は「ハイチーズ」が出来ない！
飛びたつショットはピントを合わせた状態で半押しのまま飛びたつまで待つ、移動が早いのでブレとピンぼけが多く外れが多い分撮れたときは感激です。
(埼玉県朝霞市他 撮影：岡 吉明)

My Gallery

三觜洋子さんが生け花を始めたのは、柏原の中学生の時、以来 50 年に余る研鑽を重ねて、今も（財）池坊華道会の師範：三觜拍洋としてご活躍です。

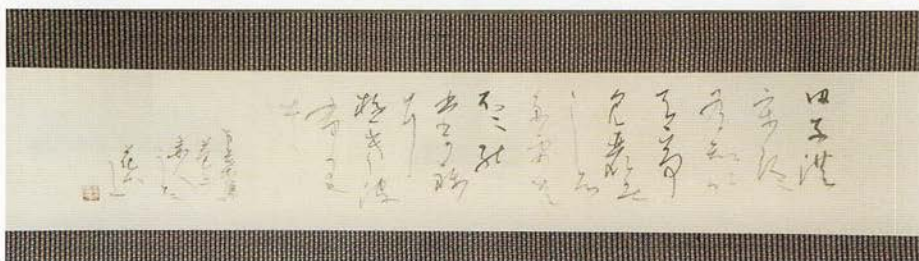


2012 年いけばな池坊は、歴史に刻まれ 550 年を迎えました。
四季折々、彩り移りゆく草木の美しさへの感動を、いかに表現するか…
花と向きあい、語りあっています。三觜拍洋（三觜洋子：旧姓伊田）



My Gallery

一口に字を書くとってもその奥は深く広い。藤原ひさ子さんの書には書への限らない探求と美意識に基づいた遊び心があり見る人を飽きさせません。



祖母の実家には紀貫之を祀る墓石があることから、神戸では貫之に造詣の深い西谷卯木先生にかなを、東京では、大溪洗耳先生に漢字を習う。同人を脱退し自分の書きたい字を書くようになって久しい。既成の表装には満足できず、表装も含めて一つの作品だとの思いから、自分で手掛ける。古い着物や帯、裂は書の世界を深く、広く、楽しくしてくれる。

(藤原ひさ子)



俳壇

.....

故郷。現在、俳誌「羚」代表。

金子 徹（青垣町）

望郷七句（この二十年の句の中より）

ブランコや故郷遠くなり近くなり

ふるさは夢で桜が吹雪いてる

母居ませば庭に梅をひろげる頃

降りるまでたった一人の青田バス

お在所の湯舟は木枯し泣きにくる

来しや遙か父系の銀河母系の山河

風花が舞つて帰郷の面はゆき

※

神田伊勢源、春高バレー氷上高校準優勝、スカ

イツリー展望回廊、と都内吟行を楽しんでいる。

坂上 勝朗（氷上町）

鯢鱈の吊されをりし軒古りぬ

寒の入り高校バレーの熱たぎる

豆撒いて審さに豆を拾ひけり

ちいぢ鬼豆の礫をよけきれず

六月をスカイツリーに迎へける

寿げや小さき命を青嵐

高野山

山なみの外八葉を初菫

旅籠やの庭掃く音を朝寝して

据石に腰おろしをり山桜

※

空襲で大阪の家を焼かれ疎開してきた丹波は、

中学二年から高校を出るまでの五年間の在住。「ふ

るさ」と呼ぶには、あまりにも短い。されど多

感な青春期は、今もわが俳句の原点、わが俳句の

六月始めに念願のマチュピチュへ行つて来ました。
痛い足を引きずりながらやつとのことだと思いがかな
い、一生の思い出が出来、いまはぬけがら状態です。

島津 和子（山南町）

舞い下りる母の化身か夏の蝶

夫の声まわりつきし水無の月

悠久の歴史ひもとく祭りかな

※

丹波の句を詠みました。

谷 女（氷上町）

明けて春残る小栢の豆の上

久々の里の目覚や露涼し

真新し添木の老樹蟬時雨

水分つ石生に佇む秋日傘

※

母と父の名を借りての句作二年目です。

美春子（柏原町）

動物を詠む

雪やみし鳩と戯れ異国でひとり

母ツバメベランダのぞき小暑見舞い

愛犬と快適探る昼寝場所

足裏をのばして警戒まん丸目
叢に慌てる蛇や懐かしき

※

春、卒業五十周年同窓会に丹波へ帰りました。
冬の箱根・金時山登山も句材のひとつです。

道（氷上町）

朝陽あび葉うらに萌えの色透かし

山の春薄若緑 色をかさねて

祝い舞袂にゆれる藤の花

青空の真中にうかがふ昼の月

車窓遠く一列に咲く桜かな

ふきのとう産地に迷う手元かな（放射能）

金時の手毬の石は苔むして

まといつく霧に頼まん富士みせて

ぬれ落ち葉茉莉の櫛を思い出す

岸辺うつ波音静か冬の湖

寒霧降り遊覧船に人気なし

九頭竜も白竜も女山神冬近し

詩座……………

オリンピック雑感

上 高子（氷上町）

うんざりする暑さの中、オリンピック競技観戦でひととき不快さを忘れる。

勝敗よりも興味深いことが、いっぱいある。

選手に有色人種が増えたなあ。

少数派の白人種が、数世紀、牛耳っていた世界で、反撃が始まっている。

卓球なんて国籍は違ってもほとんどが中国系の名前。

そりゃそうでしょう。地球上の人口の四人に一人は中国語を話すらしいから。

「二本」「待て！」などと日本語で言っているも、今や柔道はお家芸ではない。

技で力を抑える柔道、なんて言っていたのに、腕力の前にはお手上げ。

でも、私は日本人だから、力で負けても心は負けない、という負け惜しみがある。

精神論なんて通用しないこの世界と知りつつ。

日本人の若者はそれにしても、よく闘っているね。

これまでの貯金でここまで生き残ったのかなあ。

この夏、エアコンを我慢して我が家標準を我慢していたら、映画館で風邪を引いた。

自分基準の満足はグローバルスタンダードには通用しないのかも。

でも、私は日本人だから、チームの力で勝ち進む、競技が好き。

誰もがぼちぼちボロボロで、いつでも選手交代できるような、そんな集団がいい。



歌壇……………

里の家で一人暮らしを始めて十三年になります。歳をとり一人暮らしが不安になってきました。ようやく四人の子供達の住む関東へ引越す決心がつきました。

足立 美都子(柏原町)

人の名も植物の名も出て来ない記憶のノートの文字が消えゆく

独り居の夜のテレビに大笑いして後はつと耳を澄ませり

十余年守り来たりし里の家限界を知り去りゆかんとす

※

柏高短歌会の月例会で満票を頂き上京して来たのは、つい最近のような気がします。あれから五十八年の月日が経ちました。半世紀も過ぎれば、当時柏高の短歌は何人だったのか? メンバーの名前も残念ながら全然おぼえが無く忘れてしまいました。社会に出てからも、短歌は趣味で現在も続けております。満票を獲得した思い出の歌と、今

までに新聞に取り上げられた中からの五首を記します。

荻野 哲男(柏原町)

東京に職の決まりしこの頃はやや不安なる日々を過ごせり

少しでも役に立つかと三陸の秋刀魚求めて心やすらぐ

ただひとり家の後継ぐ兄は逝き今年も柿は紅く色づく

出征する兄を送りて母の目に涙見たのはきのうの如し

平成を四半期近く生きて来て良き事多し昭和を想う

割り引きに惹かれて走る高速で話題のダムや橋桁を見る

※

今年も上 高子さんに連れられて、岩手県の大槌町を訪れました。海はあくまで静かでした。

坂上 勝朗(氷上町)

地震一年ひとそれぞれに負ひしこと賢治ぬませば
如何に詠むらむ

沖の浪かくもやさしく打ち返す悲しきほどの瓢
簞の島（ヒヨッコリひょうたん島の蓬莱島）

招魂のたなばたに吹く柔き風児らの願ひを聞き
届けかし

※

主人が停年退職前、広島に四年半、仙台に一年
半単身赴任していました。六十歳で停年退職をし
て二年間就活をして仕事が見つかりましたが、体力
的にきつく三年半でやめてしまいました。今は無職
です。息子は今年で社会人七年目。元気で頑張っ
ています。結婚しないと思っていた長女が、厳密に
言うくと三十九歳になる直前に、結婚してもいいと
思う人に巡り合い、今、家探しや衣装合わせに大
忙しです。ここ十四、五年の我が家の点描です。

福田 治子（青垣町）

即席の麺と酒のみ買う男性に単身赴任の夫を思
う

入社式一週間後に控えたる息子買ひ来る「黒髪

戻し」

四十の大台に乗る直前に結婚決まりし我が娘か
な

※

折々を詠む

美春子（柏原町）

霧深し木々にたなびく湯の里は未だ傷跡残りに
けらし

ふるさとの枯れたる先のわが住処帯に短し襷に長
し

※

杳き風

原谷 洋美（山南町）

近江ならどこがおすすめと問はれぬつ湖北の余
呉の風が渡りぬ

賤ヶ岳に近江の海を見しをりはまだ仕合はせの
嵩など知らず

草原の風を起こしてパナマ帽かぶりしひと日は心
地よかりき

一夜さにぐんと伸びたる胡瓜あり夏の日差しと風
のたしかさ

“ありがとう”の源流は丹波にあり

—強固な意思を貫き続けて得たライター道—

フリーライター

浅野智哉さん

●インタビュアー

岡田昌子

井徳正吾

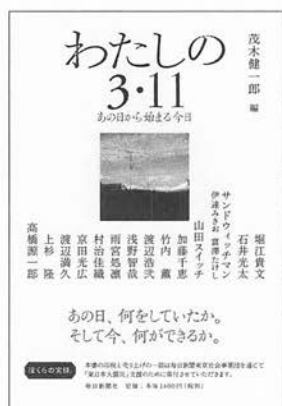


『プロファイル』1973年氷上町で生まれ柏原で育つ。柏原高校出身。上京後、企画制作会社勤務を経てフリー。『日経エンタテインメント!』『クイック・ジャパン』『サンデー毎日』『北海道新聞』ほかで書評・インタビューを手がける。構成・寄稿著にサンドウィッチマン『敗者復活』堀江貴文『君がオヤジになる前に』小日向文世『小日向文世 アメリカへ行く』井上雄彦『あ』『ドラえもんびあ』ほか。

—赤坂にあるエクセルホテル東急のティーラウンジにてお話を聞きしました。

◆サブカルチャーエイリアン少年からの脱出

—去年の同窓会の折にご著書の「T A J O M A R U」を何冊か頂いたと伺っています。小栗旬主演の映画「T A J O M A R U」をノベライズされたり、震災後すぐに「わたしの3・11」の出版本をプロデュースされ、作家17人でお書きになったり、今回は小宮一慶著「なぜ君は働くのか 松下幸之助 運命の言葉」（主婦の友社）という人生アドバイス本を構成されたり、6月下旬の段階では、『君は、こんなワクワクする世界を見ずに死ねるか!?』田村耕太郎著（マガジンハウス）



を取材・構成され、いま海外に出ることの意義と楽しさを説いたアツい内容を手がけられたとか。大活躍中ですね！どのように

して今に辿り着かれたのかお聞かせ下さい。

浅野 僕の柏原高校時代はバブル真っ只中で、高卒でも一流企業に入れた時代でした。でも高校の学力は伸び悩んでいる時期で、私学の関々同立が最高の進学先と言ってもいいような時代でした。学校は閉鎖的で教員間にも学閥や年功序列があったようで、先生たち自体が生き辛いようでした。仲良くしていた先生から苦勞話もよく聞かされていましたよ。

—先生のカウンセラー役が勤まるとは凄いですね！どのような子ども時代を過ごされたのでしょうか？

浅野 家庭の事情で小学校を3回転校して、いじめにあったり、ケンカの強い友だちからパシリをさせられたりしていました（笑）。中高時代は雑誌やサブ

カルチャー誌ばかり読んでいましたね。その影響で将来はライターの仕事をしたと考えていました。インターネットが流通する前で、今の時代との過渡期に居ました。音楽や劇とか、蓮見重彦の映画評論や吉本隆明の本とか、いろいろ読んでいました。山際淳司さんなんかも好きでしたね。

—難しい本を読んでおられたのですね！

浅野 谷書店で注文していました。丹波はいいところですが、自然しかなく、当時の私は文化に飢えていましたね。なにしろ柏原には映画館も図書館もなかったですから、文化の匂いを嗅げる唯一の方法が本や雑誌だったんです。だから僕が初めて劇場で映画を見たのは19歳の時でした。

—学校でのサークル活動は？

浅野 柏原中学と高校1年までは卓球部にいました。先輩にスーパースターがいて憧れて入ったのですが、同級生にも強い奴がいて、ラリーが2回しか続かない。申し訳なくて辞めました（笑）。高3は放送部にいて、8ミリでアクションやホラー映画を作ったりして、先生達からどやされていましたね。

—我々の頃と違って自分達で映画がつけれる時代な
んですね！今のお仕事と関係してくるのですか？

浅野 高3の時、「希望職種はライター」と先生に
伝えるのですが、幾ら説明してもライターという職業
を分かってもらえませんでした。勉強の出来も悪かつ
たので、文章で生計をたてたいと言っても説得力がな
い。「アンタは物書きにはなれない。絶対になれない！」
と、はつきり断言されていました。先生達にとつては
僕はエイリアンだったと思います（苦笑い）。いろい
ろと将来についてアドバイスされましたが、基本的
に先生達はプロデューサーとかフリーライターという職
業が、どう成立しているのか、よく知らないようだし



た。知らないなら知ら
ないで、放っておいて
ほしかったんですけ
ど（笑い）。

—「今に見てい
ろ！」的なハングリー
精神は動力源になりま
したか？

浅野 勉強が出来たら苦労することはなかったので
す。本当に最低の成績でした（笑い）。下から数番目
でしたよ。それでも「教師の常識や当たり前が正しく
て、僕の方が間違っているのか？ライターになれな
いと断言されても、道はあるんじゃないのか？」を証
明したくて、必死に書くことにこだわっていた部分は
あったと思います。成績が悪いと可能性が限りなくゼ
ロと判断される。「そうじゃないでしょう！」と僕は
言いたかった。

就職については相談する人はいないので、雑誌広告
を見たり、プロダクションに直接電話したり、何度も
一人で上京して就職活動しました。

—高校時代に一人で何度も東京へ行って就職活動で
すか？

浅野 親と喧嘩しながら行きましたね！第1ミツ
シヨンは高校を卒業することだけでしたから。卒業後、
念願の東京の雑誌編集プロダクションにアルバイトで
入りました。今でも忘れられませんが、92年3月27日
に新幹線で東京駅に降りた瞬間に「太陽ってこん
なに明るかったんだー！」と感動しましたね。

◆閉ざされた未来と一筋の光と

浅野 企画会社でアニメ作品などを企画制作し、5年程勤めてから退社。24歳でフリーライターになりました。何の当てもないのに…。仕事が入ってこない無職の状態が2年間続きました。日雇いのアルバイトとか、会社員時代のツテの仕事などで食い繋いでいました。米は丹波から送ってもらえたので米と塩だけで1週間とか、バナナ1本だけとか、そんな極貧生活でしたね(笑い)。「腹減ったゝ死にたいなあゝ」と挫けそうになったり(笑い)、先の見えない将来に不安はいっぱいでした。そのうち、情報誌「ぴあ」に書評を書く仕事にありつき、10年間続けました。その間に沢山の小説家やさまざまなジャンルの友だちができ、違った仕事も入るようになりました。今はフリーライターとしては恵まれていると思います。

◆我欲を捨て、社会貢献を考える

浅野 有名な俳優、作家、政治家さんたちにインタビューさせてもらう機会が多く、いろいろな勉強になりました。そんな体験が仕事の糧となっていますが、

同時に極貧時代からいつも「社会貢献したい、人の役に立つ人間になるんだ」と自分に言い聞かせてきました。特に、福知山脱線事故や阪神淡路、東日本大震災でそんなことを考えるようになりました。若い世代に残せるものは何だろうと考えます。我欲、こうしたいと思う自分勝手な欲は宜しくないと思えるようになりましたね。地位、名誉、お金、物欲ではなく、社会貢献ではないかと、柏原で無欲に遊んでいた頃に回帰するのですね。理想郷というか…。

—もう、そのような境地に立つておられるのですか？ 私たちと同じ世代に居る感じが……(笑い)。

浅野 小さい頃からモヤモヤしていたものに誰も応えてくれなかったのですが、友人の書家武田双雲さんがひとつの回答をくれたのです。「ありがとうを人に届ければ、同じ量のありがとうが返ってくる」という。これはきつと物理法則です。お仕着せの道徳ではない。これって丹波の素晴らしさの源流ではないかと思いついたんです。祖父母がいつもありがとうと言っていた。僕は「ありがとう」を実践していたら仕事が増えました。以前は「仕事を下さい」と言っていたの

に、今は「あなたのお役に立つことないですか?」と聞いている。他者に貢献することが、結局は自分を幸せにすることだと気づきました。

— 有名人とお付き合ひされて田舎出身コンプレックスはないですか?

浅野 疎外感を持つて上京したのであまり感じる事はなかったですね。今はどうでもよくなったし、相手にとってはどうでもいいことなんですよね。丹波は、本当言うと一生帰りたくなかった故郷です。でも、このような境地になったり、姉が丹波に居て、その子たちが可愛いので帰りたくなってしまう。年1回は親孝行に帰ったり、青垣で義妹が経営する古民家を改造した店「Gentlen」に行つてふわふわ玉子のオムライスを食べるのが楽しみです。

— 最後に今後のご抱負と丹波出身者にメッセージを!

浅野 今後はできれば妻とNY、シンガポール、パリのどこかと日本で半々の生活ができればいいなあと考えています。丹波の皆様へのメッセージは、皆さんの頑張りが私の励みにもなります。皆さんが居て下さ

るから自分も居るとお伝えしたい。また郷土出身者の交流の場があることが素晴らしいです。今度の同窓会には予定が入つていて参加できないのですが、なるべく参加させていただきたいと思っています。

— 郷友会が秋に開催されます。こちらへもどうぞご参加下さい。今日は長時間ありがとうございました。

インタビューひと言

岡田昌子 (臨床心理士・人間関係士)

お仕事柄、有名人との交友関係の広さに驚かされ、如何に中枢となつて頑張つておられるかが窺えました。温和な、年上を立てて下さるソフトな笑顔についての話が弾み、横道にそれ、浅野さんのお仕事の内容に迫れなかったのが残念です。

井徳正吾 (文教大学情報学部教授)

丹波という田舎をカッコよく脱出する最も簡単な方法は大学に進学することです。浅野さんのように高卒で東京に出てくる勇氣に驚きます。当然のように待ち構えるやがての極貧生活。それでもメげないのは、何もない丹波で育つた早熟少年の苦悩時代があつたおかげなのでしょう。礼儀正しさに感服しました。



柏原藩陣屋の屋根を葺く村上社寺工芸の葺師（同社提供）

独自の技術を引き継ぐ

小田 晋作

（丹波新聞社会長）

寺社を初め昔からの古い建物の屋根には、今なお檜皮葺が多く見られる。森の香をそのまま残した柔らかく落ち着いた姿が、観る者の心を洗う。独特の技術を誇る屋根葺施工業。それに欠かせない原料の檜の皮を採取する原皮師^{もしかわ}。建築物の近代化に伴って、共に全国でも貴重な存在となっているが、丹波にはその伝統が根強く引き継がれている。

◆25メートルも登る原皮師^{もしかわ}

原皮師の大野浩二さん（大野檜皮工業社長、山南町上滝）は47歳。父の豊さん（2010年死去）を継いで、高校を出てすぐこの道に入った。4月初め、大野さんに同行して、京都市のはずれ、京北町の山に入った。里からすぐの、間伐がゆき届いた明るい陽が差し込む檜林。皮をはがれて赤い肌をさらした木が所々に

丹波ブランド紹介

通りに切断。寸法に満たない幅のものは皮を少しずらして重ね合わせる。寸法は通常、縦75センチ、幅15センチで、本の部と先端部が同等の上級品から先端部の狭いものまで3段階に分けられ、残材はさらに細幅の軒付け皮に加工し、無駄が出ないようにする。施工先によっては特別の寸法に仕上げることも。

◆技術保存会で職人を養成

原皮師は全国に70人ほどいる中で、丹波市内には山南町上久下地区を中心に15人集中している。上滝には最近まで丹波檜皮生産組合があった。大野家には漆を施した木箱が残され、檜皮業者が作っていた戎講えびすの帳簿が納めてある。江戸時代、安政2年から昭和の初めまでそろつていて、和紙に「戎講當文帳」と書いた帳簿の綴りには、番号順に会員名が書かれ、「御神酒銭壺銭」、「米三合宛」、「酒壺升切」、「肴有合也」といった記述も。講の規約や備蓄金の名簿などもある。浩二さんの祖父（豊氏の父）、桃太郎氏が講の当番をした時に残された資料だそう。

このような伝統技術を引き継ぐ人は戦後の高度成長

期を経て減少しつつあったが、1979年に公益社団法人「全国社寺等屋根工事技術保存会」が京都市内に事務局を置いて発足して以来、歯止めがかかってきた。檜皮こけらのほか柿、かや葺も合わせ施工、採取の技術の保存を目的に、職人の研修教育をしたり、一般の人たちに理解を深めてもらえるよう広報活動をしている。同



大野家には江戸時代からの講の帳簿が残っている

法人の理事を長らく務めた浩二さんの父、豊氏は文化庁から檜皮採取選定保存技術保持者に認定された。浩二さんも保存会の研修指導員として、後進の育成に当たっている。

檜皮葺の屋根の耐久性は30〳

40年。優美さではすぐれていても、近年はコスト意識が強まり、国や府県の重要文化財以外では、長持ちする銅板に切り換えるところも増えてきた。上滝の地元の山口神社でさえ、10年前に本殿を葺き替える際、銅板の話が持ち上がり、「檜皮の里をアピールしなければ」と豊さんが強く主張して結局、檜皮にしたという。

◆出雲大社や伊勢神宮も

原皮師から材料を仕入れて屋根の檜皮葺を施工する業者が山南町に3社あり、隣の西脇市黒田庄町と合わせると6社。全国のかや葺以外の技術保存会加盟30社の中でもかなりの集中度だ。

村上社寺工芸社（山南町篠場）は原皮師も含め16人の従業員を抱え、年間売上げは檜皮と柿葺を合わせて約4億円。業界大手の一つで、村上英明社長（56）は技術保存会の副会長を務める。最近修復整備が完成した旧柏原藩陣屋の屋根を手がけたほか、来年5月に本殿遷座祭を迎える出雲大社の「観楼」（本殿右隣）を施工中。また伊勢神宮内宮の茶室や清水寺本堂など日本を代表する伝統建築物にも関わっている。

全国の国宝や国・県指定の重要文化財の屋根葺き替えは年間ざっと5〜6000平方メートル。「ここ20年ほどはほぼ変わらないので、仕事量としては安定しています。コストを一定に抑えたうえで施主さんから『良い仕事ぶりだ』と、少しでも満足していただけるよう腐心しています」。



施工に備えて檜皮材料の準備・調整（村上社寺工芸で）

専門職人「葺師」

によって行われる檜皮葺は、軒付皮をほどよい厚さに積み上げて手斧切テコンナり仕上げの後、水切銅板や上目皮を張り、平皮を竹釘で留めながら上方に葺き上げていく。唐破風、谷みのかう葺甲など複雑な曲線を持った部分は一段と入念な作業

になる。檜皮葺独特の工程は昔ながらの道具を使つての100%手仕事。村上さんは亡父から、「曲線の美しさを精魂込めて作り出す」ことの大切さを教わつたという。

◆全国で1社だけの竹釘製造

技術保存会の中でもう1社、異色の存在は竹釘製造の石塚商店(山南町梶)。全国でここだけしかなく、檜、柿葺業者からの注文を一手に引き受ける。同地区には良質の真竹の藪が多かつたため戦後間もなくの頃まで



大野浩二さん(右)と関東永上郷友会員の叔父、大野義昭さん

(山南町上滝の山口神社で)

は5軒あつたが、後継者難などから少しずつ減つて昭和41年以降は同社だけとなつた。

石塚直幸代表(38)は「祖父が非常に職人肌の人で、後を継げとは一言も言われなかつたが、気が付けばこの道に入つていた」と話す。

原皮師の大野浩二さんは「子供の頃に父の手伝いをした思い出は少なく、1、2度、山について行つたくらい。後を継ぐことには、『しんどい仕事だし、長期間家を空けんなんこともある』と、母が反対したんですが、高校3年になつて父から『これからは風向きが良うなるよ』と説得されて、この道に入つてしまいました」。

日本体育大卒の村上英明さんは、社寺工芸社に入るまで東京や丹波で養護学校の教諭をしていたが、「5人きょうだいで男は自分だけだったので、結局後を継ぐことになつた」。

檜皮の里の伝統が脈々と受け継がれているのは、やはり世界に類を見ない日本の技術が秘める吸引力のためなのだろう。

追悼座談会

恩師 植田憲雄先生を偲ぶ

◆座談会出席者（発言順、敬称略）

高見 秀史（柏原高校6回生）
河本 幸子（旧姓小谷、同 6回生）
上野 重喜（同 6回生）
岡 吉明（旧姓松下、同 13回生）
司会・池田 忍（同 6回生）



池田（司会）ノリさんと呼んで、高校卒業後も長年親しんできた植田憲雄先生が、昨年九月に亡くなられました。今日は、先生の在りし日を偲んで座談会を開かせていただきます。出席は、先生が教師に成りたての頃、学級担任になつてもらつた昭和二十六年入学（六回生）の一年一組のお二人のほか卒業後も縁の深かつた方で、存分に語り合つていただこうと思います。

高見 植田先生が柏原高校に奉職されて、初めての学級担任として受け持たれたのが昭和二十六年入学の一年一組でした。何しろ、あの旧制女学校の古びた

〈植田憲雄先生略歴〉昭和3年、幸世村沼生まれ。20年3月、旧制柏原中学校を卒業後、東京外事専門学校（現東京外語大学）に入学したが、戦災により授業が継続できず、同校を退学して天理語学専門学校イギリス語学科（現天理大学）に編入。23年3月、同校を卒業して旧制柏原中学・柏原高校に奉職、英語教師として各校を転任後、教頭・校長職に就き、昭和62年4月、母校・柏原高校校長に着任し、平成元年3月に同校を退職する。平成4年より同18年まで柏陵同窓会々長を務めるほか各種団体の活動に携わり、平成13年春の叙勲では勲四等瑞宝章を授与された。平成23年9月15日逝去、享年83歳。

校舎に、一クラス五五人の教室に六〇人が入り、学級担任が初めての植田先生も、生徒を掌握するのが大変だったろうと思います。その先生の目を盗んでヤンチャなことをやり、褒められたことよりも叱られたことのほうが多い連中揃いだったように思います。

河本 先生は私の兄と一年違いだったので、小谷君の妹、ということ、可愛がつてもらい、私も先生というよりも、お兄ちゃんという気持ちでした。先生はその当時から赤ら顔で初々しい元気が漲っているように思いました。あのボロボロの校舎で一組と二組が隣り合わせ



青年教師として颯爽と……（植田茂樹氏提供）

にあり、それを仕切る壁の腰板に穴を空けて、ヤンチャ者がその穴から行き来しておりましたね（笑い）。先生がよく言っておられました、学級担任が代わるたびに、あの一年一組の生徒がいるようなクラスに出会えたらと思ってきたが、ついに出会えなかった」と。

池田 どうして「一年一組」だったんですか？

河本 ヤンチャで明るく、活発な生徒が多かったからじゃないですか。

高見 たしかに羽目板を外して教室を抜け出すような、ほんとに羽目の外れた生徒がいましたね。あのクラスは、選択科目に「音楽」を選んだ組でしたが、河本さんのように音楽が好きな生徒もいれば、私のような音痴もいたりして、玉石混交で先生の側からすれば、まことにまともにくいクラスだったろうと思いますけどね。でも、クラスでは、内々、先生の事を、みんなで「あかのりさん」と呼んで兄貴のように慕っていましたね。

池田 そこが植田先生の愛すべきキャラクターでもあったわけですね。それと先生も戦後教育に取り組み始められた頃でもあり、我々も出来たての新制中学から高校に進学した民主主義教育の“申し子”的な解放

感もあつて、それがうまくドッキングしたような面もあったのでしょね。ところで、一年二組の上野さんは……。

上野 一年一組の隣り、羽目板を外して行き来したという相手の教室でした。私たちは新制中学出の二回生で新中出はレベルが低い、とよく言われていましたね。私は植田先生の授業の印象よりも、E S Sのクラブなどで先生との関係が深まったように思います。

あの頃、木の根橋の所にあつたチャーチ（教会）に英国の女性の牧師さんが二人来ていて、少しでもナマの英語に触れたいと通つておりました。そのバイブルクラスに、先生をはじめ英語に堪能な人たちが集まっていましたね。

岡 私は昭和三十三年入学の第十三回生ですが、植田先生には商業科一年十組の担任として出会いました。最初の朝礼の時、自分の名前を黒板に「植田憲雄」と書き、去年までの「芦田」という名前から変えたことを強く印象づけられ、その年あたりに結婚されたのかと思つておりましたが、お話によると、結婚はもつと早くにされていて姓が変わられたようですね。

上野 我々も芦田先生と呼んでいましたが、その当時に結婚されていたようですね。

岡 我々の頃には先生もだいたい経験を積まれていて貫禄十分に見えましたが、今話されたような活発な生徒は一人もおらず、おとなしい生徒ばかりでしたね。

池田 岡さんも、おとなしかった？

岡 私たちの学年は干支が関係するのかわかりませんが（午年と未年）停学や退学の話などは聞いた記憶がないほどおとなしい学年だったと思います（笑い）。私はブラスバンド、コーラスなど音楽が好きで、音楽班の活動ばかりに熱を上げていたものですから、植田先生に呼び出されて叱られたんです。それがきっかけで、これではいけないと、勉強にも力を入れるようになりました。

先生から何度も聞かされたお話に、一年先輩で、陸上競技で国体にも出場した里（さと）勝安さんのことがあります。「里はあれだけ猛烈な練習をしても、家に帰れば夜中まで勉強して他の科目もオール5だよ」などと朝礼やホームルームの度に、彼を引き合いに出して、我々を叱咤激励してくれたことが、ずっと頭に残つて

います。先生にとって、里さんは誇らしい存在だったんですね。

高見 ぼくらのクラスでは、とても勉強が良く出来る女生徒がいてね、植田先生の英語の時間でも、先生が答えに窮するような難しい質問をして、先生の赤い顔がなお赤くなるようなこともありましたが、ぼくらは、そんな質問



植田先生の元気な声が聞こえてきそう（植田茂樹氏提供）

についていけなくて、虎の巻を家でこっそり読んできて、ついでにこうとしたものです。

上野 たしかに一年一組は、スポーツも学科もできる錚々たる人たちがいましたね。

高見 一組の時に「学級新聞」をガリ版で出そうと

いうことになり、題名をどうするかで話し合ったことがあります。その当時、校長が後藤英太郎先生で、挨拶の時に「学園をして鬱蒼たる大森林たらしめよ」と言っていたことから「大森林」という題にしたのです。卒業してからも「大森林会」という同級会を開いて、その都度、先生にもお越しいただいていましたね。

池田 ところで、あの当時、英語の授業はリーダーとコンボジションというのがありましたね。植田先生はコンボを受け持っておられたようですが、授業について、高見さん、何か？

高見 ぼくはその学科については記憶がないんです。さっき言った女生徒と先生とのやり取りのときは、みんなは蚊帳の外だったという記憶以外はね（大笑い）。

池田 私は三年生の時、植田先生にコンボを教わりましたが、生徒が並ぶ椅子の間を英語を読みながら行き来され、その時のズボンの折り目がきちんとしていたのを覚えているくらい。それとリーダーに比べ発音が上手でなかったことも……。 （笑い）

高見 これは、卒業後の同級会で先生が話された

ことですが、ダレとダレが交際していたとか生徒間の細々したことをよく知っておられ、びつくりしましたね。毎回の同級会ごとに、新たな昔話を出してこられてましたね、それもつい何年か前も同じで、六十年近く昔のことを覚えておられることに先生のすごさを改めて知りましたね。

岡 先生をお招きして同期会をやる度に、そんなことまで知っていたのー、とこちらが驚いたほどでしたね。

上野 それだけ生徒に対する関心と愛情が深かったのですね。だから、先生のところに就職やら縁談の相談に行つた父母が多かつたようです。卒業後もずうつと教え子の消息は把握されていたようです。

高見 女生徒のある母親が「お宅のお嬢さんは男性に目を付けられやすいタイプですから気をつけるように」と先生から忠告を受けたという話を聞きましたが、そういうように生徒に細かく気を配っておられたようですね。

先生が三年四組を担当された時の話ですが、潰れかけの机をこわしてストロブにくべ、残りを教壇の引き

出しに入れていたのを先生が見付け、誰がやった！と言うことになり、白状させられたのが後の某参議院議員と某柏原校長だったんですね（大笑い）。

上野 植田先生は幸世村の出身で青年団でも活躍され、氷上郡の運動会の百メートルで優勝されましたよ。

河本 鳩胸^{はとむね}で体格は良かつたですね。紅い顔して、まさに「紅顔の美青年」という感じでした。

池田 ご子息の茂樹さんの追悼文でも「陸上競技が好きで体育会系だった」と書かれています。旧制教育の「文武両道」というか、ただ体力があつて強いだけ、というのではなくて、人間に優しい面をきちんと持つておられましたね。そこで、植田先生の教師像について何か。

上野 先生は「国際交流」に早くから関心を持つておられ、アメリカ・ワシントン州の高校と姉妹校になり、「交換学生」制度に取り組んでおられました。その一人がゲイリー・トーマスさんで、現在では日本で税理士・弁護士として活躍されています。

池田 植田先生は昭和六十二年四月に母校の柏原高校に復帰され、二年間校長を務めたあと平成元年三月

に定年退職され、四十二年間にわたる教職に終止符を打たれるわけですが、それからのエネルギーな活動は皆さんご存知のとおりであります。中でも、母校・柏陵同窓会会長としての役割、特に百周年を迎えた柏原高校の記念行事として企画された柏陵会館建設の寄付集めは大変な苦勞があったと思います。

高見 柏陵同窓会の会長になられてからは東京支部総会にも毎年お出でいただき、終わった後の二次会にもよく付き合っていたいただきましたよね。

池田 先生が平成十三年に叙勲を受けられた時も、高見さん馴染みの銀座のレストランでお祝いの会を開きましたよね。カラオケにも夜遅くまで付き合っていただき、息子さんのお家に帰られたことも……。ところで、同級会の「大森林会」と先生とは……。

高見 一年一組の同級会は、絶えることなく続けて、ご参加いただいていたね。実は三年前ですが、先生の傘寿を祝う会として平成二十一年十一月に開くことにして、ご案内状を差し上げたご返信が手元にあります。が、「あの一年一組の面々が夜を通して語り合えるなんて夢のようです……」と、楽しみにしていただ

いていたのが八月二十六日付のお便りでした。その直後のご発病にて、その会は思いがけない「先生のご回復を願う集い」になってしまいました。全六回生の同窓会「福祿会」の卒業五十周年記念の文集に、先生が「柏高六回生は吾が命」と記して頂いていたことにも涙して、ご無事をお祈りしたことでした。

上野 植田先生は、われわれの同窓会やクラス会には、必ず出席されました。その陰には静榮夫人、ご子息茂樹さんの大きな支えがありました。今年は、先生の初曾孫（ひまご）さんがご誕生とも聞いています。

とにかく植田先生は「情の人」でした。その教師生活は母校柏原高校に始まり、母校の校長で締めくくられました。その後も永く同窓会長として献身されました。そのご功績は不滅、見事なご生涯でした。

池田 今も愛くるしい目をして「おまえら、何を！」と言って出てこれそうですが、戦後の一時期、英語の新米先生と新制中学出のヤンチャ生徒が繰り広げたエピソードを語っていただき、先生への追悼と致します。有難うございました。

息子から見た「教師・植田憲雄」

植 田 茂 樹（柏原町）

わが父・植田憲雄は、二〇一一年九月十五日、八十三歳で永眠いたしました。二〇〇九年九月に致死性不整脈により自宅で倒れてからはほとんど意識が無く、病院で寝たきりの二年間でしたが、いろんな方々の支えにより安らかな最後を迎えることができました。生前は、いつも皆様から「植田先生」と親しく声をかけていただき、本人は教師を天職として幸せな人生を全うできたと、家族一同感謝しております。

私どもの感謝の気持ちと皆様の思い出を絡めながら、息子から見た「教師・植田憲雄」を振り返ってみたいと思います。

◆国際交流

父はもともと通訳志望でしたが、恩師の勧めで英語教師になりました。父は社交的というイメージがある

かもしれませんが、家では書齋にこもって最新の英語教授法を研究したり英語大学入試問題を分析したり、意外に勉強家でした。一方で受験偏重の英語教育に疑問を感じ、「英語教師は英語だけを教えているのではない。人間を育てる教育活動の一つとして英語を教えているのだ」という思いから、柏原高校の米国・豪州との交換留学生制度や国際交流に深く関わるようになりました。日頃から生徒には「心豊かな国際人になれ」、地域の皆様には「国際交流の楽しさを体験して欲しい」と言っておりました。その思いを強くさせたのが、ケント市からの二代目交換留学生ゲリー・トーマス君でした。彼との交流が父をさらに変えたように思います。

また父は、退職後の趣味として新聞の「英語バズル」を解き、毎週応募していました。正解者の中から抽選でクオカードが当たると、うれしそうに自慢していました。

◆陸上競技

父は陸上競技が好きでした。特に二十歳台から三十

歳代後半の頃は柏原高校陸上競技部の顧問に熱中しておりました。その頃の生徒は競技の才能がある方が多く、いろんな大会で活躍されるのが誇りで、合宿や遠征試合に付き添い熱心に指導していました。父は、この体育会系のつきあいがよほど気に入ったらしく、陸上競技部の生徒の皆様とは、卒業後も特別なお付き合いをしていたように思います。



息子・孫とともに（2008年、椿山荘にて）

◆進路指導

父は、生徒の進路指導には信じられないほどの熱意をこめて取り組んでいました。生徒一人ひとりの学力や夢、家庭事情まで頭にいれて最善の進学先・就職先をアドバイスしていました。しかし、自信を持ってある大学を薦めた生徒が受験に失敗した時などは、食事ものどを通らないほど落ち込んでいました。その後浪人された生徒の京都の下宿まで訪問して激励を続け、翌年志望大学に合格したと聞いた時は飛び上がって喜んでいました。

高校生の就職先は丹波よりも阪神間に多くありますから、夏休み等は「教え子ルート」をたどって各企業や個人のお店まで出向き、採用枠の確保をお願いしておりました。また丹波にUターンして教師になりたいと希望される方も多く、通信制の教職講座や教師の心構え等、親身になって指導していました。人に何か頼まれると困るというより頼られて嬉しいと感じるタイプなので、いろんな悩み事の相談にもものつていたように思います。

◆お酒との付き合い

皆様は、父が相当のお酒好きだと思っておられる方が多いと思いますが、若い頃の父はコップ一杯のビールも飲めないような下戸でした。お酒が人並みに飲めるようになったのは四十代後半に明石高校の教頭として赴任した頃からで、明石の皆様には連日連夜鍛えられたようです。その頃から父の体重は飛躍的に増えました。「人間は鍛えれば酒は飲めるようになるのだ」と自慢していました。が、本音はお酒ではなく、お酒を飲みながら皆様と語らう時間を楽しんでいたのだと思います。

◆パチンコという趣味

父は無趣味でしたが、あえていうならパチンコが好きでした。まだ柏原町内にパチンコ屋があった時代は、学校帰りに毎日のように立ち寄っており、私は母に言われて何度も呼びに行った記憶があります。周囲の目がうるさくなつてからは、大阪まで出て行って密かに楽しんでいました。八鹿高校に単身赴任していた時、数時間パチンコに夢中になり、終わって外に出て

みれば大雪で車が埋まってしまつて下宿に帰れなかつたエピソードもありました。

◆同窓会への熱意

父が関わった卒業生の数は何千名にもものぼると思うのですが、何年たつても生徒の皆様顔と名前を覚えていて、その記憶はどこからくるのか本当に不思議でした。同窓会の声がかかれば日本中どこでも参加していました。父は同窓会運営を自分の使命と感じており、創立百周年の柏陵同窓会館建設はかなり苦労したようですが、愚痴は一切言いませんでした。父の書斎には同窓会出席の資料が山のように残っており、その写真はすべて赤い顔をして宴会場で皆様と語らっている姿ばかりです。父が一番の笑顔になれる場所が同窓会で、「故郷や母校を愛する人間は最高の幸福者である」と常に申しておりました。

最後に、父植田憲雄にいただきました皆様のご厚情に対し、心より感謝とお礼の言葉といたします。

(昭和28年、柏原町生まれ／商社勤務／和光市在住)

山と温泉に魅せられて・V

山 本 喜 則 (市島町)

今回は日本百名山全山の登頂制覇に向けての最終局面をレポートします。昨年の五月に帰省した際、氷上町香良の独鈷の滝からのルートで五台山、中一日おいて兵庫の最高峰氷ノ山(一、五一〇m)に登って足慣らしをした後、六月に日本最北端の百名山である利尻山(一、七二二m)を制覇。高い山ではないものの、海岸線から垂直に頂上に至るルートなので、それなりにタフであったが、道内の他の山とは異なりヒグマがいないのが心理的に楽であった。前年に予定をしながら所要のため間にキャンセルした経緯もあるので、登り終えて何はともあれホッとする。

利尻・礼文ではレブンアツモリソウやその他の花を觀賞し、その後、ノサップ岬、宗谷岬、サロベツ原野から、南は大雪山の麓まで足を延ばし、道北の雄大な

自然と海の幸と温泉を満喫することが出来た。事前に予約していた飛行機、列車、フェリー、レンタカー等での移動も全て順調で、快適な一週間の旅であった。

#

七月には南アルプスの未踏の三つの山を一挙に登る予定で、既に山小屋も予約済であったが、直前の台風六号による崖崩れのため登山口へのアプローチが不可となり、やむなく断念。すぐには復旧の目途も立たない被害であった。八月になって、北アルプス南部の鷲羽岳(二、九二四m)と水晶岳(二、九八六m)を目指す。お盆の混雑を避けて一週前の月曜日の夜に家を出たが、松本IC・安房トンネルを経て、新穂高の駐車場に夜中の二時半に到着した時は、ほぼ満杯で辛うじてスペースを確保出来たのはラッキーだった。前回はこの駐車場に止められず、別の場所から三〇分以上余分に歩かされた苦い経験があるからである。車中で仮眠後、直ちに出発したが、途中までは以前に歩いたことのある道程なので迷いはない。とはいえ、山小屋に三泊する長い歩程だったので、この二山を無事に登頂出来た時の安堵感是非常に大きかった。

#

月末には南アルプスの三山を一挙に登るのは諦め、先に聖岳（三、〇一三m）を南信州遠山郷の奥にある便ヶ島の登山口より登頂した。

この登山口へのアプローチも遠くかつ悪路で大変だった。現在は土砂崩れのために通行止めになっており、年内の復旧の目途は立っていないようである。続いて残り二山を目指す、台風一二号による崖崩れで登山口へのアプローチが再度遮断された。ここは大井川の最上流にある樺島という所で、途中マイカー規制もあり、到着するまでにうんざりするほどの時間が掛かる。復旧後の九月中旬に、文字通り三度目の正直で、満を持して東岳（悪沢岳）（三、一四一m）と赤石岳（三、一二〇m）に登った。このルートは直登が出来ず幾つかのピークを経由してからの到達となるので、南アルプスの奥深さを実感させられた。これにて百名山制覇まで残り一つとなった。

#

記念すべき百番目は北アルプスの白馬岳（二、九三二m）で、残り二〇を切ったあたりから、なんと

なくこの山を最後に残しておこうと思うようになった。登山ルートは、最もポピュラーな大雪渓経由ではなく、新潟県の蓮華温泉からのルートを選んだ。こちらの方が歩程時間は長い、温泉マニアとしては非一度は入りたい有名な野天風呂（仙気の湯・薬師の湯）があつたからである。ここのロッジに前泊して翌日頂上を目指すのだが、当初予約を入れた際、登頂予定日の天気予報が雪なので、一週遅らせるようにとの指示を受けた。実際かなりの降雪があつたので、素直に従つてよかつた。前日、紅葉を楽しみながら野天風呂を満喫した後、翌日に向けて気分が高揚していたのか、不謹慎ながらいささか飲み過ぎたようで、当日の足取りがいつもよりスローだったが、このルートからの登山客は少なく、マイペースでの歩きを重ねた。頂上まで残り数キロの小蓮華山からは、かなりの積雪があつたが、幸い滑り止めのアイゼンを装着する必要はなかった。今年の五月の連休に猛吹雪のために六人が遭難死したのはこの辺である。

#

記念すべき登頂日は十月八日。達成感と満足感に包



まれた瞬間であつた。丁度居合わせた静岡からの五人パーティーに祝福され、記念写真の撮影にも協力してもらつた。彼らには後刻宿泊した白馬山荘にても祝福してもらい、持参していた日本酒まで頂いた。体育の日の連休と翌週には今季の営業が終わるので、千二百人収容の山荘は超満員であつた。何とか今シーズン中に全山をクリアーしたいと思つていたので、ギリギリ

のタイミングで達成出来たのは幸運だつた。

振り返れば、十年前に富士山に登ったのがきっかけで登山を始めたわけだが、よくぞここまで頑張れたと我ながら思う。ちなみに一〇〇山のうち、単独

で登山したのは六二山だつた。単独行は危険と言われるが、自分のペースで歩けるのが何よりの魅力で、そのため行き帰りの長距離運転も厭わない次第である。これまで軽症で済んだ転倒が一回と、ちよつとした道迷いが数回あつたが、いずれも大事に至らなかつたのは幸いだつた。お礼参りの積りで先日、富士山に日帰りで登つてきた。これからは、氣の向くまま、山と会話しながら、余裕のある安全な山行に努めたい。

#

温泉めぐりについては、未入湯の温泉の所在地が遠隔地に多いため、最近はなかなか数が増えないが、昨年の五月に沖縄の温泉を五カ所回り、これにて全都道府県をカバーし、現在一、二、三カ所となっている。一番多いのは長野県の一三五カ所で、次いで北海道が一〇三、群馬が八三、福島と栃木が七五である。ちなみに兵庫県は四二カ所である。

(平成24年8月8日・記)

(昭和19年、市島町中竹田新道貝生まれ／現在千葉市美浜区在住)

「平成三陸大津波」

被災地の現状



野村節三(山南町)

大津波に耐えた高田松原の「奇跡の一本松」

(高さ: 27.7m、樹齢約 200 年、建物は全壊したユースホステル)

さて、あの忌まわしい日から、早くも一年四ヶ月余りが経ちましたが、当地方では未だに大津波の爪痕が処々に残って、それらを見る度

にもたらししました。そして、その惨状と大津波後の数ヶ月の様子について、昨年の本誌に寄稿しましたところ、意外にも多くの会員読者に多大な反響を呼んだと聞き及んでいます。今回はその後の状況について述べることにします。



昨年三月一日午後二時四六分、突如、起きた巨大地震の約三〇分後に襲ってきた大津波は正に「悪夢」としか言いようがない未曾有の大災害をここ三陸沿岸



平成三陸大津波の時刻を差して止まったままの時計
(H23.3.11. 3:25pm、大船渡駅前茶茶丸パーク)



瓦礫が片付いた越喜来浦浜地区

- 1: 三陸公民館、2: 県道崎浜線、3: 仮設店舗、4: 越喜来小学校、
5: ポプラと大櫓、6: 越喜来湾、7: 筆者宅付近

に当時の惨状が思い起こされます。大津波で不幸にして住む家や商店などを流されたり、身内が亡くなられた被災者の多くは仮設住宅での不自由な生活を余儀なくされ、他所へ移住した家族もいます。また、約一年後に遺体が遠く石巻沖まで流されて見付かったと言う悲報もありました。

一方、被災地からは膨大な瓦礫が出ました。岩手・宮城・福島県で二、〇三四万tもあり、大船渡市では七五万六、〇〇〇t（常時の七〇年分）で、その七九％が回収（七月）され、その内四〇％は処理が完了しましたが、湾内にはまだ多量の瓦礫が沈んでいると予想されます。三陸町越喜来地区では全・半壊した建物は解体され、グラウンドに膨大な瓦礫の山を一つ残して大方片付けられました。そして、その跡地には大櫓とポプラが心成しか寂しげに立っているだけの荒涼とした更地が広がり、重機とダンプカーが忙しく動いています。しかし、一瞬にして五七人の命が消えた養護施設「さんりくの園」と、それと対照的に児童・教職員全員が無事だった「越喜来小学校」の校舎と体育館なども未だに当時の惨状のまま残っています。残っ



3階まで津波に襲われた越喜来小学校（児童と教職員全員無事避難、北里大男子学生2名が右方の体育館屋根に流されるも無事）



2階天井まできた津波で内部全壊の三陸公民館（玄関前で北里大女子学生1名津波に流され行方不明）

た建物の内二階天井まで冠水した「三陸公民館」だけは内部を大改修して再活用されることになっていきます。また、海岸防風林の松も数本を残して根こそぎ流され、地盤沈下で海岸線も数百メートルも陸地へ入り込み、さらに、海岸防潮堤や漁港施設の多くが全壊・沈下して、満潮時には岸壁が海水で溢れるなど、以前のような景観は見える影もありません。

こうした中で、様々な復興計画が立案されていますが、余りにも甚大な被害で公的な復旧・復興はなかなか



壊滅した越喜来浦浜海岸の防潮堤と防風林



地盤沈下で数百 m 陸地へ入り込んだ浦浜海岸

1: 筆者宅付近、2: 応急処置の土手、3: 土手で出来た海水池
4: 防潮堤の残骸 (元の渚はその 4、5m 下)、5: 全壊防潮堤下に残った乗用車

か思うように進んでいないのが現状です。

それでも、住民は苦難にめげずに立ち上っています。津波被災者の悲痛な思いが込められた詩集や写真集・津波体験文集の発行、大船渡市内の被災地では、仮設店舗や瓦礫・廃材を利用した津波資料館と子供の遊び場の設置、被災地を緑地化して羊を飼育する NPO 法人の活動ほか、環境保全のための植樹祭や復興に向かっての各種のコンサートやイベントの開催などがその現われです。また、大船渡屋台村やユニークなビニールハウスの復興居酒屋もできて結構繁盛しています。

一方、全国の様々な復興支援団体による活躍は被災地にとって大きな力と励みになっています。そこで、当地の復興計画としては、先ず、冠水した県道の高上げ (数 m) と新防潮堤の建設 (高さ二・五 m、底辺幅五〇 m) ですが、いつ着工されるかは未定です。また、そのために必要な大量の土砂は近くの山を削って流用し、その跡の高台に「新・越喜来小学校」が建設されることになっています。それと並行して住宅の高台移転や公営住宅の建設が企画されていますが、独自に土地を確保して新住宅を建てた被災者もいます。



越喜来杉下の仮設住宅
(わが家前の元・グランド、84世帯入居)



越喜来浦浜地区の仮設店舗の一部

また、交通機関の復旧が待たれていますが、大きな被害を受けた三陸鉄道南リアス線の線路も三年後を目途に工事が始まったばかりです。

ところで今、大船渡市の復興・復旧計画の中で、最も重要な課題となっているのが全壊した大船渡湾口防波堤の復旧工事です。湾口防波堤は湾内へ侵入する高潮や津波による被害を減衰させるための構築物ですが、その反面、閉鎖的な湾となり、その結果、湾内の水質悪化の原因になるという重大な欠点があります。それゆえに、地元の力キ、ホタテ、ホヤ、ワカメなどの養殖漁業者がその再建に強く反対してきました。

そこで、国交省釜石港湾事務所では湾口防波堤の両端を開放し、底層の基部に通水口を設けて海水交換を促すと言う新たな設計を提案したところ、地元漁協では長期的な潮流・水質調査を行うことを条件に、やむなくこの計画に同意しました。しかし、この設計案では湾内や沿岸の諸施設を被害から守ると言う利点はあっても、湾内の水質悪化は避けられず、一方、防波堤自体の強度が弱くなり再度の大津波による破壊が危惧されます。周知のように、殆どの構築物は想像を絶

する大自然の猛威には到底耐え得ないことを今回の巨大津波が如実に示したからです。

さて、ここで、当地での最近の話題を紹介します。先ず、七万本もあった高田松原に只一本生き残つて一躍有名になった「奇跡の一本松」（樹齢約二〇〇年、高さ二七・七m）を「復興のシンボル」として、内外でその保護運動が展開されています。一本松の再生と被災地復興への願いを込めて、イラストレーター・なかだ・えりさん著の絵本「奇跡の一本松・大津波をのりこえて」の発刊、作詞・喜多條忠、作曲・船村徹、歌・千昌夫の新曲「いつぼんの松」の発売、クリスマス・イブのライトアップ、それに大震災復興事業記念としての一本松の金貨・銀貨の発行（財務省）のほか、高田松原絵画展や被災松で作ったオカリナ演奏会など多彩な行事が展開されました。ところが、この一本松は塩害で昨年一二月にその生育が断念されました。しかし、多くの市民が是非その姿を残してほしいと切望して、その保存方策が練られています。また、この松の枝の穂を接木してできたクローン苗「タエル」（やなせ・たかしさん命名）がかなり成長しその活用が期待

されています。最近、高田松原の国道沿いの荒地に松の実生が発見され、壊滅した松原の松のDNAを継承した「ど根性松」と話題になっています。さらに、京都伝統工芸大学の学生達によって被災松で「大日如来坐像」の複製が制作され、京都の清水寺に鎮座することになりました。また、同市の震災復興計画の中で、「国営防災メモリアル公園」を高田松原地域に誘致する署名運動が展開されて、その実現に大きな期待が寄せられています。

一方、あの大津波によって国内外へ流れ着いた様々な漂着物がありました。今年一月、兵庫県香美町の沖合い（日本海側）で漁船が発見され、それが三陸沿岸の大槌町から津軽海峡を経て約一、五〇〇km漂流し、その持ち主は大津波で犠牲になったことが判りました。また、三月にはアメリカ・アラスカ州の海岸へ陸前高田市立気仙中学校のバスケット・ボールが漂着し、現地の市長によって届けられました。次いで、五月に宮城県から約六、五〇〇km離れたカナダの島へ高級バイクのハーレー・ダビッドソンが流れ着いたり（持ち主判明）、六月には何と青森県三沢漁港の巨大な浮桟

橋（全長約二〇m、幅約六m、高さ約二m）が一年三ヶ月間、約八、〇〇〇kmも漂流して、アメリカ・オレゴン州の海岸に打ち上げられたというニュースが話題になりました。

最後に、不思議な因縁の「津波石」について述べます。三陸町吉浜在住の杧木澤^{はのきざわ}正雄さん（八三）は普段は午後二時頃に先輩と同級生の三人で家近くの海岸を散歩するのが日課でした。ところが、あの三月一日だけは午前一〇時頃に出かけると、いつもの二人と防潮堤付近でばったり出会ったのです。そこで誰となく「津波石」の話になりました。

「この辺に『津波石』と彫った大石があったけなア」「そう、あったよね」「あの石の上でよく遊んだもんだ。あの石は道路工事で埋められて半世紀になるが、皆の記憶から消えて、もう知ってるのは俺達くらいだ。今あの石があれば、きっと町の文化財になっているべなア」「なあに、その内に大津波が来て道路も流されてしまえば、また見る時もあんべア」と冗談を言いながら帰ったのです。何とその四時間後、現実に大津波が襲来したのです。そして、二週間後に瓦礫の中に現

れたその石を見つけた杧木澤さんから数人がスコップで掘ること二時間、やつと四分の一ほど掘ると、確かに「津波記念石」と刻まれた文字が読み取れたのです。

その後、重機で掘り起こされた大石（花崗岩、縦三・七m、横三・一m、高さ二・一m）には、当時の村民が後世への記念にと刻んだ「前方約二百米突吉浜川河口ニアリタル石ナルカ昭和八年三月三日ノ津波ニ際シ打ち上ゲラレタルモノナリ、重量八千貫」という碑文も認められました。全く偶然の話とはいえ、「昭和三陸大津波記念石」を道路工事で埋めてしまった愚かさを戒めるかのように、「平成三陸大津波」がその石を再び地上に出したのです。しかも、それを予告したかのような不思議な体験をした杧木澤さん達は先人が残したこの貴重な「津波石」を次世代へ引き継ぐことが自分達の役目と考えています。（気仙新聞、第二一号より抜粋、一部改訂）

古来、三陸沿岸は津波の常襲地で、地層調査では遠く先史時代に五回も大津波が襲来したことが証明され、平安時代から近代までに実に二四回もの津波襲来が記録されています。中でも平安時代



大津波で再び現れた三陸町吉浜「津波記念石」(気仙新聞, No.11)
(吉浜海岸、花崗岩: 3.7 x 3.1 x 2.1m、碑文を指差す柊木澤正雄さん)

の貞観^{じょうがん}一一(八六九)年と安土桃山時代の慶長一六
(一六二二)年の大津波、明治二九(一八九六)年と
昭和八(一九三三)年の大津波は甚大な被害をもたら

し、今回の大津波は約一、一四〇年前の貞観大津波の規模に匹敵すると言われています。「天災は忘れた頃にやってくる」は物理学者・寺田寅彦の名言とされていますが、いつ起こるか判らない大地震・大津波に対しては、十分な防災対策もさることながら、人々の災害に対する意識が最も肝要であることを今回の大津波で如実に示されたのです。それは大地震発生時から大津波襲来直前までの約三〇分間の人々の判断と行動が大きく生死を分けることになったからです。

また、近い将来、再度の三陸沖地震のほか、首都直下型地震や東海・南海地震が高い確率で起こる可能性も予測されていますので、今回の大震災を教訓にして、不断の備えを怠ってはならないと痛感した次第です。そして、いつの日か三陸沿岸がかつてのような素晴らしい景観を取り戻し、自然の恩恵を受けてきた諸産業が復活することを切に念じて、「平成三陸大津波」被災地からの現状報告を終わります。

注(1) 実際は寺田のよく似た文章を中谷宇吉郎が要約した言葉。

(昭和9年、山南町岡本生まれ／北里大学名誉教授・理博
／岩手県大船渡市三陸町在住)

東日本大震災に思うこと

足立 東一郎（青垣町）



東日本大地震以後、一年以上経つのに行方分からない人が三千人以上いること、被災地の復旧、復興が遅々として進んでいないとのことに、これが先進国といわれ経済大国を誇ってきた日本の現実かと愕然とする。あらためて被災された皆さんの将来への夢と希望に対する気持ちが萎えないで欲しい。

巨大地震が起きた日、私は前日から茨城県北部へ出掛けていた。翌日、自宅へ帰り着くまで地震による大渋滞の中、一晩中、車を走らせ車中で夜を過ごすことになった。

帰宅後、テレビでようやく今回の事態の深刻さに驚いた。被災地の目を覆いたくなる惨状には言葉では表すことが出来ない。過酷な運命に遭いながらも懸命に

頑張っている被災者には本当に頭が下がるばかりだ。

今回の巨大地震による福島第一原発の事故からは「原発」にかかわる多くのことを学んだ。

・地震列島日本がいつの間にか「原発大国」になっていったこと

・原発を積極的に推進する「原子カムラ」という利権構造があること

・家庭の電気料金が独占企業である電力会社の意のままに決められていること

・人類はいまだ原子力をコントロールできないこと
等々、いかに自分が原発について不勉強であつたかがよく分かった。

そして、事故発生から一年以上たつてもいぜん深刻な事態に変わりはない。放射能で事故現場に入れないため内部の正確な状況が把握出来なためだそう。さらに、十万人以上の周辺住民が住み慣れた生まれ故郷を離れ、避難を余儀なくされている。この状態が今後何年続くかもはつきりしていない。永久に帰れないかもしれない。それほど原発事故とは不条理なものだ。自分達は関係ないなどと傍観しているわけにはいかない。

私の市は福島原発から二〇〇キロ圏内のはずだ。事故発生後、風雨に乗って放射能が飛散してきているようだ。場所によっては福島県内より数値の高い所もある。市は、法に基づき市内の除染作業にかかるのとことだ。これは市民の健康への影響があるということの意味する。原発立地の地元の範囲を見直すべきだと強く思う。

「原発再稼働」に全国で反対の声が高まっている。「電力不足」という電力会社の情報に「ウソ」はないのか。本当のところを知りたい。

一方で、いまこそ便利さにひかれ電気を使いほうだいにしている生活様式そのものを見直すべき絶好の機会だと考えている。

そして、原発に替わるエネルギーがあるにもかかわらず、今回の悲惨な事故を教訓としないまま、原発に頼り続けることにどんな意味があるのか。原発がなくとも幸せに暮らしている国もある。早々と原発を無くす決めた国もある。

我が国は、皮肉なことに、原子力を軍事利用した「原発」によつて被害を受け、原子力を平和利用とする「原

発」によつて被害を受けてしまった。二度にわたつて被爆を経験した唯一の国だ。国際社会は、日本の行動を強い関心をもつて見ていると思う。

廃炉と決まった福島原発の四基は、いずれ大量の放射性廃棄物として処分されることになる。だが、残念なことに放射性廃棄物については、処分の方法すら決まっていない。ただ、処分には気の遠くなるような年月と費用が掛ることだけは分かっている。

大事なことは、その生産性のない作業が私たちの次の世代の肩に懸かることになることだ。原発は稼働しているかぎり放射性廃棄物を生み出し続ける。将来の日本を支えていく子供たちに負担を強いることになるのが、とても残念でたまらない。

我が家では、昨年の事故以降、アンペアを下げ、電気器具の電源をこまめに抜くことにした。夏場は緑のカーテンと遮光布を活用し、玄関にも網戸をつけた。極力電気の使用を減らすよう努力をしている。しかし、無理はしないつもりだ。

(昭和16年、青垣町小倉生まれ／元東京都職員／千葉県白井市在住)

被災地を再訪して

上 高子（氷上町）

「来年も必ず来ます！」と、感極まって当てもない約束をしてしまった。思いつくとすぐ口にして、それを後追いで実行するのにしんどい思いをするのは、私のいつもの悪い癖。去年の六月、「アジアの新しい風（アジア風）」という、私が事務局長を務めるNPOは、岩手県大槌町へボランティア活動に向かった（その詳細は昨年の本誌に寄稿したので、ここでは省く）。避難所の小学校校庭で年老いた被災者たちを前に、中国とベトナムの留学生たちが折鶴の贈呈や、日本語で感想を述べるなどのパフォーマンスをして、打ちひしがれた人たちに一瞬活力がよみがえった、と感じられたときだった。「復興支援を続けます！」と。

NHKの調査では、被災地ボランティアの経験者のうち七割は、再訪したいと思うが、実際は二割のしか実行しない、という。感動は長続きしないというか、

人は決意してもつい日常に紛れてしまう、というか。

私は、いったんコミットしたことを守りたいと、諦めないで環境を整えることに腐心した。結構しつこいところがあるのは自覚している。被災地ボランティアが、アジアの事業の一環であることをきちんと定着させること。それには、日本語学習者であるアジア風の留学生が、日本事情、日本理解の一環として被災地訪問をするのだ、ということをもみんなに認知してもらうことが必要だった。そして、それは成功したと思う。留学生の交通費や宿泊の費用を補うため、寄付を募集すると予算を超える募金があったのだ。

日本語を専攻している彼らにとつては、日本が力強く復興することが将来のキャリアに大きく関わってくる（実際、交流する中国の清華大学日本語学科では、他学部への転部の希望者が例年になく増えているそうだ）。だが、被災地ボランティアにかかわった留学生たちは、日本人の真面目さ、コミュニケーションのきずなの強さ、秩序正しく清潔に生きている被災者たちを目の当たりにしたし、大勢のボランティアがそれを支えているという事実も目にして、言う。「すばらしい戦後

の復興を果たした日本だから、必ずまたよみがえります」。データが表わす日本の将来像がどんなに悲観的でも、身の回りの日本社会、日本人によって自分が受ける個人的な感情が優先するのだ。

今年四月二日～三日、留学生七名（中国五名、ベトナム二名）と日本人会員二三名は、再度大槌町を目指した。合計三〇名は昨年の総人数と偶然に同じ。



チャーターバスで帰路へ向かう我々を見送る大槌町の被災者たち（写真提供：藤原ひさ子さん）

再訪者は半数に上ったから一般の日本人より再訪率は高い。若い留学生たちと、熟年の会員たちが被災地で行えることは何か、考えた末「傾聴ボランティア」と、「カラオケのど自慢大会」に決めた。人の話を聴くという単純なようで難しいことの講習を受けることになり、言葉の裏に含まれた「相手の気持ち」を受け止める訓練をした。これは今回の被災者対象にとどまらず、アジア風が対象にする異文化コミュニケーションにおいても必要なことだ。ある男性は、「この講習会を受けて、なぜ女房がいつも不機嫌なのか気づいた」と感想をよこしてきた。特に熟年男性は「あうんの呼吸」などにばかり頼らないで、ぜひ自分の気持ちを表現し、相手の気持ちも汲み取る訓練をしてほしいと思う。

一日目、花巻市の仮設住宅に避難している一〇名ほどの被災者と一対三で被災状況の話を聴いた。ここでの傾聴の結果、その後の生き方に影響受けた会員は、「あれほどの悲惨な経験をしながら、前向きに生きようとする姿に感銘を受けた」とか、「自分はこれでいいのか、何かしなくてはならない」と思った人が多かった。被災体験を語った人と、その後個人的に交流を続

けることになった人もいれば、子供たちの教育を支援するボランティア活動に加わった人もいる。留学生たちはこの貴重な体験を母国の人々にきつと語り伝えてくれるだろう。

二日目は去年の小学校講堂で、カラオケのど自慢大会をした。東北の人は恥ずかしがりかと思っていたが、とんでもない。人数に制限があつたので、あちらの事務局へ人選をお願いしたが、「ぜひ出たい」という人「あの人を出させてくれ」などと要望が多く、また歌のレベルは高かった。楽しみがカラオケに集中しているのかもしれないと思つた次第。(ついでにそつとお知らせします。郷友会の坂上会長は、アジ風会員を代表して「星影のワルツ」を熱唱。そのレベルはなかなかのものでした)。

今回は、「また来ます」と約束しなかつた。今後のアジ風の復興支援の方法は、もつと違つた形がいいのでは、と思ひ始めたから。組織同士のつながりより、被災者と会員個人とのつながりが今後はもつと必要になると思う。これはアジ風のメール交流が会員と日本語学習者の一対一のお付き合いであることと似てい

る。ひとつひとつの力は弱くても、草の根の活動こそが物事を動かす力になると信じている。



今、私たちの周りには考えなければならぬことがいっぱいある。原発、地球環境、経済、教育、それぞれ立場によつて視点が違い、あるいは事情を抱え、これが正解というものはない。しかし、被災地訪問という事業を通して再確認したことは、人間は一見、自利(エゴ)をエネルギーとして生きているようではあるが、結構、利他の心を持っているということだ。自分の利益だけを優先していたら、結局はしつぱ返しを受けるということ(世界中で利益体制ヘノの声が上がっている)が身を以て、わかつてきた気がする。

幸と不幸を分けるのは、あるいは、運不運は、かなりの部分偶然が作用していて、今、被災者でなくてもいつ不幸に遭遇するかもしれない。その時、お金や力だけを頼りにはできない、ということを実感した。何回も心によぎつた言葉は、「情けは人のためならず」だった。

(昭和19年、氷上町成松生まれ／認定NPO法人アジアの新しい風・事務局長)

東日本大震災から一年

坂上 登（氷上町）



二〇一一年三月一日
一四時四六分、外出
先から我が家の玄関に
女房と共に入ってドア
を閉めるとほぼ同時
に、グラグラッと来て、
間髪入れず経験したこ
とのない長い時間（数
分？）の激しい揺れに、二人ともその場に立ちすくみ
台所の方で食器類が壊れる音を聞いていた。揺れの落
ち着いた後の周囲の点検で、自宅の内部では、食器類、
ガラス類が二〇点程破損、外部では、建物の基礎と外
壁に数箇所僅かなひび割れがあった程度で、先ずは安
堵した。我が家の被害がこの程度で済んだのは、数年
前から近いうちに、一九七八年の宮城県沖地震クラス

強の地震が発生する確率が高まっているとの予測がされていたので、その頃から家具類を固定する防災器具類を取り付けていた効果があったと思っている。

私は仙台に来て今年で学生時代を含めて五三年になる。その仙台での暮らしは、一九五九年四月に東北大学工学部鉱山工学科（現在、材料環境学コース）三年生に編入学して学生寮生活から始まった。翌年の一九六〇年五月二三日早朝に地球の反対側の南米チリ沖で発生した巨大地震（M9.5）による津波が、二三時間を掛けて太平洋を伝搬して翌二四日未明、日本列島の沿岸に襲来した。波の高さは東北日本で大きく、三陸沿岸で五〜六mであった。

この大津波災害のニュースに接し、地震動を全く体感しない遠方での巨大地震と大津波災害の驚異について友人たちと話し合ったことを今でも思い出す。この一九六〇年チリ地震津波と名付けられた地震津波災害からこの度の二〇一一年東日本大震災までの半世紀余の間に、直接間接に私が仙台で遭遇したM7以上の地震記録を参考に、東日本大震災から一年に想うことを記してみようと思う。

1960年以降東北のM7以上の震災年表

(岡田義光「日本の地震地図」東日本大震災後版 東京書籍2012年)

- 1960年 チリ地震津波1960年5月23日04時11分。震源の深さ0km、M9.5。
日本国内（死者122人、行方不明20人、負傷者874人）
南米チリ沖で発生した世界最大級海溝型の地震により発生した津波が翌5月24日02時20分頃、太平洋を横断して三陸沿岸に5～6mの波高で襲来。
- 1964年 新潟地震1964年6月16日13時01分。深さ34km、M7.5 新潟、仙台、震度5
死者26人、負傷者447人
新潟県北部沖合日本海東縁部プレート境界付近逆断層型地震、津波は震源地に近い日本海沿岸で最大2m程度。
- 1968年 十勝沖地震1968年5月16日9時49分、深さ0km、M7.9、大震度5（仙台3～4）
死者52人、負傷者330人。
震源域は青森県の東方沖の海溝型地震、三陸沿岸で津波3～5m。
- 1978年 宮城県沖地震1978年6月12日17時14分、深さ40km、M7.4、仙台、最大震度5
死者28人（内14人がブロック塀、門柱倒壊による犠牲）、負傷者1325人
牡鹿半島東方沖太平洋プレート沈み込みの海溝型地震、震源がやや深かったため、津波はあまり大きくなく、仙台新港の49cmが最大波高であった。
- 1983年 日本海中部地震1983年5月26日11時59分、深さ14km、M7.7、最大震度5（仙台4）。
死者104人（内100人は津波の犠牲者）、負傷者163人。
男鹿半島沖の日本海東縁部プレート境界付近逆断層浅発地震。この地震による津波が朝鮮半島・シベリヤを含む日本海沿岸各地に襲来し、震源が陸地に近かったため、秋田県沿岸で最高16mの波高が記録されている。
- 2005年 宮城県沖の地震2005年8月16日11時46分、深さ42km、M7.2、最大震度6弱。
負傷者100人
1978年の宮城県沖地震の震源域東北部で発生した海溝型地震。津波は石巻の鮎川で10cm。
- 2007年 新潟県中越沖地震2008年7月16日10時13分、深さ17km、M7.2
長岡、柏崎、最大震度6強、死者15人、負傷者2646人。
2004年の中越地震（M6.8）の震源の北西40kmの日本海沿岸で発生、津波は柏崎で1m。
- 2008年 岩手・宮城内陸地震2008年6月14日08時43分、深さ8km、M7.2最大震度6強。
死者17人、行方不明6人、負傷者426人。
岩手県南部の浅部で発生した逆断層型の内陸地震。建物の倒壊等の被害は少く栗駒山周辺などで山体崩壊、土砂崩れ河道の閉鎖などの土砂災害が目立った。
- 2011年 東日本大震災2011年3月11日14時46分、深さ24km、M9.0、最大震度7。
（H23.11.11現在）死者15836人、行方不明3650人、負傷者5448人
津波の最大波高、青森県八戸6.2m、岩手県大船渡11.8m、釜石9.3m、久慈港8.6m、宮城県石巻鮎川7.7m、仙台港7.2m、福島県相馬8.9m、茨城県大洗4.2mと報告されている。また、津波の遡上高は宮古市姉好で40.5mが計測されている。これは1896年明治の三陸大津波地震（M8.3）の記録、大船渡市三陸町綾里における38.2mを超えた最大の津波遡上記録となった。一方、仙台平野では陸地の奥深く数kmにまで津波が侵入した。この地震は、日本での観測史最大で、最近100年間に世界で起きた地震を見ても、1960年チリ地震（M9.5）、1964年アラスカ地震（M9.2）、2004年スマトラ島沖地震（M9.1）に次ぐ4番目の大きさであった。

チリ地震津波で特に被害の大きかったのは宮城県志津川町（現南三陸町）で、津波は内陸約1kmまで達し、死者三四人、不明三人、負傷者五六〇人、家屋全壊九八六、半壊三六四、流失一八六、床上浸水一七五六などとなっている。

娘婿の出身地が南三陸町で、一九三三年の三陸沖地震津波を経験していた婿の祖母が海岸から数百mの街中の平屋建ての自宅に独りで住んでいて、チリ地震津波が来たとき天井下の神棚に上がって水が引くまで避難した話を祖母本人から聞き、この街中で二m位の津波の水位があつたことを知った。この家屋はチリ地震津波では流失を免れ、祖母が八年前に亡くなつてから空き家になつていたが、この度の3・11東日本大震災では、南三陸町の港に近い街中にあつた殆どの建物と共に流失し、今はその基礎を残すのみとなっている。

チリ地震津波を機に遠地地震に対する津波警報システムが確立されるようになった。また、当時の高度成長の経済情勢の恩恵もあり、三陸海岸全般の各港湾の入口に波高6mの津波に耐えるように津波防潮堤の整備が行われた。これらの堅牢な津波対策の施設は、そ

の後のM7〜8規模の十勝沖地震、宮城県沖地震等の海溝型地震による津波には耐えられたが、今回の3・11大震災の一〇m超巨大津波によつて破壊されてしまった。

私は一九六六年から二〇〇一年まで市内太白区緑が丘に住み、その後、同区の名取川中流域の柳生やなぎうに転居し現在に至っている。仙台市は六〇年代から旧市内の郊外丘陵地への宅地化が進み、緑が丘地区はその初期の頃に開発された住宅地だった。七八年の宮城県沖地震では、我が家はその後二三年間住み続けられる程度の被害で済んでいた。しかし、我が家から数百m離れた同地区では地盤崩壊で家屋の損壊が多数起きた。これは、現宅地造成法施行前の造成法等が原因と言われる。3・11大震災の地震動による宅地の崩壊、家屋損壊被害が前記の緑が丘地区と青葉区の折立地区に際立って見られ、新宅地造成法によつて造成された宅地（折立地区）であつても地盤崩壊で道路、家屋等の損壊被害があつた事実は、M8〜9規模の大震災になれば、宅地開発前の地形および地質等を配慮した地盤

改善を含む宅地造成技術が重要となってくると思われる。現在、これらの被災された両地区の住宅は、集団移転等も仙台市で検討されているようである。

平坦な平野部にある市街地で地震の揺れで起こる地盤の液状化による幹線道路のマンホールの突出、路面の波打ち現象が数多くみられた。地盤の液状化の被害を知ったのは、六四年の新潟地震で、砂丘地帯に開発された市街地に建てられた鉄筋コンクリートの公営アパート等の傾斜、倒壊被害の報道であった。3・11大震災で仙台市内でも長町地区および名取市内陸平野の道路、建物にその現象による損壊が見られた。これらの地区を流れる河川、名取川、広瀬川および増田川の河岸段丘の沖積層の地盤と浅い地下水位に起因していると考えられている。

私の現在住んでいる柳生地区は、仙台市の南端部、名取川河口の名取市閑上の魚港から西約一〇kmで、我が家の二階から見渡すと、昔からの「イグネ（屋敷林）」で囲われた農家風景が見られる仙台平野の西部に位置する。二〇年前頃から宅地開発され、マンション建築の多い町となっている。ここ柳生と隣接する西中田、

東中田共に名取川の南側に位置し、3・11大震災でライフラインの水道が断水しなかったのは、乾田、畑作地の地盤で、震度もこの地区は5強であったことも幸いした。

仙台市内の被害の大半は、沿岸部およびそれに続く内陸約四kmの仙台平野部に侵入した大津波被害であった。この津波侵入距離は、奇しくも、北は仙台港から南は宮城県亘理町までに敷設されている仙台東部道路の海岸からの距離に相当し、この平野区域内の沿岸部から津波に追われて避難している人の中で、平野部に高さ3mに盛り土されたこの高速道路に駆け上がった難を逃れた人もあった。

この広大な仙台平野部の沿岸にある多数の中小漁港があり、その中の名取市の閑上漁港には、大震災前までは、時たま、休日に開催される閑上朝市、沿岸でのハゼ釣り、或いは港から遊漁船に乗り組んで沖合のカレイ釣りに出かけていた場所だった。3・11から二か月後の頃、瓦礫の整理もされない状態の頃、閑上の街にはまだ入れず、港から3km内陸部の高速道路の近くの田圃に、多数の乗用車、建物瓦礫、漁船等の中に、

私が数年前まで利用していた二〇人乗りの遊漁船（全長約一〇m）が打ち上げられていた光景を目撃し、改めて津波の威力を思い知らされた。三陸沿岸の港では一〇～二〇mの建物の上に、もっと大きな貨物船、大型車等が打ち上げられた光景の報道写真の比ではないが、平野部の沿岸から一～二kmの家屋は全壊状態で、内陸部の地盤崩壊地区と同様に、仙台市でも集団移転が話し合われている。

以上、私が仙台に来て以来の約半世紀に遭遇した地震災害の記録を振り返りながら、千年に一度と言われているこの度の3・11大震災からの一年、想いの一端を記してきたが、最後に原子力発電について触れておきたい。

人類が地球上に存在して以来、人間は自然環境に順応しながら、様々な段階の文明の歴史を経験して、現在の高度な科学技術の恩恵を受取る文明を築いてきた。化石燃料が地球環境悪化の原因と言われ始めて、原子力の平和利用として、日本でも数十年前より原子力発電がCO₂を出さないエネルギーとして利用され

てきた。福島第一原子力発電所の事故原因の調査が進むにつれて、いくつかの機関から報告書が出され明らかにされつつある。技術的な課題としては、発電所の立地条件、施設の設計等の建設段階での条件の査定の甘さに由来していると考えられる。3・11大震災は天災であるが、この原発事故は地震、津波対策の不備が引き起こした人災であると言わざるを得ないと思われる。この事故の終息、廃炉までに相当の年数を要すると言われており、以前から原発の放射性廃棄物の最終処分場が現在も未定のままになっているのも気懸りなことである。

これら想定出来る課題の対策を決めないで先送りしたり、この原発事故災害を風化させたりすることが、新たな災害に繋らないことを願いたい。“天災は忘れた頃に遣ってくる”、しかし、“人災は直ぐにでも遣ってくる”と銘記すべきであろう。

（昭和13年、氷上町下新庄生まれ／秋田工業高等専門学校
名誉教授・工博／仙台市太白区柳生在住）

丹波の彫刻家「磯尾柏里」 3代

荻野 祐一

(丹波新聞社社長)

弊社（丹波新聞社）では毎年2月、柏原八幡神社の柏原厄除大祭に協賛し、各種の展示会を開いているが、来年は、3代目柏里（磯尾隆司氏）の作品展を予定している。「山ざる」からの今回の原稿依頼に、厚かましと承知しつつ、展示会の宣伝を兼ね、柏里3代について書かせてもらうことにした。柏里とは、柏原町柏原の彫刻家で、3代目の隆司氏に至るまで初代の祖父、2代目の父親と続いていた。

初代柏里の名は健治で、明治23年に生まれた。小さいころから木をいじるのが好きで、木彫の道に進みたいという希望を持っていたが、親の猛烈な反対に断念し、大工となった。しかし、大工の仕事に満足できず、妻と手を携え、柏原を出奔した。

木彫を勉強したく、大正2年、23歳のとき上京した。郵便集配、人力車夫、露天商、指物師など、職を転々とする暮らしで、とても勉強どころではなかったが、木彫への思いは失せなかった。このころ健治氏の居所を探し当てた妹が、健治氏を訪ねてきた。その際、妹にこう語ったという。「毎年、帝展を見に行くが、みんな、立派な着物を着た人ばかりだ。それにひきかえ、わしは、みすばらしいなり。でも、食べ物毎日、おかゆでいいから、彫り物がしたい」。

大正12年、関東大震災が発生。妻と子ども3人を連れ、やむなく柏原に戻った。故郷に腰を据え、独学で木彫に打ち込むことを決意。家計は火の車だったが、茶卓、お盆、ダルマなどを作り、技の幅を広げた。

40歳を過ぎたころ、健治氏に追い風が吹き始めた。岩手県の花巻温泉で土産物店を営む主人が健治氏の一刀彫りにひかれ、大量の注文を寄せるなど、理解者が増えてきたのだ。しかし、やがて戦時色が強まり、注文はばったりと途絶えた。



初代柏里作の木彫「わらう」。軍服を着た猿（地球人）がもがきあっている上に、宇宙人が立ち、人間の愚かさを笑っている、という作品

戦後の昭和26年、柏原八幡神社内の厄除神社の狛犬制作を機に彫刻家としてカムバック。狛犬に続く石像として、田ステ女像も制作した。この一連の制作で、郷土での地歩を固めた健治氏だが、寝食を惜しみ、彫刻に一途に打ち込んだ技は、中央レベルにまで成熟していた。昭和29年、62歳の時、第1回都市美彫塑展に出品した作品が入賞したのだ。入賞者は14人で、日展審査、日本彫塑会理事など名だたる肩書きを持った入賞者の中で、在野の彫刻家である健治氏が入賞を果たした。

昭和43年、兵庫県文化賞を受賞。しかし、まもなく癌におかされていたことがわかった。入院中、見舞いに来た妹たちが「元氣になったら、兄妹そろって温泉に行こうね」と話しかけても何も答えない。しかし「元氣になったら、また彫り物をせんらんなあ」と問いかけると、「そうや。そうや」とうなずいたという。

その願いはかなわず、翌年、77歳で死去。彫刻にひたむきな情熱を捧げた一生を終えた。

2代目柏里の名は健一。大正7年、健治氏の長男として東京で生まれた。

31歳で日展に初入選。その生涯で24回の日展入選を果たした。入選作には牛を題材にした作品が多く、「牛の柏里」として知られた。健一氏自身はもともと人物像を制作したかったのだが、モデルになってくれる女性が近くにいなかった上、当時は屋外での制作だったため、そんなところで裸婦像もできず、人物像の制作を断念。師事していた京都の松田尚之氏から「実際に見て作れる題材を近くで探したら」



牛を題材にした2代目柏里の木彫

とアドバイスを受け、かつては近所にも多くいた牛に目を向けた。

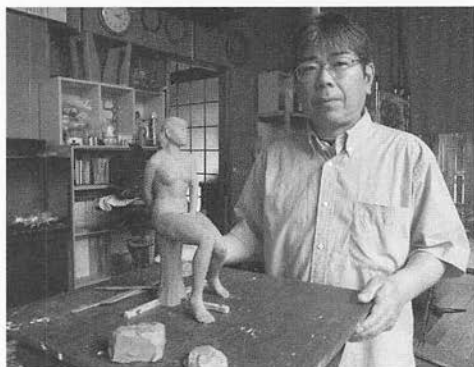
山南町の常勝寺で行われる奇祭「鬼こそ」で用いられる鬼の面、丹波市役所の駐車場にある氷上町出身の元文部大臣、有田喜

一氏の胸像、県柏原総合庁舎の近くに立つ青垣町出身の元兵庫県議会議長、生田克巳氏のレリーフは、健一氏が制作したものだ。

平成13年、82歳で死去した。

3代目柏里の隆司氏は、健一氏の長男として昭和34年に生まれた。

平成12年、「日展」特選を受賞した。当時、父親の健一氏は病床にあった。隆司氏が特選を受けたこ



アトリエで制作に励む3代目の柏里さん

とを伝えると、返事こそなかったが、その表情から喜んでることがわかった。健一氏は日展入選の常連ではあったが、特選は一度もなく、息子の隆司氏が特選を取ることを強く願っていた。「親には数限りなく心配をかけたので、親孝行になりました」と隆司氏。翌年、健一氏は息を引き取った。

父親の仕事を見て育ち、兵庫県文化賞を受けた祖父の受賞記念展で祖父の偉大さを子どもながらに感じたという隆司氏は、子ども時代から柏里の名を継

ぐことを決心していた。ただ、父親からは教員の免許を取れ、と言われた。彫刻のことしか頭になく、家計を顧みなかった祖父のもとで赤貧の暮らしを余儀なくされた自身の体験や、彫刻で生計を

丹波通信



当時、中学生だった息子さんを題材にした3代目柏里さんの日展特選作「明日へ」

立てる難しさを知り尽くしているため、息子には苦労をさせたくないという親心から、教員になることを勧めたのだ。しかし、隆司氏はそんな気はなく、彫刻一本の暮らしを選択した。

金沢市立美術工芸大学の彫刻科を卒業。同時に帰郷し、父親のもとで本格的に木彫を始めるとともに、妹をモデルにした彫塑を日展に出品、入選を果たした。以後、順調に入選したが、「うまく作ろうという意識が災いしたのか」、20歳代後半からスランプに陥り、何度か日展で落選した。

そのころ、隆司氏と同じく柏原高校美術部のOBで、一線で活躍している作家が集まって「MAY美」というグループを結成。定期的に作品展を開く

とともに、たがいの作品や創作態度などを批評しあった。先輩、後輩の垣根を越え、ときには厳しい口調での非難もあった。「当時の自分には日展に入選すればそれでいい、という安易な気持ちがあったが、MAY美の仲間から『お前は特選を取って、はじめてお前なんだ』と教えられ、本気で特選をめざすようになった」と言う。

腰に手を当てた裸婦の立像で、日展特選を受賞。7年後、中学生の長男をモデルに、大人へ脱皮しようとしている少年のみずみずしさを表現した作品で2度目の特選に輝いた。現在、日展委嘱の立場にあり、日展に出品しても審査の対象外だが、出品作の良し悪しで日展の会員に推挙されるかどうか決まるため、決して手は抜けない。「順調に行けば、3、4年で会員になれるかな」と隆司氏。日展会員になることも、父親への親孝行となるに違いない。

蛇足ながら、来年2月にある弊社での個展は、隆司氏にとって初の本格的な個展で、置物や人物像などの木彫が並ぶ。隆司氏ともども、多くの来場を願っています。

丹波Uターン生活 パートⅡ

直 田 正（山南町在住）

丹波にUターンして早四年目を迎えます。それなりにお百姓さんを目指して励んできたつもり。周りの人の評価は聞いてないが、まあ合格点をもらっているのでは？ 小規模ながらも、要領が悪いこともあり、田圃、畑の世話・管理には結構手間と時間がかかる。ほどほどにやればと思うが、新参者故、あまり手抜きは出来ない。周辺の田圃を見れば、栽培者の考え方・性格が良く分かる気がする。田植え後、以前はほとんどの農家が田植え機の植え損じた個所の植え直しをし、田の隅までもきれいに手植えしていたが、今や少数派。田圃に入って這いつくばって草取りも時々やるが、これも少数派。機械作業のみで済ませる家が圧倒的に多い印象。少しくらいスペースを空けた位で収穫量には大して差はないであろうが、田圃に対する姿勢もある気がして簡単には割り切れない。親が一生懸命米作り

していた頃のイメージに影響されているのかも。「お米は安いので、あまりシンドライことやつてもしょうがないで」とよく言われる。

もとより、このあたりの米作は経済的には話にならないので、もつともなことであるが、収穫の大半を地元の人に販売していることもあり、出来るだけ丁寧に栽培したい。自治会では農会を担当し、地元農家との付き合いは普通に出て来ようになった。まあ、丹波の里山の風景の一部となっていれば光栄であるが。それにしても、農家の今の世代の先はどうなるのか心配である。五年一〇年先にどんな風景が広がっているのか想像するのが難しい。次世代は今のそろばん勘定では動かないことは確実である。

農業はさて置き、地元貢献について、地元の社会奉仕団体に加入し、それなりの活動はしているが、肝心の人を丹波に呼び、丹波ファンをなつてもらう試みは過去三年間で成果はあったのか？ 毎年賞状等で呼びかけているが、今まで四人来丹したのみ。これは筆者の徳のなさも関係しているが、関東の人間にとつて丹波はやはり遠隔地らしい。それでも奄美出身（東

京在住)のS君は「島の生活と比べれば丹波は大都云」と言い、静岡市のIさん、千葉市のS君も環境の良さを褒めていた。遠来の客で特筆すべきはニュージーラ



友人アンドリューと天橋立にて

ンド人のアンドリューのこと。昨年一〇月中旬一〇日間滞在し、丹波の秋祭り・天橋立・伊根・城崎温泉を案内し、日本の秋を堪能してもらった。ゴルフ場にも三ラウンド一緒にした。当初は一家四人で来ると言っていたが、結局彼一人で、正直言つてホツとした。もし四人で来られ、それぞれどう案内するか直前まで悩んでいた。

彼とはもうかれこれ二〇年以上の付き合い。NZウェリントン市で長く弁理士・弁護士をやり、退職後奥さんの実家に近いタイの東北地方コンキーンで家を購入し、時折ニュージーランドに行ったり来たり生活。私も二年半前タイを訪れ三週間お世話になった。ラグビー・ゴルフ好きで趣味が合い、年齢も近いことが良いのかも。彼とのコミュニケーションの陰で、私のつたない英語も何とか錆びる手前で止まっている感じ。彼を案内する中で感心したことは、行く先々出会った人たちは外人に対して構えることなく、丹波でも但馬でも、ごく自然に対応されていた。自分の認識以上に日本は国際化していることを教えられた次第。考えてみれば、今や小学校に外人講師も来ていること

もあり、何の不思議もないのであるが。ただ、私にとつてやはり外人は外人の部分も否定出来ない。外人は（特に彼は法律家のせいで）何か分からないことがあると常に何故？（WHY）と訊いてくる。一〇日間も一緒にいると、時折答えるのが面倒くさくなつてきて、こちらより予防措置をとるようになってしまい、つまり質問を呼び込まないように説明、私自身は未だ国際化道半ばといったところかもしれない。

彼は仕事柄、一、二年に一度は日本を訪れていた。ほとんど毎回東京で一杯やっていた。しかしながら、今回のように日本の田舎は初体験で珍しかった様子。丹波の印象は山間に町が点在し（皆、同じように見えたらしい）、多くの家は大きくて立派だというもの。そういえば昔ながらの家が未だ多い。温泉も初体験。城崎ではもちろん外湯（二か所）に行つたが、日本人は何故、同じ温泉なのに違う所に行くのか？と聞いてくる。確かに城崎の外湯はかなり以前より共同管理になっていたので、同じ湯である。建物が違うので風情が違つたと説明したが、もつともな所もある。浴衣で外湯めぐりの後、旅館の夕食には当然浴衣掛けで来る

と思つたら、きちつと洋服に着替えて登場してきたのにはビックリ。もつと説明してやつておけばと後悔。

もう一つ残念だつたことは、とつておきのみやげ話が作れなかつたこと。彼とはクジラ問題も率直に言い合うが、NZではこの話題はマオリ系の一部を除いて、理解不能。むしろ御法度に近いらしい。オーストラリアと共に名うての反捕鯨国。氷上町の回転寿司屋さんでたまたまクジラが回つてて、最初は顔をしかめていたが、今回の旅行のトピックにと勤めると、一度トライしてみる気になり、しめた！と。店員さんに勇んで「クジラお願いします」と。しかし残念。「スミマセン在庫少ないので売り切れました」。

この後の来丹予定者には、京都まで年数回寺社撮影で来る千葉のM氏、女房の友人、テキサス在住のT嬢、鎌倉のO嬢、稲刈り見学希望のY氏等々、予備軍は控えているが、中々具体化しない。福知山線は全国的に有名になつたが、どうも丹波の地は未だ大阪よりかなり遠いのか。

（昭和23年、山南町谷川生まれ／外航海運会社）

『破戒』のモデル

大江礒吉の柏原時代

荒 木 謙

(前県立柏原高校教諭)

一、はじめに

大江礒吉(幼名礒吉、一八六八—一九〇二)は、明治時代に生きた長野県の被差別部落出身の教育者で、『破戒』(島崎藤村著・一九〇六年)の主人公・青年教師、瀬川丑松のモデルになった人である。

しかも、その彼が晩年、旧制柏原中学校第二代校長であつたことは興味をそそられる。

大江は、明治元年五月に現飯田市に誕生する。家族は祖父・両親・義母兄の五人。家系は「非人」階級に



属するが、地元民は「穢多」同様の身分扱いをした。それ故、差別と貧困を強いられ、春駒(旅芸能)や番太(村の警備の下働き)、凡そ人が蔑み嫌がる雑業

などで生計を維持していた。

『学制』(明治五年)の施行で、篤志家の援助を得て小学校に入学、八年後に県最優秀児童賞を受け卒業、母校の代用教員になるが、保護者が「穢多には教わりたくない」と二年で排斥される。彼は初めて我が身で差別の熾烈さを知る。自暴自棄に陥ることなく飯田中学校を経て小学校教員養成校の長野県尋常師範学校(現信州大)に進み、二年後、岡谷市の小学校主任教員として赴任する。が、「新平民の下には就けない」と、今度は同僚教師の抗議により僅か七日で排斥される。高潔な人格を磨き、最高権威の学問を修めれば、差別されないのでは、との思いを秘め、東京の高等師範学校(現筑波大)に入学。四年後、母校長野師範の教壇に立つが、水面下の放逐準備により二年で大阪府尋常師範学校(現大阪教育大)に放逐される。近代都市化が進む大阪でも、エリート意識の強い生徒によつて身分が炙り出され、此処でも二年にして鳥取県尋常師範学校(現鳥取大)に排撃される。その時、「部落民宣言」をしたと伝えられる。差別から逃げ出さない毅然とした態度を貫き、「時代精神の注入者・信念の人」と敬

愛されつつ六年近く在職。ところが、新任校長安達常正と学校改革や教育方針を巡り徹底的に対立、学期半ばの十一月二十九日、同僚四人と共に「休職命令」（免職）を受け、失意のうちに故郷長野に帰っていた。

二、柏原中学校長着任の経緯

当時、権力闘争に敗れた者が再び復権することは希なことであつたが、四ヶ月後に尋常師範教諭から、三三歳の若さで柏原中学校長に着任する。

明治三〇年四月二十六日「氷上郡立柏原尋常中学校」が県四番目に開校される（全国中学校一五六校、生徒約五万人）。土井亀之進が兵庫県尋常師範学校（御影師範・現神戸大）校長・三橋得三の推挙で初代校長として着任。土井は福岡県の豪農出身で、特筆すべきは、後に理想の臣民像とされる二宮尊徳（金次郎）の先駆的研究者で、柏原で「報徳社」を結成、近隣村でもその精神を伝授している。「修身」の授業や薪を背負い読書する尊徳像が全国に建立されるのは日露戦争後である。

明治三十三年、第一三代兵庫県知事（初代知事は伊藤

博文・二六歳）に就任した服部一三（一六年間在職）は、山口県士族で米国留学後、現東京大学の総理、文部省学務局長から岩手、広島、長崎県知事等を歴任していた。彼は「教育県兵庫」を創造すべく「八大中学校構想」を掲げる。

それは、既存の姫路中（明治二二）・神戸一中（二九）・豊岡中（三〇）・柏原中・洲本中に三校を加え、併せて姫路に第二師範を開設する構想である。その中で知事は、「良き教師」獲得のため人事刷新を断行、各校長には帝国大学か高等師範の卒業者を配置すべく広く人材を求めていた。命を受けた学務課長村瀬乙五郎は、県教育会長の三橋得三と奔走する。まず姫路師範校長に大江の東京高師同期生の野口援太郎の招聘を決定。土井校長は明治一九年東京尋常師範の卒業者、そこで二月二日に小森視学官を柏原に派遣、同月二七日付で依願免退職願を提出させる。

この間に大江の名が浮上、その旨の打診もあつたと推察される。三橋から見れば、土井とは恩師関係、大江は鳥取師範校長時代（安達校長の前任）の部下という間柄であつた。結果において、この人事は差し替え

人事で、土井は鳥取師範在職として高等師範研究科に編入、翌年千葉県女子師範校長になる。

大江の鳥取での休職命令を、教育に対する情熱から引き起こされたものと解するならば、また、その処分が事態收拾の行政の都合によるものと見るならば、彼のような有能な人材を捨て置く手はないのである。また、高等師範の年間卒業者は五〇名にも満たず、兵庫での在職者は一〇名程で人材不足という「時の運」に恵まれたと言えなくはない。帝国大・高等師範の卒業者は奏任官（天皇の直属の部下）に任ぜられ、人事権は内閣に属していた。

三、「理想の学校」の創造

明治三四年三月二七日「兵庫県柏原中学校」校長に着任。さすが奏任官（従七位）、年俸は九〇〇円（神戸市助役と同額。衆議院議員八〇〇円）。一因みに明治二七年の現丹波市の衆議院議員被選挙人は八三名、一五円以上の国税納付者、これには三〇〇円以上の所得が必要。―木の根橋の袂の八幡神社事務所に寄宿。ここは藩儒小島省斎や音楽教諭犬童球溪も寄宿してい

た。

開校五年目で生徒三〇八名、教職員二三名。彼は早々に「理想の学校」―生徒を中心に据えたアカデミックで自由闊達な学校―の創造に着手する。毎年一〇〇名程が入学、志半ばで高額な学費で半数以上が退学する現状を打破するため郡立から県立に移管し、授業料をほぼ半額の二円三〇銭、翌年一円にする。驚くことは、大方の生徒が上級学校に進学し、将来は軍人・政治家・文人になる希望を叶えるべく、新教育課程（カリキュラム）を準備して着任していることである。まだ中学校学習指導要領がない時代で、その斬新さに文部省も注目、中川主席視学官や東京高師校長加納治五郎（講道館長）も視察に訪れている。翌年、文部省が制定した学習指導要領は柏原中の模倣と思わせるものであった。校風刷新のため校訓・校章・校旗を制定する。

世情は益々国家主義的な軍国・全体主義教育が謳歌されるなか、時流に逆行するような生徒の自主性・自律心に信頼を寄せる『学友会』を創設。生徒の自主運営による自治会活動を認め『学友会雑誌』の創刊を促し、前任校長が軟弱遊戯として禁止したベースボール

その一方で、日常茶飯事化していた鉄拳制裁や怠惰を厳しく戒め、教学内容（成績評価）も厳格なものに改める。その結果、原級留置者も多く出たが、補習授業で励ました。まさに自由を謳歌（卒業生の回想録）したのである。

彼の身分は早くから周知されていた。生徒は日記に
 “そんな生まれでよく出世できたものだ” 校長は〇〇
 (伏せ)らしい” 最初のうちは大方の者が嫌がつてい
 た”と書き残しているが、彼は泰然自若として動じず、
 やがて、彼の溢れる知性や温厚さは羨望的な魅力とな
 り、生徒たちにも好印象を与えていた。寧ろその素性
 (身分)を疑い、問題にすることを憚る雰囲気醸し
 出していた。しかしながら、地域社会の差別意識は熾
 烈で、彼の在職中にも差別事象が発生していた。彼が
 部落末就学児童の「夜学会」に出向いていたとする説
 もあるが、確証は得られていない。柏中に部落出身者
 が入学したのは明治四〇年であるが、生徒たちの猛反

明治三十五年二月二十六日は柏中第一回の記念すべき卒業式。しかし、卒業生二三名はその直前にポイコットする機運をみせる。その理由は大江校長になつて、教員が一致して最上級生に対する叱責が増え、赤恥をか

卒業生諸子諸子云云名積年苦學叩康
本日以承發第四年畢業證書授各式行狀知
事代理西澤書記閣下並賞給各仁人貴臨
り奉給す本校卒業諸子之面目之過ぐる顔々
明治三十年本校創立五餘載諸子共々本校入
學之文字百有餘名なり而し水月年輩ノ榮
耀十二ニ及ぶ諸子有快初遂

[illegible]

柏高一〇余年の歴

史の中、教員のいない卒業写真はこの一枚のみである。不憫に思った担任近藤安太郎が卒業記念として五年木の楠を植樹、それが今は柏原高校伝統のシンボルとして同じ位置で鬱蒼と茂っている。

彼に感化を受けた俊英は数多くいる。一回生（卒業二三名）友田久雄（東京外大↓前富士ガス社長）、有田邦敬（京大京阪電鉄初代社長・有田喜一のおじ）。二回生（二七名）今川武一郎（神大↓住友銀行頭取）、細田忠次郎（早大↓衆議院予算委員長）。三回生（三七名）植木孝之助（東京高師↓第十代柏原中学校長・第二代柏陵同窓会会長）、菊池頼之（ロサンゼルスで歯科医・終生県人会長）、芦田均（東大↓外交官、内閣総理大臣）などは、大江校長の薫陶に感謝の回想を残している。中でも、戦後内閣総理大臣を務めた芦田均はリベラリスト宰相と評されるが、彼の孫の下河邊元春（元共同通信・嘉悦大学教授）は、「わしは、百姓の出身が口癖で、私たち兄弟に特権意識や差別意識を戒めたのは、中学時代の大江校長の影響によるものと思う。また、読書や文筆活動が旺盛で夏木茂のペンネームでロシア革命家レーニンを最初に日本に紹介している」

（芦田均記念館十周年記念講演会）と、大江との関係を推測している。

大江の教育理念である自由・平等・寛容の精神を尊び、豊かな人間性（個性・特性）を育む開発主義教育がようやく根付きはじめた二年目の六月、急性盲腸炎と腹膜炎を併発して危篤状態に陥り約一ヶ月の療養。その直後に継母の危篤の知らせを受け、病餘の身を起し、七月二日に開通間もない阪鶴鉄道（現福知山線、明治三二年七月開通）に乗り三日をかけて帰郷。

看病する母の腸チフスが彼にも感染、九月五日に満三四歳の若さで他界する。

奏任官大江の葬儀には、地元の約六〇〇人が篤い思いで参列、『謙讓院秀法智才居士』の戒名が授けられた。三週間後柏原でも妻の「つま」さんを迎え追悼式を行った。柏原での在職は一年七ヶ月であったが、『学友会雑誌』創刊号は「大江校長は温容・不言篤行の人」とする追悼文を載せている。

（荒木謙著『破戒』のモデル大江礪吉の生涯」（一九九六年・解放出版社刊）参照）

（昭和18年、丹波市市島町梶原生まれ／元高校社会科教諭）

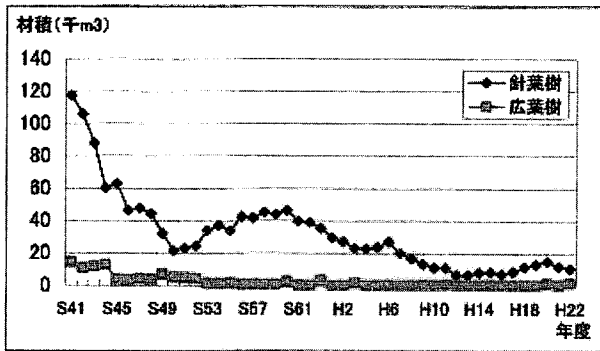
丹波林業の現実

徳田八郎衛（柏原町）

山林所在地も判らない

時々帰省しながら戸閉めの生家を必死で手入れしている友人は少なくない。子供の代には売られるかもしれないが、愛着と意地で自分の代だけは維持すると意気軒高である。ところが山の維持管理になると、誰もがトーンダウンする。「外国人に日本の山林が買い占められていく、国防の見地からも由々しきことというが、経費をかけて山林を維持しても報われないから無理も無いこと。それなら政府に買い上げてもらおうよ」と私がアジっても誰も乗って来ない。山の境界どこか所在地もよく判らないという。これでは手入れも売却もできない。在郷の友人も五十歩百歩であった。部落共有林として寄贈

図1 丹波市の素材生産量の推移



を申し出ても「管理が大変、苦役が増える」と総代さんに断られるそう。これが山林所有の実態だが、山林の公益的機能、「癒し」効果への讃歌や「荒れる山林を守れ」の声はかしましい。これらの普遍的な論議から離れ、兵庫県丹波農林振興事務所にご提供頂いた資料に基づき、丹波に焦点を合わせた

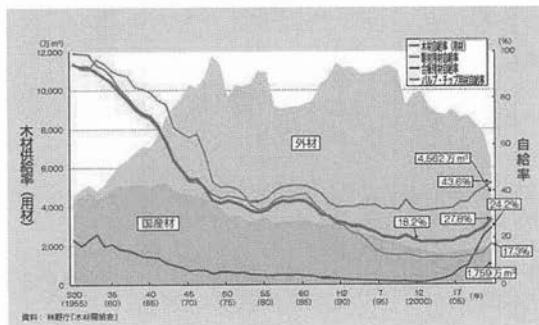
林業の現実を報告したい。

昭和四〇年代から生産量激減

図1は、昭和四一年から平成二二年までの丹波市素材生産量の変移で、針葉樹と照葉樹とに分かれている。ここでは需要の多かった針葉樹のみを取り上げるが、マツはさほど植林されなかったし、昭和五〇年代の松喰い虫退治で根絶(?)されたので、対象となるのはヒノキとスギである。尾根筋ではヒノキが、沢ではスギが育つとされてきた。その生産量が昭和四一年(利用できる最古のデータ)から急落し、同五〇年には二割以下に落ち込んでいく。グラフから見ると三〇年代から始まっているようだ。

読者は何が原因と推定されるだろうか。燃料革命?確かに東京オリンピック前からプロパンガスコンロと灯油ストーブが丹波の生活様式を変え始めたが、これが市内隅々まで浸透し、かつ薪風呂や学校・事務所の薪ストーブま

図2 我が国の木材供給量（用材）と自給率（丸太換算）の推移



で一掃するのは四〇年代後半である。それらの燃料は照葉樹であった。林野庁資料によると、日本の薪炭消費量は三二年がピークで、後は減少していく。では、外材の影響だろうか？製材所経営に当たる友人の述懐では、外材に押されてどうにもならなくなるのは昭和五〇年代になってからだが、政府統計によると、昭和二六年に戦前から

あった丸太関税が撤廃された後、三五年の丸太材輸入の完全自由化に続き三九年には木材製品全品目の輸入も完全自由化された。それ以降、急激に外材の供給量が増加し、四四年には国産材供給量を凌駕する（図2）。

これで説明ができそうだが、高度成長に伴う需要増加もあって、日本全体の国内材（用材）生産量は四二年をピークとして徐々に減少するのに、丹波市ではそれより先に急減している。ヒノキに限ってみても、木曽ヒノキ、東濃ヒノキ、和歌山ヒノキ、美作ヒノキなどに比べるとネームバリューを欠く丹波材であるから、丹波ではより苦しかったのかもしれない。

これに加え、丹波市の山は二〇年代から三〇年代にかけて大幅に伐採・植林されたので、四〇年代には十分供給できなかつたと見ることもできる。しかしその頃、郷里の山の多くが禿山だったという記憶は、私にはない。確かな記録や写真をお持ちの会員は、ぜ

ひ寄稿してご意見を賜りたい。

他にも、日本全体とは違う現象が図1に認められる。二度の石油ショックで外材輸入も減るほど木材需要は減少したのに、丹波では生産量が回復しているのだ。それもバブルに先駆けて……六一年には、どん底だった五〇年頃の二倍に達する。そして未だバブル期なのにグングン下り始め、二〇年近く降下して、ついに照葉樹と同じ生産量にまで落ち込む。その後、平成一七年から奇跡的な回復を見せるが、これは図2でも裏付けされている。環境問題などの影響でロシア、中南米をはじめ「材木輸出大国」が輸出規制を始め、僅かながらも国産材の出番となったからである。だが五〇年間の悲願が成就すると思いきや、二〇年のリーマンショックで元の黙阿弥となつて現在に至っている。

林野庁資料でも平成二一年の日本全体の木材自給率は二四%、すなわち平成元年程度に回復するが、生産高は

表 1-1 素材の供給状態

単位：1000 m³

供 給				需 要		
総 計	国 産	内 材	国産材 移入材	外 材	総 計	移 出
1,423	982	27	1,014	1,423	1,858	65

表 1-2 外材の入荷量

単位：1000 m³

米 材	490
南洋材	272
ソ連材	168
その他	64
計	1,014

木材需要の減少
丹波市の針葉樹生産量急減の一番大

二五％ほどの低さである。

きな要因は外材普及であったが、平成以降の停滞要因は木材需要の減少であろう。表1・1は、昭和五三年における兵庫県の需給を記しているが、供給の七割を外材が担っている。その内訳を示すのが表1・2であり、主力が米材、続いて南洋材である。

表 2-1 素材の需給状況

[単位：千m³]

供 給				需 要		
総 計	国 産	内 産	外 産	総 計	需要量	移出量
565	192	28	345	565	492	73

表 2-2 外材入荷量 [単位：千m³]

NZ材	281
米材	29
南洋材	16
北洋材	13
その他	6
計	345

表2・

1は、平成二二年におけるものである。昭和五三年に比べると需給は四割に、外材の占有率も六割に後退した。表2・2が、その内訳

であり、米材を凌いで突出したニュージーランド材は、物流の梱包材やパレットに、また集成材や合板等に多用されている。需要減少の大きな要因は、木造住宅が半分以上に減っただけでなく、木造住宅の工法変化で木材使用が減ったた

めである。木造住宅の主要な工法は「在来工法（木造軸組工法）」、「ツーバイフォー工法（枠組壁工法）」、「木質プレハブ工法」の三つである。二二年度着工住宅では在来工法が七六％、ツーバイフォー工法が二一％、木質プレハブ工法が三％、と三三年度『林業白書』は伝えるが、「在来工法は、もともと減っている」という工務店も多い。木造住宅の木材使用量は、在来工法では通常、床面積一平方メートル当たり約〇・二〇立方メートル程度であり、平均的な住宅（二二〇平方メートル）だと、一戸当たり約二四立方メートルとなるが、ここでも外材に押されるのだ。

各部材における使用木材の割合をみると、社団法人日本木造住宅産業協会の資料では、管柱については、国産材（製材・集成材等）のシェアは約六割で、集成材がその半分を占める。これに対して、梁・桁等の横架材については、米マツを中心とする外材（製材・集成材等）が九割以上を占め、土台に

ついても約六割を占める。また、床下
地用合板についてはスギ、ヒノキ等の
国産材を原料とする合板は三分の一程
度で、残りは輸入材を原料とする合板
となっている。このため、在来工法全
体でも国産材のシェアは三割弱程度に
とどまっている。木質プレハブ工法に
なると、柱や鴨居や桁はなくなり、垂
木が瓦を支える姿も見られない。従来
の住宅では建築経費の半分ほどが木材
に費やされたが、この工法では一割以
下だという。

利潤はあるのか？

「林業経営統計調査」によると、家
族経営の林業経営体のうち、山林を
二〇畝以上保有し、施業を一定程度以
上行っている経営体における一経営体
当たりの林業粗収益は、平成二〇年度
には一七八万円であったが、施業請負
わせ料金や雇用労賃等の林業経営費が
一六八万円で、林業粗収益から林業経
営費を差し引いた林業所得は一〇万円

であった。また『2010年世界農林
業センサス』によると、過去一年間に
保有山林で自ら素材生産を実施した林
業経営体の数は、全体の八%に当たる
一万一千経営体に過ぎず、大多数の林
業経営体にとって、林業生産による収
入は間断的なものとなっている。現在、
丹波市で自らも山林を保有しながら材
木商を専業とするのは三社、丹波市森
林組合を加えても四社であり、ほぼ毎
日稼働する製材所は数社に減った。こ
の約一〇社が前述の一万一千経営体の
丹波版であり、他の材木商や製材所は
「間断的」営業である。

「山元立木価格は素材価格の低下に
伴い、平成三年以降、低下傾向で推移
してきたが、二三年は一九年ぶりに上
昇に転じた。二三年も外材から国産材
へのシフトや国内における住宅需要の
持ち直し等により、スギが前年比七%
上昇し二、八三八円/mに、ヒノキが
四%上昇して八、四二七円/mになっ
た。但し、ピーク時の昭和五五年の価

格と比べると、スギの山元立木価格は
ピーク時の一三%、ヒノキでは二〇%
程度にすぎない」と『林業白書』は伝
えるが、柏原町下小倉の材木市セリを
観察すると、切り出して出荷されてい
るから山元立木価格よりは高値である
が、立方m当たり1万円を越す値で落
札される材木は少なく、大半は八千
円程度。情けない材だと板にもならな
いからチップ、すなわちパルプとなる
が、値は三、五〇〇円だからトラック
一杯積んで出荷しても人件費が出てこ
ない。

丹波市森林・林業振興基本計画の現
状紹介も、生産量や価格には一切触れ
ていないが、「採算性の悪化や素材生
産業者の高齢化、後継者不足、不在地
主の増大等が原因で施業意欲は低下し
て森林の荒廃を招く要因の一つになっ
ている」と嘆いているのが気になった。
会員の皆さん、「うちの山」の所在だ
けでも確認しておいて下さい。それも
頭と脚が達者なうちに……。

◆赤井紀男さん

今回も予定が入っていて参加出来ません。申し訳ありません。

◆浅野智哉さん

お世話になっています。当日は仕事があり、今回は欠席でお願い致します。ご盛会をお祈りしております。

◆安達健一郎さん

用事が重なって恐縮ですが欠席させて頂きます。悪しからずご了承下さい。皆様によろしく。

◆足立正美さん

予定が重なり参加出来ません。悪しからず、幹事の方々のご苦勞感謝しています。

◆足立敦子(岡原)さん

めっきり秋らしくなって参りました。何時もながら当日は用事がありまして欠席させて頂きます。ご盛会を心

より御祈念申し上げます。

◆荒木輝雄さん

ご案内有り難うございました。旅行と重なって参加出来ません。悪しからず宜しく。

◆池田達人さん

いつもご案内頂き申し訳ありません、欠席です。皆様のご多幸をお祈りします。

◆石倉良介さん

手術後も元気で福祉の分野で活動しています。

◆石田勝彦さん

いつもご案内頂きながら、何分にも遠いため失礼しております。

◆伊藤富士子(長尾)さん

震災、台風と大変な年でした。震災に際しましては郷友会より温かいお見

舞いを頂き感謝申し上げます。お陰様で恐怖を乗り越えて頑張っております。『ふるさとの会』のご案内を頂き有り難く存じ上げながら出席出来ず残念でございます。ご盛会をお祈りしております。

◆今津幸子(服部)さん

何時もお世話になり有り難うございます。17日より幼馴染みが上京してきますので欠席させて頂きます。

◆岩曾豊明(細見)さん

今年も欠席致します。ご盛会をお祈りしております。「山さる」いつも楽しく拝見させて頂いています。

◆臼井小五郎さん

来月入院手術となりました。ご盛会をお祈りしております。

◆内堀祥司さん

出席出来なくて申し訳ありません。

会の皆様よろしく。

◆大石佐代子（村井）さん

今回ふるさとの会は父の法事で帰り、後妹と小旅行の予定があり欠席させて頂きます。

◆大垣忠男さん

82才を過ぎましたが元氣です。特に悪い所はありません。在郷の同級生も少しずつ他界し寂しくなりました。

◆大城戸しず代（三井）さん

いつも「やまざる」を送って下さいましてまことに有り難うございます

◆大島信子（高見）さん

元氣でゆったりした時を過ごしております

◆大槻朱里さん

お久しぶりでございます。今回も素敵なお誘い有り難うございます。坂上

様にもお誘いを頂いたのですが、この日一つ稽古が入ってしまったので参加出来なくなりました。皆様にお会いできる日を楽しみにしていただきますが非常に残念です、申し訳ございません。又参加させて頂ける日が来ますように……。

◆小笠勝啓さん

横浜から立川市に転宅致しました。いつも「山ざる」をお送り頂きお礼申し上げます。すみません先約があり欠席します。

◆岡林逸男（荻野）さん

ご盛会をお祈りしております。

◆荻野哲男さん

今年は日本列島に災害が多く感慨深い年になりました。風化させないよう復興に協力したいものです。都合で参加出来ません宜しくお願い致します。『短歌』少しでも役に立つかと三

陸のさんま求めし秋の陽落ちる

◆荻野公三さん

いつもながらお手数を掛けて頂き嬉しく思っております。有り難うございます。東電の原発からの放射性物質の飛散は夏の気温上昇による上昇気流、冬期の北風により遠方への拡散が心配ですが自然現象と心得ています。皆様のご多幸を祈っています。

◆尾崎美代子（永井）さん

年齢と共に色々な病氣になり病氣と仲良く付き合っていかなければと思う日々です。11月11日に両眼のヌンチャク型シリコンチューブ手術を受けます。その後洗浄などで病院通いが続く為欠席させて頂きます。ご盛会をお祈りしております。

◆梶原やす子（矢野）さん

秋も深まり清々しい日々でございます。事務所の方にはお世話頂きご苦労

様です。私事のため今回も欠席させて頂きます。ご盛会をお祈りしております。

◆桂 照子（豊嶋）さん

病院通いをしながら何とか日々過ごしています。

◆門山壽子（田中）さん

毎日近くの薬局で薬剤師として働いております、当日も5時まで仕事ですので欠席致します。

◆上村邦子（本庄）さん

おかげさまで元気にしております。時折のウォーキングで浅間山麓を歩いています。ご盛会をお祈りしております。

◆河本幸子（小谷）さん

秋らしい日々が続いています。幹事の皆様何時もご丁寧に書類をお贈り頂き有り難うございます。今回も都合が

悪く欠席させて頂きます。皆様に宜しく。

◆菊池洋子（三輪）さん

ご連絡を頂く度に、ああもう一年が過ぎたのか、と時の早さに驚かされるこの頃です。欠席申し訳ありません。「山ざる」いつも楽しく読ませて頂いております。皆様のご健康をお祈りしております。

◆岸本里子（後藤）さん

残念ですが他用があり今回は欠席致します。ご盛会をお祈りしております。

◆北村貞子（大野）さん

暫くご無沙汰しておりますが元気で過ごしています。趣味のパッチワークで忙しい日々を送っています。ご盛会をお祈りしております。

◆桑原加代子さん

ご案内有り難うございました。只今

多忙の為欠席させて頂きます。

◆古倉徹夫さん

当日は業務のため欠席させて頂きます。

◆小竹政孝さん

大変お世話になっていきます。皆様の健康と益々のご発展をお祈り申し上げます。

◆坂上 豊さん

「山ざる」心待ちに拝読致しました。編集が大変かとは思いますが毎回楽しみにしております。今回は中々の読み応え有る内容で満足しております。末筆ながら東日本大震災で罹災された方々へ心からお見舞い申し上げます。

◆坂上五朗さん

何時もご招待有り難うございます。本年も都合が悪く欠席させて頂きます。会の皆様のご健康と当日のご盛会

をお祈りしております。

◆坂上 登さん

11月19日、20日の予定が入って残念ながら欠席します。ご盛会をお祈りしております。

◆坂本徹二さん

ご盛会をお祈りしております。体調不良が続いております。毎回丁寧なご案内感謝しております。

◆澤田みさをさん

大変有意義で又楽しい内容で感心しながら拝読致しました。郷友会もきつと盛会だろうと推察しております。今後共宜しくお願い致します。ご出席の皆様によろしく。

◆篠原よね子（佐々木）さん

何時もお世話様になります。出席したいと思ひ楽しみにしておりますが

急に目まいがして、残念ながら欠席します。

◆渋谷要之助さん

毎々のご連絡有り難うございます。目下地元の住民協議会の役員をやっており、10月から12月初旬までは色々会合があり今回も欠席とさせて頂きま

◆島津和子（恒川）さん

体調悪く欠席致します。

◆正呂地悟さん

ご盛会をお祈りしております。又事務局の皆様のご健勝を併せてお祈り申し上げます。

◆杉岡明美さん

例年の事ながら秋は発表会が多く、今は第9の練習に励んでおります。こんな事をしておられるのも後しばらくと思ひつつ、ご盛会をお祈りしてお

ります。

◆鈴木和栄（岡林）さん

「山さる」誌お届け有り難うございました。又去年何年かぶりで出席、80才のお祝いの歓迎を受け感激し恐縮致しました。NHKの村上さんにも身近にお話しさせて頂き、去年と今年は東北の震災を忘れられない年となりました。

◆勢 正彦さん

前々からの予定があり申し訳ありませんが欠席させて頂きます。

◆大録和代（藤田）さん

毎年お便り頂き有り難うございます。当日は仕事を休めず欠席させて頂きます申し訳ありません。今は老人ホームで働いています。事務局の皆様本当にご苦勞様です。ご盛会をお祈りしております。

◆高尾久子（川村）さん

お世話様です。主人が10月はじめから入院中です。11月初旬に退院予定ですので参加出来ると思っていますが、11月14日再三の緊急入院を致しました。やはり今回は欠席致します。

◆高橋世志子（井上）さん

何時もお誘い下さいます有り難うございます。洋裁仕事ができで未だに作業所に勤務しております。仕事に追われ休む暇無く精出しています。皆様に宜しくお伝え下さい。

◆竹中紀代子（森田）さん

お世話して下さっている方いつもご苦勞様です、懐かしく読ませて頂いています。益々のご発展をお祈り申し上げます。

◆谷川隆治さん

何時もお世話様です。お陰様で揃って元気に過ごしています。折角のご案内

内ですが予定が入っていて出席出来ません。ご盛会をお祈りしております。

◆千葉淳子（山内）さん

朝夕めつきり涼しくなりました。何時も大変お世話になっていきます、皆様にお会いしたく思っています。今回も欠席させて頂きます。皆様に宜しくお伝え下さいませ。皆様のご健勝、郷友会の発展を祈っております。

◆辻田 昌さん

何時もご連絡頂き有り難うございます。本人寝たきり状態で出席出来ません。悪しからずお許し下さい。（代筆）

◆出町京子（粕谷）さん

6月に駅の階段で転び骨折しました。がやっと回復しました。年相応に『転ばない、風邪を引かない』をモットーに暮らしたいと思っています。丹波では『震災チャリティ舞踏公演』も大盛況に終わり感謝しております。

◆富田貞子（能勢）さん

何時もご案内を頂きまして有り難うございます。所用のため勝手ながら欠席させて頂きます。会の皆様のご健康とご盛会をお祈りしております。

◆中江悦子（梅垣）さん

今夏は軽井沢、大阪に長く滞在することとなり連絡が取れなくて心苦しい限りです。「山ざる」の原稿では色々な事情ですっかりご迷惑をお掛けしました、スタッフの方々にもよろしくお伝え下さい。

◆能勢初代（由良）さん

年齢を重ね90才を少し超えました。お陰様で身体は健康で老人会への出席を楽しみにしております。皆様の健康をお祈りしています。

◆野村節三さん

東日本大震災に際しご丁寧なお見舞い状を頂き厚く御礼申し上げます。大

津波の難を免れた事は誠に幸運でした。その後地元への復興に向かい微力を傾けています。「平成三陸大津波」については「山ざる」42号をご覧下さい。今回は所用にて欠席しますがご盛会をお祈りしております。

◆ 畑 雅樹さん

所用があつて出席出来ません。ご盛会をお祈りしております。有り難うございました。

◆ 福田治子（足立）さん

今回は都合が悪く出席出来ません。ご盛会をお祈りしております。

◆ 本城英明さん

私どもの施設では東日本大震災で被災された老人保健施設の45人を受け入れました。皆さん元気にふるさと福島に帰ることが出来てホッとしています。多くの方のご協力で実現しました協力の大切さを実感しています。

◆ 前田武彦さん

ご盛会をお祈りしております。

◆ 松本栄二さん

先約があり残念ですが欠席。同期の者数名が出席されるのか、お目にかかれぬのが残念です、皆様に宜しくお伝え下さい。長野のグループホームにて。

◆ 三原恭二さん

何時も欠席で申し訳ありません。仕事の関係で休みが取れず今回も欠席となります。

◆ 村上高廣さん

毎回欠席で申し訳無く思っています。又今回も都合によって欠席させて頂きます。皆様方によりしくお伝え下さい。

◆ 森田 宏さん

毎年「山ざる」をお送り頂き、ふる

さとの会のご案内を頂き有り難うございます。11月は湯西川に行っておりますので欠席致します。ご盛会をお祈りしております。

◆ 森田栄子（山本）さん

ご案内を頂き有り難うございました。10月からずっと義父母の介護のために田舎に行っておりましてご返事が大変遅くなりましてすみません。出席したい気持ちで一杯ですがあいにく都合が悪く行くことが出来ません。皆様に宜しくお伝え下さい。

◆ 安原三智子（足立）さん

マエストロ足立さんの音楽漫談には是非伺いたく色々調整して参りましたが、やはり欠席になりました。皆様に宜しくお伝え下さい。

◆ 山岸幸子（細見）さん

いつも有り難うございます。今回は残念ながら欠席させて頂きます。ご盛

会をお祈りしております。

◆山口とき代（細見）さん
いつもすみません。

◆山口敏之さん
年に数回母の顔を見に帰省しています。丹波への想いは年とともに強くなっています。

◆山田良一さん
お世話様です。当日は別用が入って
おり参加出来ません申し訳あります、
ん、よろしく。

◆山本一志さん
今年も欠席させて頂きます、申し訳
ありません。

◆横田公子（竹下）さん
何時もお世話になっております。最
近体調が悪くなることが時々ございま
すので今回は欠席させて頂きます。ご

盛会をお祈りしております。

◆横谷喜代孝さん
何時もご丁寧な郷土のふるさとの会
にご招待頂き有り難うございます。何
時も出席出来なく残念ですが郷友会
のご盛況を祈念しています。

◆横幕尚子（荒木）さん
皆様のご健勝を念じ上げておりま
す。

◆依藤廣次さん
よわい90を過ぎますと一人での遠出
は無理になって来ました。ご盛会をお
祈りしております。皆様によりしくお
伝え下さい。

◆訃報

平成23年10月から24年8月までに事
務局にご連絡いただいたものです。掲
載して謹んでご冥福をお祈り申し上げ
ます。

葦田 冬子	平成21年12月
伊田 光男	平成24年5月
生田 正輝	平成24年5月
内堀 恒子	平成23年4月29日
岸部 正己	平成23年10月9日
谷垣 富子	平成24年8月15日
西垣きみ子	平成23年7月6日
原 直之	平成24年4月
丸山 紀子	平成23年4月
山口 章吉	平成20年10月21日



◎寄附者芳名

兵庫県東京事務所殿	一〇、〇〇〇円
丹波新聞社・荻野祐一殿	一〇、〇〇〇円
秋山 一男殿	五〇、〇〇〇円
岸本 勲殿	一〇、〇〇〇円
藤井 宏次殿	八、〇〇〇円
梅田 重二殿	五、〇〇〇円
岡林 逸男殿	五、〇〇〇円
岡原 東光殿	五、〇〇〇円
荻野 武殿	五、〇〇〇円
荻野 哲男殿	五、〇〇〇円
谷口 捷殿	五、〇〇〇円
徳田直三郎殿	五、〇〇〇円
中居 篤子殿	五、〇〇〇円
堀井 隆川殿	五、〇〇〇円
三浦 セツ殿	五、〇〇〇円
芦田 重秋殿	三、〇〇〇円
芦田 拓雄殿	三、〇〇〇円
足立 悦雄殿	三、〇〇〇円
足立 吉雄殿	三、〇〇〇円
生田 清弘殿	三、〇〇〇円
植田 茂樹殿	三、〇〇〇円

上野 重喜殿	三、〇〇〇円
大野 義昭殿	三、〇〇〇円
大野 善三殿	三、〇〇〇円
荻野晴一郎殿	三、〇〇〇円
金出 一郎殿	三、〇〇〇円
木呂子恵美子殿	三、〇〇〇円
古倉徹夫・則子殿	三、〇〇〇円
大録 和代殿	三、〇〇〇円
谷垣恵美子殿	三、〇〇〇円
谷垣 尚殿	三、〇〇〇円
谷口 浩章殿	三、〇〇〇円
千葉 淳子殿	三、〇〇〇円
鶴田宏・ゆき子殿	三、〇〇〇円
南部 光殿	三、〇〇〇円
原 利充殿	三、〇〇〇円
廣瀬 安伸殿	三、〇〇〇円
藤田 純殿	三、〇〇〇円
藤田 千治殿	三、〇〇〇円
山口 敏之殿	三、〇〇〇円
若森 敏郎殿	三、〇〇〇円
渡辺 和代殿	三、〇〇〇円
渡辺 昌彦殿	三、〇〇〇円
足立美都子殿	二、〇〇〇円

久下 誠殿	二、〇〇〇円
畑 雅樹殿	二、〇〇〇円
三宅 良夫殿	二、〇〇〇円
山口 泰男殿	二、〇〇〇円
足立 明子殿	一、〇〇〇円
足立東一郎殿	一、〇〇〇円
池上 忠志殿	一、〇〇〇円
井出 恭子殿	一、〇〇〇円
井德 正吾殿	一、〇〇〇円
稲岡 俊一殿	一、〇〇〇円
梅田 節二殿	一、〇〇〇円
岡田 充利殿	一、〇〇〇円
小松 京子殿	一、〇〇〇円
坂上 勝朗殿	一、〇〇〇円
塩見みつゑ殿	一、〇〇〇円
島津 和子殿	一、〇〇〇円
正呂地 悟殿	一、〇〇〇円
勢川 武彦殿	一、〇〇〇円
高橋世志子殿	一、〇〇〇円
三浦 宏殿	一、〇〇〇円
村上 高廣殿	一、〇〇〇円
森本 浩殿	一、〇〇〇円

■ 会員が書いた本

岩槻邦男著

『いのちの
生命のつながりをたずねる旅』

ミネルヴァ書房／定価3000円

柏原町生まれで鴨庄村育ちの岩槻会員がミネルヴァ書房から請われて「研究自伝」を上梓された。小生は、高校で理科4科目の中から3科目を学ぶ際に生物を選択しなかったのに、大学で植物学教室へ立寄ると「分子生物学が生命観や宗教観まで変革しよる今、先輩は何で植物分類学やとってんですか」と失礼なことを言ってきた。改めてお詫び申し上げます。

本書は「記憶の始まり」から始まる。著者は五歳になる直前、ふらふら立ち上がった一歳の、特別に大きかった妹を支えようとして縁側から転落し、頭の傷は今も残っている。その妹、正子さんは私の高校同期

だったが確かに大柄だった。次に「里地里山で植物に親しむ」、「シダ植物との出会い」に進み、柏原高校生物班での活動と、それを基盤に京大理学部入学直後から市井の研究會、「しだとかけ談話會」に参加する経緯が詳しく記されている。恩師も多数登場し、まるで「郷土について書かれた本」のようだ。後段でも「丹波市の恐竜化石」で郷土が登場するが、「発掘の裏話は誰かにまとめてもらうとして」と、軽く触れられている。

岩槻邦男

いのちの
生命のつながりをたずねる旅

ミネルヴァ書房



れている。だが洞察力ある読者なら、その苦悩を行間から読み取れるだろう。しかし私憤ではない義憤は隠さず記されている。「東大・京大でないと科研費は貰えないのか」と憤慨する人の提案書を見たら、何を求めているのか理解できない文章だったこと。中国での現地調査で幾ら注意しても植物を持ちだす研究者が後を絶たなかったこと等々。著者は京大教授に昇任して間もなく東大植物園教授との併任を要請されるが、それは東大で分類学が衰退し分類学以外の研究者にポストを占められそうなので分類学者が京大から赴任せざるを得なかったからだと率直に記している。

あれから30年、分子生物学、遺伝子学から分類学への浸透は続く。協働、融合なのかもしれない。この解説も自伝とは別には是非刊行して頂きたいものである。（徳田八郎衛）

原谷洋美 歌集

『億光年』

短歌研究社／定価2000円

第三幕「億光年」は七年の歳月を経て、アラ還真つただ中にある主婦の日常が大きく動き始める。

娘の結婚、夫の退職、そして訪れた姑の介護。仕事と両立させる主人公は「介護とはこんなものでしょう」と「難行」の僧の如き返事。何事も手拔きの出来ぬ性分とて、介護も例外ではない。



原谷さんは姑よりは明を、過去よりは未来を、物よりも希望を描く人である。そのとき、彼女が無理をしてボジティブに振る舞おうとしないことが、私にはうれしい。あくまでも自然体。そして、色彩感覚や季節感や数字やモノの質感を大切にしながら場面を組み立てていることに賞讃と読後力を感じる。 栗木京子 (2019)

○金盥にゆず湯を持てば姑の部屋大

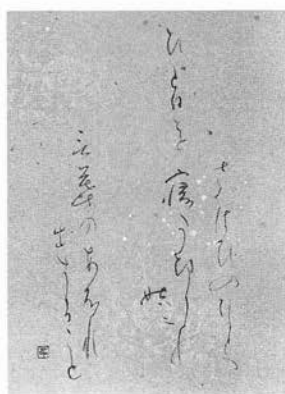
き湯舟となりて香の立つ

○立春は絹の靴下贈りたり繭籠りするベッドの姑へ

神経も背筋もピンと張って日常が

過ぎて行く。疲れた時は思い切りペダルを漕ぎ、言葉に遊び、自然、人間、情景観察にいそしむ。

それにしても、歌を詠むというのは実に過酷な作業である。胸の内を惜し気もなく曝け出すなどというのは心思強くなくては務まらない。姑との確執などは世の常。



さいはひのひとつひと日を寝たきりの姑に言葉のあふれ出づること

(藤原ひさ子・筆)

○姑の背に櫛の一葉散り留まり振り

落とす手を出せぬ日もあり

それでも詠み続けられるのは、姑の嬉しさ哀しさに、ずっとそつと寄り添ってきたから。

○宇宙への億光年と姑生きる九十六年のともに関けし

○歩けない唯それだけと姑の言ひただそれだけのかなしみの底

日常のふとした折に、遠く幼い日の記憶が重なり、懐旧の情にかられるのも、この年頃の所為なのかも。

○くしゃみ後の空気に父の頬ずりの匂ひ混じれる花冷えの朝

○四月尽わらび摘みたる夕風呂に母の死にしは遥かなきふ

○ほんたうは大鷹になり眼閉ぢ森の深くの樹にねむりたき

もう一度自分に問いだします。

○たてがみを靡かせる夢持ちたるか人跡絶えたる夕空の下
さて、第四幕の展開は……。

(藤原ひさ子)

■郷土について書かれた本——

佐竹茂康著

『八分目な診療室から』

文芸社／本体1,300円

この春、比較文化史や女性史では日本を代表するエクスパートの佐伯順子同志社大学大学院教授に浦安市までお越し頂き、新島八重の生涯に見る近代日本について講演をお願いした。腰を抜かさんばかりに驚いたのは見送りの車中で「ご郷里、氷の上の郡へ講演に伺ったことがあります。水分け橋も大和旅館も拝見しました」と告げられた時である。「招聘者は何方でしたか」と尋ねると「氷上町で開業の歯医者さんでした」との応え。「そんな文化人の歯科医なら佐竹さんに違いありません」と述べる。「当たり前」であった。

その佐竹茂康さんが兵庫県歯科医師会会報「歯界月報」へ一九九〇年

代に寄稿された文に地元、丹波新聞への紀行文を加えて出版されたのが本書である。郷友からは知られず、京都在住の佐伯さんから教えられるという「逆輸入」になってしまった。著者には丹波市からの発信という気負いはなく、普遍的な話題を取り上げた寄稿だから「郷土について書かれた本」として紹介すると、著者から「そんな幅の狭い本ではないよ」と異議を頂戴するかもしれないが、在住者でないと語れない情報が各所に散りばめてある。

例えば、著者は朝のウォーキングで農具が置き去りにされているのに



3件も出会う。昔は肩に担いで帰宅するから有り得なかったことだが、今は車で搬送するから起こるのだ。猪を主役とする、けもの道の発達も記されている。垂直に近い断崖を一直線に下る新道を作った翌日、斜面を45度で半分下り、直角に曲げて後半分を下る新新道を作り直したそう。これを聞いた知人は「深夜、親子何頭かの猪が舗道を進む蹄の音を聞いた」と語り、別の知人は、電気柵に触れた猪の悲鳴で飛び起きたという。

エッセイの対象は丹波市だけに留まらない。三田人が誇りとする「日本の歯科医師第2号」佐治職が、新島襄を助けてキリスト教布教に当たり、三田へ伝道に来たダッドレー、タルカット両女史の神戸女学院創設に尽力し、聖書の判りやすい翻訳に不滅の功績を残したことまで記されている。

(徳田八郎衛)

平成24年度相陵同窓会 東京支部総会・懇親会開く

今年の総会・懇親会は平成24年6月23日(土)、会場は昨年同様「八重洲富士屋ホテル」にて開催されました。同ホテルは昨年3月11日の未曾有の東

日本大震災により長年利用していた「九段会館」が使えなくなり、急遽見つけた会場ですが、東京駅に近く宴会場もなかなか豪華、食事もおいしく好評でしたので、今年も引き続きの利用となりました。

今年の担当幹事は昭和41年卒・18回の皆様。一昨年まで総会出席者も殆ど



谷口支部長挨拶

いない学年でしたが、この一年大変ご努力いただき当日は同期20名が集まり総会・懇親会の運営を乗り切っていたできました。

当日は天候にも恵まれ欠席者も殆ど無く、同窓会本部芦田拓雄前会長、谷



上田正文氏のセミナーに熱心に聴き入る出席者

水克己新会長、阪神山下文隆・京滋高見静治・東海畑宏則各支部長・代理、久し振りにOBで母校校長に就任された村山美生校長、3年振り参加の辻重五郎丹波市長、榎本輝彦兵庫県東京事務所長、今年も沢山のお酒をご恵贈頂いた西山裕三西山酒造場会長、荻野祐一丹波新聞社社長の合計10名のご来賓、他支部からの参加者を含め約130名の懐かしい顔が集まり大盛会でした。

総会では冒頭、会員でこの1年間に亡くなられた方及び昨年の東日本大震災で亡くなられた方に「黙とう」を捧げました。

支部長挨拶では総会案内のなかで呼びかけた「くすのき基金」に対して100人を超える会員から15万円を超える寄附が寄せられたことの報告とお礼が述べられた。

総会では役員改選が原案通り承認(支部長・副支部長は全員再任)されたほか、「くすのき基金」に東京支部

として前述の東京支部会員からの寄附金を含め金20万円を寄附することが承認されました。

恒例の柏陵セミナーは幹事学年18回生(財)社会安全研究財団専務理事上田正文さんによる「暴力団対策法施行20周年を迎えて」警察の暴力団対策の変遷と暴力団の変化」と題して、「暴力団対策法施行後いろいろと対策強化が図られてきたが、そうは言ってもなかなか暴力団が完全に無くならない」旨が

述べられました。

山下阪神支部長の乾杯の音頭で始まった懇親会は途中に荻野丹波新聞社長と東日本大震災被災地の岩手県から参加の4回生野村節三様からのスピーチ等を挟んで時を忘れた4時間の最後は校歌・応援歌・畑東海支部長の音頭による万歳三唱、思い出の1ページとなるテابل毎記念写真を手に、来年度の総会・懇親会は7月13日

(支部長・谷口浩章 15回生 氷上町出身・記)

柏陵同窓会東京支部「くすのき基金」に20万円寄附

6月23日(土) 東京支部総会での承認を受け、7月13日に「くすのき基金」に20万円を寄附いたしました。

本年2月の東京支部常任理事会、4月の同理事会にお諮りし、総会・懇親会のご案内のなかで「くすのき基金」への寄附をお願いいたしましたところ、総会当日の出席者を含め142名もの方から合計193,500円のご寄附をいただきました。本当に有難うございました。多くのご寄附をいただいた結果、東京支部会計からの拠出は6,500円の少額となりました。

ご寄附をいただきました皆様に心より感謝・御礼申し上げます。(柏陵同窓会東京支部長 谷口浩章・記)



(土)の予定です。より多くの同窓の皆様のご参加をお待ちしています。近年関東に來られたご友人・お知り合いがおられましたら事務局までお知らせください。

なお、柏陵同窓会東京支部のホームページに総会風景等アップされておりますので、是非ご覧ください。

同窓会

●14回生卒業50周年記念同窓会

(平成24年4月28日)

柏原高校野球部が第33回選抜高校野球大会に初出場したのは、私たち14回生が高3になる春休みでした。選手は皆同級生。学校からバスが出て、学年有志が応援に行った懐かしい思い出を共有しています。昨春、その輝かしい野球部メンバーの寄贈品が母校の本館玄関に展示してあるというので、開会前の時間帯に希望者は母校に集合し「出場50周年記念プレート」を、主将の恒川十三雄氏に説明を受けながら見学しました。

その後、バスにて会場である氷上町ゆめタウン内ポップアップホールに到着。初夏を思わせる陽射しの中、まずは参加者141名が2班に分かれての記念撮影。「シミそばかすが又増える〜!」と美女軍団は気にしながらの撮影でしたが、50年の人生をしつかりと

刻み込んだ素晴らしい顔が見事に並びました。

会は実行委員長小田晋作氏の開会挨拶から始まり、物故された同学年生と東日本大震災で亡くなられた方々に黙祷をささげ、阿部容子氏による優雅な



日本舞踊の後、僭越ながら私が乾杯の音頭を取らせて頂き、歓談に入りました。

祝宴は、1組から11組までがクラスごと壇上に上り、5分程度のメンバーの紹介や出し物を披露し合ったり、往事の野球部の練習風景・応援風景の映像を鑑賞したり、お互いの近況報告や身体の不調話に花が咲き、懐かしさに盛り上がり親睦を深めた楽しい内容でした。ただ、物故者が増えてきた現実を受け止めざるを得ない辛さを味わう年齢にもなっていたことに気付かされました。

二次会は立派なカラオケ店での十八番合戦。我々の年齢に相応しい演歌が主流で、校歌でフィナーレを飾りました。今度はいつ会えるのか、それぞれまたの出会いを約束しながら故郷を後にしたのでした。

(岡田昌子・記)

同好会

◎氷上ゴルフ同好会／回を重ね次回は
127回目を迎えます！

年4回開催で実に30年を超える歴史を誇る我が「氷上ゴルフ同好会」。熱心な会員の皆様に支えられ、どんどん開催記録を伸ばしています。どのゴルフ場も歴史のある氷上会に驚きの声でご協力を頂き、いつも胸を張つての開催です。

現在会員数50名弱。最近健康に不安が出てリタイアされる会員もあり、会員数の減少に少々心配もありますが、新しい会員の増強に努めています（ダロスは70点代、130点代といろいろです）。各例会は会員の紹介もあり良いゴルフ場で安いプレー代を心がけ、茨城、千葉、埼玉、神奈川等と会場を回りながらの開催で、各回の参加者20数名で推移しています。

126回大会では2大会連続優勝の快挙もあり、いつも和気藹々の兎に角

楽しい会として歴史を刻んでいます。丹波他の地域にお住まいの同好者にも声を掛けながら、他地域との交歓も更に進めていきたいと思っています。

ゴルフを楽しまれている皆様へ、都合の良い会場の時だけでも参加されませんか。気楽にお声を掛けて下さい、新会員大歓迎です。

ご連絡を頂ければご案内を差し上げます。ホームページにもその都度結果と予定を掲載していますのでご覧下さい。

この1年の成績は次の通りです。

○第123回 平成23年9月9日／取手国際ゴルフクラブ

優勝 西川 宣孝

2位 大野富士夫

3位 塚口 智

○第124回 平成23年12月9日／立野クラシックゴルフ倶楽部

優勝 岡 吉明

2位 清水 則子

3位 藤田 徹



第126回大会の参加者

◆インフォメーション

○第125回 平成24年3月9日／筑波カントリークラブ

優勝 山本 喜則

2位 川畑 明光

3位 荻野晴一朗

○第126回 平成24年6月8日／筑波カントリークラブ

優勝 山本 喜則

2位 赤井 紀男

3位 川畑 明光

*注 125回大会が雨で皆さんスコアに満足できなかったので再挑戦ということで同コースで連続開催しました。

<http://pec-taiyo.co.jp/hikami> 又は

「氷上ゴルフ同好会」で検索して下さい。

氷上ゴルフ同好会事務係 岡 吉明

電話 048-460-1601

展覧会

●陶彫展に可部美智子さん出展

第59回陶彫展が去る7月23日～28日に東京・銀座の地球堂ギャラリーで開かれ、「山ざる」誌表紙を飾る可部美智子さんは「超えて……栄光への道!」(写真)と題する作品を出展されました。



●常岡幹彦画伯の個展

平成23年9月12日～18日まで、京橋のギャラリー・コパンダールで開催されました。

長年、墨を主体に故郷丹波をテーマに「玄」の世界を描き続けて来られたとありましたが、案内状の絵「雪降る日本海(白兎海岸)」は静謐な中に沁みじみした情感があり、薄墨で描かれた様な雪景色と下方の緑の松林が心に残り、六義園のしだれ桜は、一見華やかに見えますが、細やかな花の心が伝わって来る様な気がしました。

私は昭和40年代から、先生の絵のファンを自称、東京で開かれた展覧会は、香港在住の4年間を除き、殆ど拝見していますが、只好きな絵というところで、むずかしい事が解らず、大変失礼な感想ですが、今回は、とても心に優しく暖かく残る絵が多くありました。

頂いた案内状に「八十路のマッタダナカを描いています」と有りましたが、その後も大作を描いておられる御様子。いつまでもお健やかに。次の会を楽しみにしております。

(木呂子恵美子・記)



三和機材株式会社

- 建築金物 ■ 外構工事全般
- 建設土木資材の販売、施工 ■ 交通安全施設用品
- KC フォーム、JS フォーム

代表取締役社長 梅田 節二 柏高 昭和 36 年卒

〒411-0943 静岡県駿東郡長泉町下土狩 973-42

TEL (055) 986-6748 / FAX (055) 987-9174

今、求められている

新しいスタイルの物流トータルサービスをあなたに

情報誌・SP販促物などの梱包・発送管理、DM発送
データ入力等の情報処理、コールセンター、
事務局代行、在庫管理など一連業務を代行いたします

——— いつでもよりよいサービスを ———



株式会社ベターサービス

代表取締役 絹川 正 (山南町池谷)

本社：〒262-0003 千葉市花見川区宇那谷町 1501-2

TEL：043-257-0414 FAX：043-257-2865

<http://www.betterservice.co.jp>

e-mail：kinugawat@betterservice.co.jp

認定NPO法人アジアの新しい風 理事・事務局長
<http://www.npo-asia.org>

上 高 子 (氷上町出身)

〒154-0016 東京都世田谷区弦巻2-18-22-414
TEL / FAX 03-5426-6714
e-mail takako-ue@t05.itscom.net

アジアの有名大学で日本語を学ぶ学生を支援するNPOです。
国税庁によって認定NPOに認定されました。当NPOへの寄附金は、
確定申告をすることで、税額控除の対象になります。
すなわち、寄付総額から2000円を差し引いた金額の40%が税額より
差し引かれます。ご支援をよろしくお願いいたします。



エクステリア専門商社



株式会社 トコナメエプコス

代表取締役 広瀬 寿和 (山南町和田)

〒160-0003 東京都新宿区本塩町23 第2田中ビル
TEL 03-3354-0211 FAX 03-3354-7767

柏 13 回・はくとみかい

柏高 昭和 36 年卒 氷上ゴルフ同好会会員

池 畑	廣 士 郎
上 野	忠 明
大 賀	勝 恵
大 野	富 士 夫
岡	吉 明
荻 野	智 司
堀	博 之
山 田	良 一

あなたの町の「石屋さん」
そんな石屋をめざしています！！

墓石・霊園・建築石材・造園石材

(株) 丹波総合石材

代表取締役 堀 公二 柏高 昭和 36 年卒

いしやは ここよ

 **0120-1480-54**

工場・事務所 TEL 0795-72-3032

FAX 0795-72-4343

<http://www.tanba-sekizai.com>



自動車補修部品販売



株式会社

京 浜

代表取締役社長 上武 正次 柏高 昭和 36 年卒

本 社 〒292-0826 千葉県木更津市畑沢南 1-2-37

TEL 0438-36-0211(代)

営業所 市原営業所・千葉営業所

株式会社 アイ・ケイ・アイ I.K.I co.,LTD

株式会社 ホームワールド

Urban Cocoon 「風を感じる時」

暮らしに潤いと幸福感を提案・都市生活者のオアシスの店

インテリアブリックス・アパレル・雑貨全般

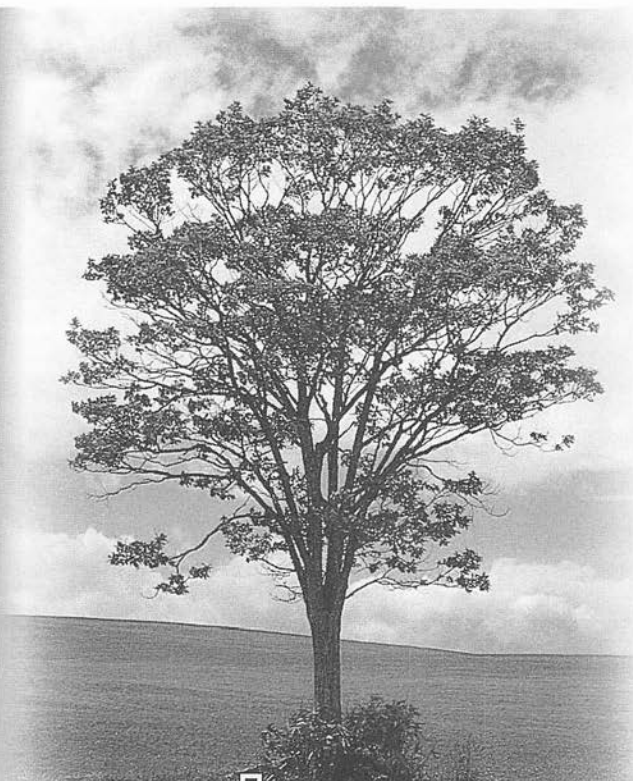
輸入卸&生産管理 & 小売り

代表取締役社長 岸田 勇 柏高 昭和 36 年卒

東京都中央区日本橋人形町 3-7-10 Doll3

TEL 03-3249-5261 / FAX 03-3249-5262

人はだれでも、一生に一冊の本が書ける



メモリアルブックスのホンゴ出版

あなたの **本** 作りませんか

自分史・評伝・記念誌・小説・エッセイ・句集・詩歌集・写真集

弊社は長年、自分史の制作を手がけております。
自費出版のご希望がございましたら、お気軽にご相談下さい。

安価で明瞭な35万円システム

少数数でも費用は安心！

A5判 100ページ・100部の印刷で

判 型：A5判（タテ21cm・ヨコ14.8cm） 頁 数：100ページ
部 数：100部／組み方：10ボ×40字×16行（標準・1ページ640字）

株式 **ホンゴ出版** 代表取締役社長 池田 忍

〒247-0005 神奈川県横浜市栄区桂町1-1-1
TEL 045(895)2712 FAX 045(895)4338

伝えたい

柏原織田まつり

届けたい

丹波新聞

丹波新聞

検索

丹波新聞社

〒669-3309 丹波市柏原町柏原201

tel.0795-72-0530 fax.0795-72-1956

週2回(日・木)発行 1ヶ月1,220円(郵送料200円)

郷友の皆様へお願い

▼同じふるさとをもつ者の親しさは、親兄弟にも似て心よく、その気がねのない交りは、互いに清新なげみを呼びおこします。そんな仲間のひろがりを、この小誌は求めつづけます。

▼この雑誌は毎号全会員に贈ります。同郷者の全員が会員ですから、登録のない方や住所変更等がありましたらぜひお知らせください。

▼関東水上郷友会は、すべて有志のボランティア活動によって運営されています。『山ざぐる』誌や通信費等の資金源も、有志の寄付、協賛広告料、郷友会会費等によって支えられています。

▼広告料は名刺広告五千円、半頁広告一万五千円、全頁広告三万円です。何卒ご協力お願い致します。

▼年会費の二〇〇〇円は強制的なものではありませんが、右の事情ご賢察の上、同封振込用紙にてお振込みくださいますようお願い致します。

▼これだけ充実した会誌をもつ同郷会はないとうらやましがられるたびに、“丹波のきずな”の強さを思います。

(山ざぐる編集部)

芦田重秋

あだち眼科院長／医学博士
順天堂大学眼科 非常勤講師

足立和孝

〒347-0015 加須市南大桑字下鳩山一六二〇一
TEL 〇四八〇六五五九八八
FAX 〇四八〇六五五九八八
E-mail: kazu358@pastel.ocn.ne.jp

足立和巳

東京都渋谷区日中友好協会理事
日産労連・エルダークラブ理事
E M ネット 埼京理事

〒183-0051 東京都府中市栄町一―一五―二七
TEL・FAX 〇四二―三六四―七三二七

株式会社ナレッジリンク
足立国際会計事務所

代表取締役
税理士・米国公認会計士 (Certificate)

足立知佳子

〒152-0035 東京都目黒区自由が丘一―三十四UWII自由が丘ビル六〇二
TEL 〇三三七―八八〇四七 FAX 〇三三七―八八二四七
E-mail: cadachi@aia.gr.jp

足立静雄

飯田光雄

〒285-0025 佐倉市錦木町九八一―一―一〇四
電話 〇四三―四八五―〇五〇三

生 田 清 弘

東京都世田谷区成城一―七―七
電話〇三―三四二五―一八九三

井 本 義 一

上 野 重 喜

氷上郷友会監事

臼 井 小 五 郎

〒275―0025
習志野市秋津一―四―五〇二
TEL〇四七―四五三一―八八五七
(丹波市氷上町絹山出身)

有限会社 P P C 大洋

岡 吉 明

〒351―0014
朝霞市膝折町四―四―三〇
TEL〇四八―四六〇―一六〇一
FAX〇四八―四六〇―二三九七
<http://www.pcc-taiyo.co.jp>

岡 田 昌 子

金
出
一
郎

荻
野
哲
男

〒350-1331
埼玉県狭山市新狭山三一〇-三三一
電話〇四二一九五三一八五七一

岡
林
逸
男

〒177-0051
東京都練馬区関町北二一七-一七

栗
田

功

久
保
春
雄

〒300-0031
土浦市東崎町十三-二一六〇四
電話〇二九八一二二-二九七八

木
呂
子

恵
美
子

坂
上
勝
朗

坂
上
明

近
藤
仁
司

〒112-0012 東京都文京区大塚二丁目四十八番五〇一
電話 〇三―三九四三―九一一五

合唱指揮者

笹
倉
強

〒352-0014 新座市栄四丁目五番二五
TEL・FAX 〇四八―四七七―五六四〇

仲 山 坂
口 上
一 泰
聰 男 登

仙台市在住

坂
上
豊

高 見 嘉都司

〒173-0025

東京都板橋区熊野町四〇番十一号

電話 〇三—三九五六—〇六〇〇

電話 〇三—三九七三—六〇五六

高 見 秀 史

いい眠りと健康の為にNPO法人
<http://www.sas-j.org/>

谷 口 浩 章

「柏陵同窓会東京支部」で検索いただくと
東京支部ホームページがご覧いただけます。

株式会社 シードコーポレーション

代表取締役 千 種 倫 幸

〒104-0061 東京都中央区銀座二丁目二—九

電話 〇三—三五六七—九七〇〇

日本画家

常 岡 幹 彦

〒357-0205

飯能市白子一七三—七
電話 〇四—二九七八—一〇九八

鶴 田 宏

日本舞踊
端 唄

西 崎
根 岸

祥 妙

〒224-0027 横浜市中区大綱町五〇〇-八
電話 〇四五-五九一-六六五五

西 山 裕 三

〒669-4302 兵庫県丹波市市島町
中竹田 一一七一

原 谷 洋 美

青葉山 真照寺 都立八王子霊園隣り
八王子 青葉霊苑 第二期墓地分譲案内中
和合廟（永代供養墓）受付中
住 職 堀 井 隆 川

〒193-0821 東京都八王子市川町四九三-一二
電話 〇四二-六五一-二〇一一
FAX 〇四二-六五一-二〇三三

山 口 和 久

恵理子・賢一・寧々・藤吉郎秀吉・
由佳・愛々・茶々・風人・愛莉・思温
〒196-0031 東京都昭島市福島町二一〇-二七
電話 〇四二-八四八-四〇五五
<http://plaza.rakuten.co.jp/yamaguchi.0330/>

渡 邊 隆 男

集	編
記	後

★千坪もある隣の社宅が売却され、七月初めから更地にする工事の真っ最中である。鉄筋四階建て

十六軒の建屋が三棟、緑の多いなんとも贅沢な社宅だったのだが、その残骸瓦礫たるや尋常ではない。たった三棟でこの工事日程とこの量なのだから、一瞬で壊滅させる地震大津波の威力と被災地の甚大な被害は想像を絶するのだろうかと思えばかりで、まだ何も出来ないで、日々の生活に右往左往している。

★「三五度の炎天下、五歳の孫娘と高見ヶ城山へ登りましたが(地元民は市ヶ谷、幡ヶ谷と同様に「ヶ」をつけてきました)、井戸跡は示せても風呂場や馬場の跡地は教えられません。歴女になったら困りますね」 (徳田)

★私の同級生もついに今年の春で全員が定年退職を迎えた。それまでは仕事や仕事にまつわる関連情報を求めているに違いないが、そんな情報収集活動も一段落

するに違いない。社会の動きに高所から距離を置きながら眺める、そんな生活になるのではないか。半ば社会に、半ば自然や草木に、そして郷里への郷愁に思いを馳せる、そんな生活が始まると思う。そうなるとこの「山ざる」への興味や関心がきつと高まってくるだろう、と思いたい。

★本号も会員の積極的な投稿により前号より10ページも多い174ページの大冊となりました。それだけバラエティに富んだ内容となり、ゆつくり楽しみながら読んで頂けるものと期待しております。もうお気付きのように、今回初めてのカラーページを設けました。「MYギャラリ」欄で、会員から寄せられた芸術的な作品を展示していこうという企画です。ご寄稿をお待ちしております。(池田)

★僭越ながら名ばかりの編集長を仰せつかって4号目の発行となりますが、時の過ぎ行く速さに驚かされます。投稿し、読んで下さる皆様に支えられ、編集委員

皆様の努力、二玄社渡辺名誉会長様やホンゴ出版池田様のご尽力、可愛い表紙を陶彫して下さる可部様、広告や名刺にて財政面を支援下さる方々、丹波の有志の方々、谷書店様のご協力により、郷友会自慢の内容豊富な会誌が継続されています。この丹波のつながりの素晴らしさに今年も感謝感激です。

山ざる 第43号 定価500円

平成二十四年十一月一日発行

〈編集委員〉
足立静雄 池田 忍 井徳正吾
上 高子 上田正文 上田道代
岡 吉明 岡田昌子 木呂子恵美子
坂上勝朗 常岡幹彦 鶴田ゆき子
徳田八郎衛 原谷洋美 藤原ひさ子
本城英明

発行者 関東水上郷友会会長 坂上勝朗

〒351-0014 埼玉県朝霞市膝折町4-4-30
関東水上郷友会事務局 (岡吉明)

振替〇〇四八(四六〇)一六〇一
〇〇四八(四六〇)一六〇一

製 作 株式会社二玄社
編集協力 株式会社ホンゴ出版

おもわす 新し い

NEXT



人びとが暮らしの中で願っていたことに、それ以上のモノで、最良のカタチで応えていきたい。
そして、人びとの「心」を包み、「夢」を装うことができる企業
ネクスタはそういう存在であり続けたいと考えています。

ネクスタ株式会社

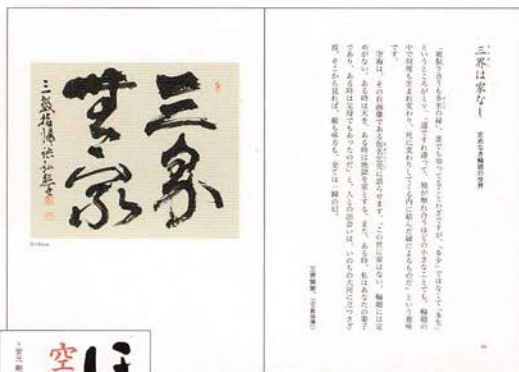
東京支店 111-0051 東京都台東区蔵前2-4-5 K-FRONTビル TEL 03-3861-2331

ネクスタ ラッパイ株式会社

東京工場 121-0011 東京都足立区中央本町5-22-12 TEL 03-3849-6611
千葉工場 270-0202 千葉県野田市関宿台町2192 TEL 04-7196-1721

ネクスタ パッケージ株式会社

栃木工場 323-1104 栃木県下都賀郡藤岡町藤岡4938 TEL 0282-62-3321



「お大師様」の言葉を親しみやすく紹介。

空海の言葉

ほつと
とする

文・安元 剛
書・谷内弘照

空海の人間像と真
言密教の教えを再
現。密教学者と神
護寺住職の書によ
る理想の合作。

B6判変型・160頁
●1260円



悩み抜く一人ひとりに深く響く。
ほつとする親鸞聖人のことば

川村妙慶文／高橋白鷗書
●1050円



捨てて生きることこそ幸福への道。
ほつとする仏教の言葉
[捨てて生きる]

ひろさちや文／村上翠亭書
●1050円



日頃の疲れた心を癒す。
ほつとする禅語70

渡會正純監修／石飛博光書
●1050円



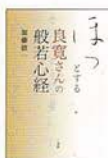
話題の著者、エッセイ画集。
ほつとする老子のことば
[いのちを養うタオの智慧]

加島祥造画・文
●1050円



楽に生きるための知恵を説く。
続ほつとする禅語70

野田大燈監修／杉谷みどり文
石飛博光書
●1050円



良寛さんの、心にふれる…。
ほつとする良寛さんの
般若心経

加藤儼一著
●1260円



人生の知恵を優しい言葉で。
ほつとする論語70

杉谷みどり文／石飛博光書
●1260円



もっともやさしい仏の教え。
ほつとする般若心経

野田大燈文／高木大宇書画
●1260円



二玄社

会長 渡邊隆男